

余市町

登町4遺跡

(2013年度)

北海道横断自動車道黒松内釧路線(余市～小樽間) 建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2014. 2

余市町教育委員会



登町4遺跡全景（北東から）



FC-1 検出状況（1）



FC-1 検出状況（2）



FC-1 検出状況（3）

口絵 2



土層断面 a - b



土層断面 a - b



土層断面 c - d



土層断面 c - d



土層断面 e - f



土層断面 e - f

口絵 4



I 群 a 類土器



I 群 b 類土器



Ⅱ群土器



Ⅲ群土器

口絵 6



接合土器



接合剥片



剥片石器



剥片石器

異形石器



礫石器

序

余市町は北海道南西部、積丹半島の基部に位置し、北海道内では温暖な気候に恵まれ、豊かな自然を背景に、江戸時代よりニシンの千石場所として栄え、明治時代以降からはリンゴ・ブドウなどの果樹栽培が盛んになり、これらの第一次産業を基盤として発展してきた町です。

このように恵まれた自然を有する我が町の周辺には太古の昔より人が住んでおり、古い歴史を有しております。それを物語る文化財が町内に点在し、国指定重要文化財史跡「旧下ヨイチ運上家」、国指定史跡「大谷地貝塚」、国指定史跡「フゴッペ洞窟」、国指定史跡「旧余市福原漁場」をはじめ、北海道指定文化財2件、余市町指定文化財34件を数えます。

なかでも埋蔵文化財につきましては、現在64ヶ所もの遺跡や遺物包蔵地が存在することが確認されており、先人たちの営みの痕跡が数多く残されております。昨年度に引き続いて発掘調査が行われた登町4遺跡もそのひとつであり、町内では最も古い時代の土器をはじめ数多くの遺物が出土しました。今後はこれらの成果を広く地域の方々に紹介し、自分たちが住む土地の豊かさを知ってもらい、文化財保護活動の一助とする所存です。

今回の調査にあたりましては、範囲確認調査から本発掘調査に至るまで北海道教育庁より種々のご指導を、また、東日本高速道路株式会社には多大なご支援を頂きました他、関係者のご努力や地域の皆様のご理解を賜りました。これら多数の方々のご協力によって無事調査を終えることができました。ここに衷心より厚く御礼申し上げ、登町4遺跡発掘調査報告書刊行のご挨拶といたします。

平成26年2月

余市町教育委員会
教育長 中村寿仁

例 言

1. 本書は東日本高速道路株式会社北海道支社小樽工事事務所による北海道横断自動車道黒松内釧路線（小樽～余市間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（登町4遺跡 登載番号D-19-27）の報告書である。
2. 本書の作成は余市町教育委員会社会教育課にて行い、編集は小川康和が担当し、各章および各節の執筆は以下の通りである。

第I章1～3・第IV章 小川、第II章1～3 遠藤、第I章4・第III章1～4 花田

3. 発掘調査および整理作業体制

- ・受託期間 平成25年4月1日～平成26年3月31日
- ・調査期間 平成25年6月1日～平成25年10月31日
- ・整理期間 平成25年11月1日～平成26年2月28日
- ・調査区所在地 余市郡余市町登町306番地3・同306番地4
- ・調査面積 3,000㎡
- ・事業主体 東日本高速道路株式会社北海道支社小樽工事事務所
- ・調査主体 余市町教育委員会 教 育 長 中村寿仁
社会教育課長 松井正光
同 主 幹 藤田幸男
同 主 幹 乾 芳宏
同 主 幹 浅野敏昭
同社会教育係長 桜井 仁
同博物館学芸員 小川康和
- ・調査担当者 小川康和 乾 芳宏
- ・調査員 花田直彦
- ・調査補助員 遠藤むつみ 岩谷維千歌
- ・事務補助員 藤原 郁
- ・発掘作業員 阿部栄子 荒関 修 氏家洋子 宇生まゆみ 小川智博
奥寺武男 小黒明久 柏谷雄介 小泉幸司 後藤孝博
小林亜由美 佐藤 裕 杉本恵美 杉本良子 須田秀美
高橋亜矢子 谷口 涼 玉谷仁司 玉山義信 中川賢次
成澤太基 光成正彦 湯谷浄治 横山由紀子
- ・整理作業員 阿部栄子 小川智博 小黒明久 柏谷雄介 横山由紀子
- ・整理作業分担 (遺物拓本・トレース) 小川智博 小黒明久 柏谷雄介
(遺物実測・トレース) 阿部栄子 横山由紀子
(地形図・分布図等作成) 岩谷維千歌
(図版作成) 遠藤むつみ 阿部栄子 小川智博 小黒明久
柏谷雄介 横山由紀子
(写真撮影) 岩谷維千歌 市川靖雄 (市川写真場)
(データ整理・各表作成) 遠藤むつみ 藤原 郁

4. 本遺跡から出土した遺物については、余市町教育委員会が保管する。

5. 発掘調査および整理作業に下記の方々に指導、助言、協力を頂いた（順不同、敬称略）。
- 北海道教育委員会 長沼 孝・田才雅彦・工藤研治・西脇対名夫・中田裕香・宗像公司・高橋和樹、北海道開拓記念館 右代啓視・鈴木琢也、(公財)北海道埋蔵文化財センター 千葉英一・三浦正人・田口 尚・熊谷仁志・笠原 興・菊池慈人・鈴木宏行・坂本尚史・直江康雄・立田 理・芝田直人・山中文雄・阿部明義・酒井秀治、釧路市立博物館 木村俊宏、釧路市埋蔵文化財調査センター 石川 朗・高橋勇人・澤田恭平、帯広市教育委員会 北沢 実・山原敏郎、函館市縄文文化交流センター 阿部千春、市立函館博物館 野村祐一、平取町教育委員会 森岡健治、小樽市教育委員会 石川直章・石神 敏、小樽市総合博物館 佐藤卓志、今金町教育委員会 寺崎康史・宮本雅通、石狩市教育委員会 工藤義衛、江別市教育委員会 佐藤一志、仁木町教育委員会 嶋井康夫、恵庭市教育委員会 鈴木将太、上屋真一、伊達市噴火湾文化研究所 大島直行・青野友哉、札幌国際大学 越田賢一郎・坂梨夏代、 野村 崇、遠藤香澄、佐藤美智雄、佐々木千春

凡 例

1. 本書に掲載されている図の縮尺については、基本的に以下の通りである。

調査区土層断面 1/50

土器 1/2 剥片石器 1/2 礫石器 1/3

なお、例外についてはスケールを参照して頂きたい。

2. 写真図版の縮尺については任意である。

本文目次

序	i
例言	ii
凡例	iii
目次	iv
第Ⅰ章 調査の概要	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査範囲	2
3. 調査の方法	3
4. 遺物の分類	4
第Ⅱ章 遺跡の環境	
1. 遺跡の立地	6
2. 遺跡の地形・地質	7
3. 基本層序	10
第Ⅲ章 出土遺物	
1. 土器	17
2. 石器	34
3. 剥片集中範囲	56
4. 石鏃の形態及び分類別出土傾向	58
第Ⅳ章 まとめ	64
第Ⅴ章 附編	
1. 余市町登町4遺跡出土黒曜石の産地同定	80～82

図版目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 調査区周辺図	2
第3図 グリッド配置図	4
第4図 余市町内の主な遺跡位置図	6
第5図 調査前地形図	8
第6図 最終面地形図	9
第7図 基本土層模式図	10
第8～13図 土層断面図(1)～(6)	11～16
第14～19図 土器(1)～(6)	20～25
第20～23図 土器分布図(1)～(4)	30～33
第24～29図 石器(1)～(6)	37～42
第30～35図 剥片石器・剥片分布図(1)～(6)	46～51
第36～39図 礫石器・礫分布図(1)～(4)	52～55
第40図 FC-1 検出状況・接合資料	56
第41図 FC-1・FC-2 接合資料	57
第42～43図 石鏃の形態及び分類(1)～(2)	60～61
第44図 石鏃の形態別分布図	62
第45図 平成24年度出土接合資料	66
第46図 平成24・25年度遺物接合相関図	67
第47～50図 平成24・25年度土器分布図(1)～(4)	68～71
第51～55図 平成24・25年度剥片石器・剥片分布図(1)～(5)	72～76
第56～57図 平成24・25年度礫石器・礫分布図(1)～(2)	77～78

表目次

第Ⅱ章 遺跡の環境	
表Ⅱ-1 余市町内の主な遺跡一覧	7
第Ⅲ章 出土遺物	
表Ⅲ-1～4 掲載土器一覧表(1)～(4)	26～29
表Ⅲ-5～7 掲載石器一覧表(1)～(3)	43～45
表Ⅲ-8 石鏃の形態及び分類一覧表	58～59
表Ⅲ-9 出土遺物一覧表	63
表Ⅲ-10 出土土器比率	63
表Ⅲ-11 出土石器比率	63
第Ⅳ章 まとめ	
表Ⅳ-1 平成24・25年度出土遺物一覧表	79
表Ⅳ-2 平成24・25年度出土土器比率	79
表Ⅳ-3 平成24・25年度出土石器比率	79

写真目次

口絵1 登町4遺跡全景(北東から)	
FC-1 検出状況(1)・(2)・(3)	
口絵2 土層断面 a-b・c-d	
口絵3 土層断面 c-d・e-f	
口絵4 I群a類土器・I群b類土器	
口絵5 II群土器・III群土器	
口絵6 接合土器・接合剥片	
口絵7 剥片石器・異形石器	
口絵8 礫石器	
写真1 発掘調査区風景	
写真2 発掘作業風景	
写真3 出土土器(1)	
写真4 出土土器(2)	
写真5 出土土器(3)	
写真6 出土土器(4)	
写真7 出土石器(1)	
写真8 出土石器(2)	
写真9 出土石器(3)	
写真10 出土石器(4)	
写真11 出土石器(5)	
写真12 出土石器(6)	

第I章 調査の概要

1. 調査に至る経緯

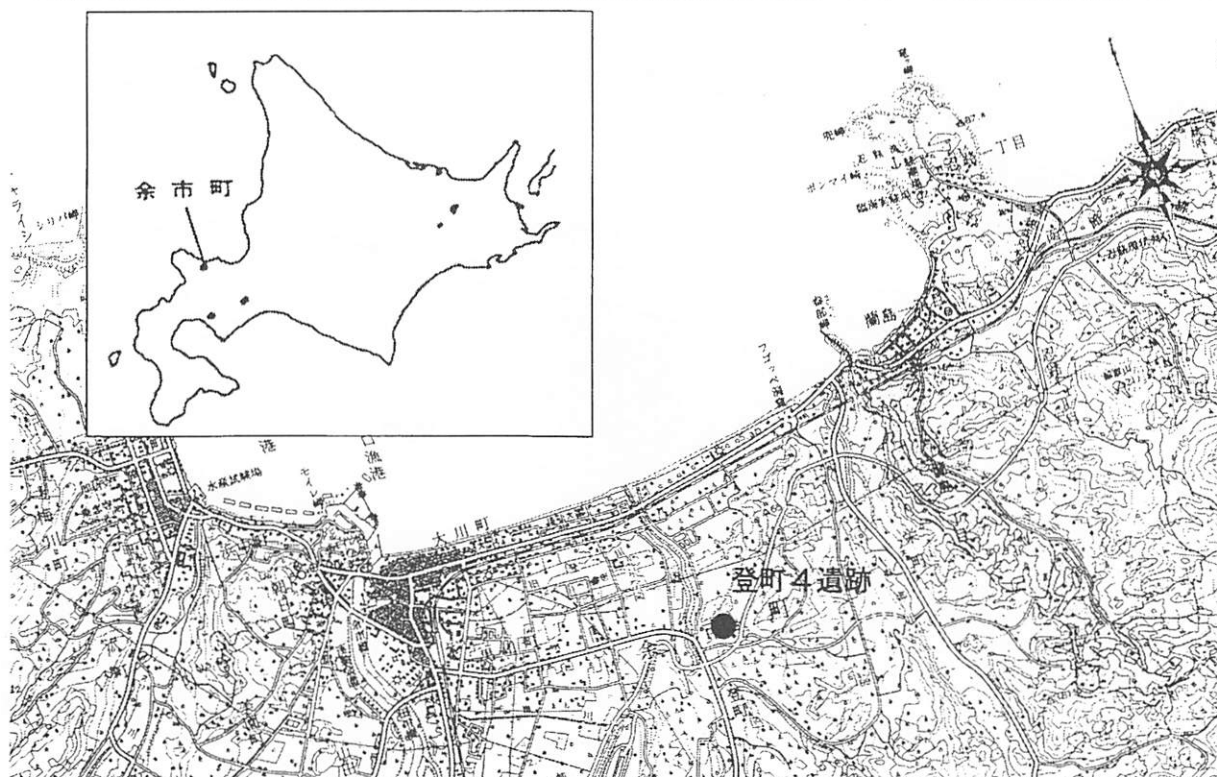
余市町は北海道南西部、小樽市の西側約25kmに位置し（第1図）、春から秋にかけては、余市町や仁木町には旬の果実等を求め、積丹方面には釣りや海水浴のほか海産物を求め、ニセコ方面にはアウトドアや温泉等を目的に、冬期には道内はもとより、本州や海外からの多数のスキー客が千歳や札幌方面から訪れる。しかし、公共交通機関を利用したの往来は運行本数の少なさもあってやや不便であるため、年間を通じて大型バスや一般車両が頻繁に行き交う地域であり、幹線道である国道5号線は度々渋滞が発生し、その対策は以前からの課題となっていた。

北海道横断自動車道黒松内釧路線余市～小樽間は延長約23kmの国土開発幹線自動車道建設法に基づく道路である。建設計画は平成3年に基本計画決定、平成11年に整備計画決定、平成18年に独立行政法人日本高速道路保有・債務返済機構と東日本高速道路株式会社（以下、NEXCO東日本）による協定締結、同年に国土交通大臣からNEXCO東日本への高速道路事業としての事業許可が出された。

余市～小樽工事区間における埋蔵文化財については、平成13年2月に日本道路公団北海道支社（当時）から北海道教育委員会に事前協議書が提出され、同年3月に北海道教育委員会より回答が出された。それまでの協議を引継いだNEXCO東日本北海道支社小樽工事事務所は平成21年4月に事前協議書を提出し、余市町教育委員会から北海道教育委員会に進達した。

これを受け北海道教育委員会では、文化・スポーツ課文化財調査グループ高橋和樹主査・工藤研治主任・宗像公司主任を余市町に派遣して、平成21年4月22日に余市町教育委員会とともにNEXCO東日本北海道支社担当者立会いの下、道路建設予定地内の所在調査（踏査）を実施、各所において遺物が採集されたため、同年6月に北海道教育委員会より試掘調査が必要との回答がなされた。

これに基づき平成22年11月10・11日に北海道教育委員会より文化・スポーツ課文化財調査グループ



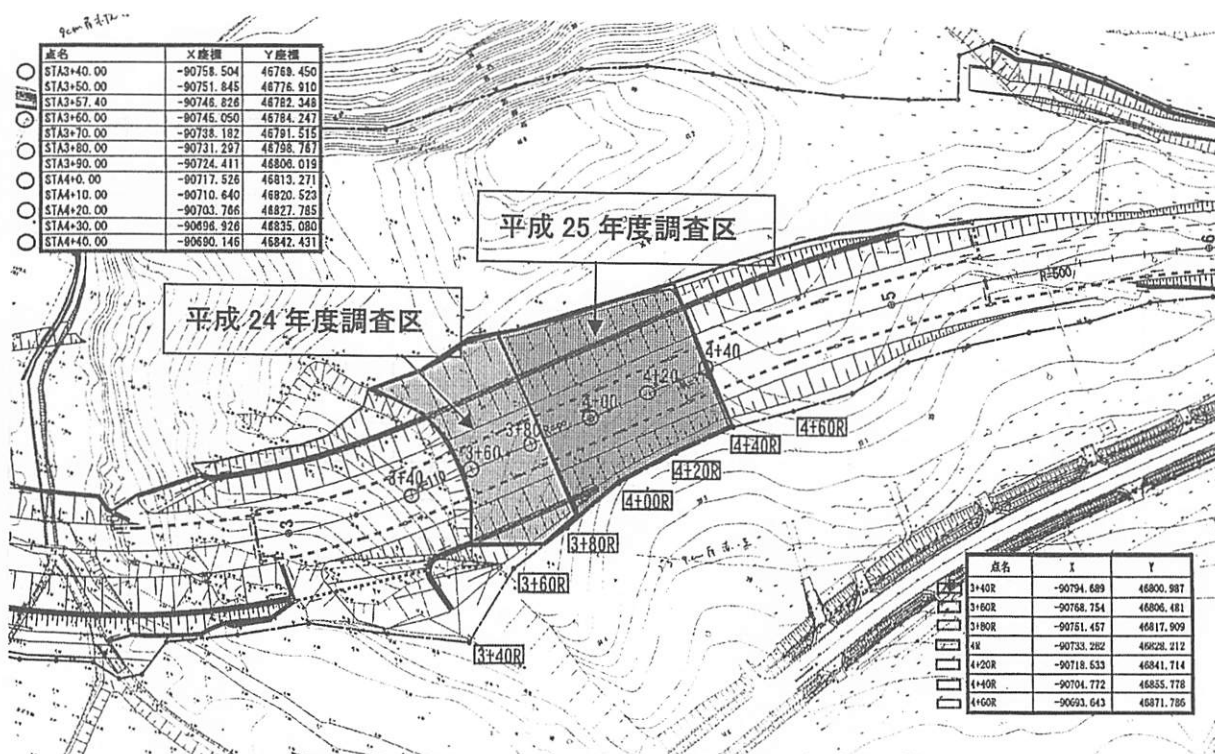
第1図 遺跡位置図 (S=1/70000)

田才雅彦主査が派遣され、NEXCO東日本北海道支社・余市町教育委員会各担当者が立ち会いの下、試掘調査を実施した。この試掘調査により遺物の出土が確認されたことから、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地「登町4遺跡」の範囲に当たり、工事に先立ち発掘調査を行い記録保存が必要である旨の回答が平成22年11月に北海道教育委員会からなされた。

同年12月に北海道教育庁生涯学習推進局文化・スポーツ課にて、同課とNEXCO東日本北海道支社と余市町教育委員会の三者により、発掘調査開始年度およびその時期、発掘調査体制などについて協議を行った。しかし当該地の発掘調査は余市町教育委員会を主体として実施するとの結論には至ったが、それ以外については継続的に協議を行う事となった。平成24年1月までにNEXCO東日本北海道支社と余市町教育委員会により数回の協議を重ね、平成23年度内に調整・準備を進め、平成24・25年度の2ヶ年に亘り発掘調査を実施する結論に至った。平成23年12月26日付でNEXCO東日本北海道支社より、周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の通知が提出され、平成24年1月23日付北海道教育委員会より工事着手前の発掘調査が必要である旨が通知された。その後の協議により、NEXCO東日本北海道支社小樽工事事務所と余市町教育委員会との間で両年度に亘る発掘調査に係る協定を平成24年3月28日、平成24年度委託契約を同年4月2日に締結した。これに基づき平成24年度は7月1日より発掘調査を開始し、10月31日に終了、翌年2月末まで整理作業を行い、平成25年度の発掘調査については、委託契約を平成25年4月1日に締結し、同年6月1日より10月31日まで発掘調査、翌年2月末まで整理作業を行った。

2. 調査範囲

登町4遺跡は余市町北東部の海岸線より直線距離にして約1.3km内陸に入った登川右岸の標高約30～40mを測る丘陵平坦面～緩斜面上に位置する（第1図）。前年度調査区の南西側は断崖になっているが、当該箇所は土取り場としてかつて盛んに土砂を採取され町内各所の埋め立てに利用された経緯があり、その掘削によって生じた人工的な地形で、本来の丘陵の突端はさらに南西方向の余市町市街



第2図 調査区周辺図 (S=1/2500)

地側へ最大で100m程伸びていた。今年度の調査区は、前年度調査区の東側に隣接する部分で（第2図）、調査区の北側約50mにピークを持つ丘陵の中腹に広がる緩斜面上に位置する。面積は約3,000㎡、東西に長軸を持つ台形状を呈しており、南側は私有地と隣接し緩斜面を下った最も低い位置には、北後志東部地区広域営農団地農道（通称フルーツ街道）が東西方向に伸びている。

登町4遺跡が所在する登地区は、明治末期から現在に至るまで、余市町を代表する果樹栽培の盛んな地域であり、発掘調査区周辺の丘陵地帯にはリンゴやナシ・ブドウ等の果樹畑の広がりが望める。また登町から栄町にかけての余市町東側は、国指定史跡「大谷地貝塚」や「フゴッペ洞窟」、道指定史跡「西崎山環状列石」、「フゴッペ貝塚」等の重要遺跡が密集しており、埋蔵文化財が多数所在する余市町の中でも、際立った地域と言える。

3. 調査の方法

今年度の調査区はかつてブドウ畑として使用され、現在は休耕地となっており、ササなどの雑草が繁茂している。地元では通称「栗の木台」と呼ばれるように、かつてクリ林であったようであるが、現在はナラ・カラマツを中心に、クルミ・シラカバ・クリ・イタヤカエデ・ナナカマドなどの樹木が周辺に密集し、中でもナラは樹齢50～60年ほどと思われる大木が見られる。調査区内にはこれらの大木の木根は僅かであるが、平成24年度調査を開始する際にNEXCO東日本北海道支社によりそれらはあらかじめ伐採を行い、僅かな遺物包含層を破壊しないよう抜根せず、残った木根の周辺を可能な限り手作業で切断しながら掘り進め、入り込んだ遺物についても層位毎に取り上げることとした。

平成24年度の樹木伐採後にNEXCO東日本北海道支社により設置された高速自動車国道の道路用地の境界杭およびセンターラインの基準杭からグリッド設定を行い、遺物の点取り等を行う際の基準杭は木杭を、それ以外のグリッドライン交点については簡易測量によりパイル杭を設置し、掘削や遺物の取り上げ等を行う際の基準とした。今年度はその前年度からのグリッド設定を延長し使用している。

グリッドの設定の詳細についても前年度と同様に、高速自動車国道のセンターライン上の基準点STA3+60（X座標-90745.050 Y座標46784.247）と点STA3+80（X座標-90731.297 Y座標46798.767）の2点を結んだ直線（北東-南西方向）を基準として、その2点がラインの交点となるように直交するグリッドライン（北西-南東方向）を設定した。平成24年度調査区西隅がA1グリッドとなるようにグリッドラインには北西-南東方向にアルファベット、北東-南西方向のグリッドラインに算用数字を付しており、今年度の調査区の西隅はA10グリッドとなり、使用したアルファベットはA～N、同じく算用数字は10～21である。各グリッドの規格は5×5mとし、呼称は西隅のライン交点で表示した（第3図）。

遺物包含層上の表土・耕作土層の除去については、表土の雑草、細かな枝葉等の堆積を手作業で除去した際、遺物が確認されたことから、昨年度に引き続き重機を使用せず、スコップや移植ゴテ・手鋤等にて掘削し、廃土運搬も含めて全て人力のみで行った。また、遺跡全体の状態や遺物の出土傾向を把握するため、調査の初段階として25%調査を実施し、その結果に基づき全体の作業の調整を行った。

掘削により発生した廃土については、調査区北東側へと仮置きし、緩斜面地形のため降雨の際など土砂が流れ出す恐れがあることから、NEXCO東日本北海道支社および施工業者である中山組の協力により重機での整地を行い土砂の流出を防いだ。また、発掘調査区の南東側は緩やかに傾斜しながら私有地と隣接しており、降雨による土砂流出に備えその境界部分に土嚢を積み上げた。

遺物の出土状況や土層断面等の図化については、シン技術コンサルのトータルステーションを主体に実施し、画像処理ソフトIllustratorにてデジタル処理しデータ化を図った。土器片や定型的な石器等の主要な遺物については出土位置を記録しNo.を付して取り上げを行い、その他の遺物については

5×5mのグリッドを四分割した小グリッドでの層位毎の取り上げとした。

写真撮影については、55mm一眼デジタルカメラ（最大1220万画素）を使用し、現場作業の中では遺物の出土状況や作業風景等を対象とし、整理作業の中でも遺物の撮影等に用いた。

調査区は昨年度と同様に緩斜面にあり、戦前は主にリンゴ等の果樹栽培に利用され、戦後の農地解放以降は野菜畑等への転換が図られた。ブドウの栽培も行われたようで、その痕跡として所々に棚を支えるアンカーや廃棄された番線や棚木等が地面から顔を覗かせる。事務所・物置・休憩所として使用する仮設ハウスについては、北後志東部地区広域営農団地農道より仮設道路で300mほど緩斜面を登った調査区北東側に設置した。

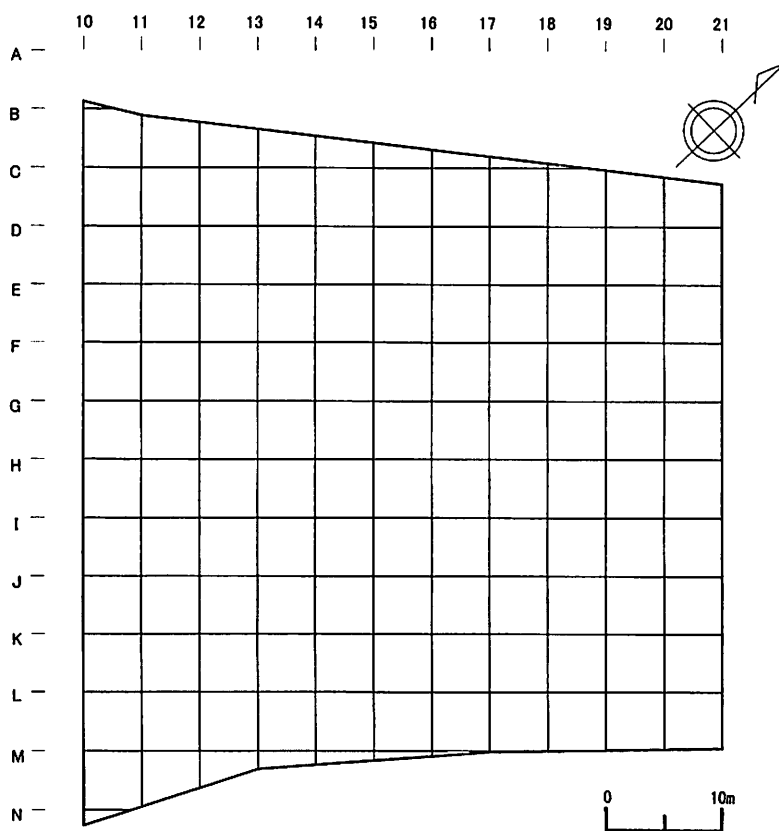
また当該地は市街地や幹線道路から離れており、電気については農道沿いに設置された電柱から工用仮設道路沿いに新たに設けた仮設電柱へと電線を敷き確保したが、水道を新たに引くことは難しく、ワゴン車に農業用等のウォータータンクを積み必要量を運搬し、仮設ハウスにてポリタンクへ移し替え、飲料・手洗い・作業用などに使用することとした。11月以降の整理作業場所については、担当部署である余市町教育委員会社会教育課施設との往復等を考え、現場の仮設ハウスを撤去し、町内入舟町に所在する余市水産博物館横に仮設ハウスを移設して冬期間の整理事務所とすることとした。

遺物の洗浄や注記作業については、可能な限り発掘作業と並行しながら進め、特に雨天時に発掘作業を中止せざるを得ない場合に集中的に行い、発掘作業終了後も引き続き行った。

土器片の接合作業については、同一グリッド内での接合関係を確認後、隣接するグリッドやさらに離れた別グリッド間の確認も行い、前年度調査区と隣接するグリッド周辺は前年度出土資料との接合作業を実施した。しかし接合された資料は僅かで、器形を復原できたものは無い。そのため口縁部や胴部等の特徴的なものを抽出し拓本を主体とした。なお、出土した土器片の殆どは表面が摩耗、劣化し、脆弱な状態のものが多いため、慎重に洗浄した後、(有)新成田総合社のナチュラルコートを使用し、表面の強化を図った。また、今年度は剥片集中が検出されたこともあり、前年度出土分も含め剥片の接合作業も重点的に行った。

4. 遺物の分類

出土遺物は当初の予想では、前年度調査の総合計を超えるものと見込んでいたが、結果的には下回り、層位別ではⅠ層1,373点、Ⅱ層7,221点、Ⅲ層850点が出土している。剥片集中範囲FC-1・2出土1,391点、トレンチ出土44点、表面採集遺物2,173点を合わせ、総合計としては13,052点を数える。その内訳は土器1,962点、剥片石器および剥片10,551点、礫石器および礫539点である。なお、これらの遺物についての説明は、第Ⅲ章にて詳述する。



第3図 グリッド配置図

出土状況としては、土器は調査区南西寄りの10～15ラインの部分から多く出土し、ある程度形を成すものは見られない。破片が散在している状態が多い中、調査区H13グリッド付近で特に多く出土しており、当初遺構の存在も想定し調査を行ったが、結果的には遺構の検出には至っていない。主体となるのは縄文時代早期後半で、早期前半、前期前半～中期後半、後期後葉、続縄文時代後半、擦文時代のものが見られるが、縄文前期後半、後期後葉以降のものは各々僅少である。土器の分類については、今回の調査の中では出土していないものも含めて以下の通りとした。なお、出土していないものについては※印を付した。

I 群土器 縄文時代早期に属する土器群

a類：貝殻沈線文系、貝殻条痕文系、貝殻圧痕文系の尖底、平底土器群

b類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文等が施された東釧路式系の土器群

II 群土器 縄文時代前期に属する土器群

a類：胎土に繊維を含み、縄文で尖底、丸底及び平底の土器群

b類：円筒土器下層式に相当する土器群

III 群土器 縄文時代中期に属する土器群

a類：円筒土器上層式に相当する土器群

b類：萩ヶ岡3式、4式及び北筒式に相当する土器群

IV 群土器 縄文時代後期に属する土器群

a類：余市式、入江式に相当するもの（※）

b類：手稲式、鮎澗式、エリモB式に相当するもの（※）

c類：堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの

V 群土器 縄文時代晩期に属する土器群（※）

VI 群土器 続縄文時代に属する土器群

a類：恵山式に相当するもの（※）

b類：後北式に相当するもの

c類：北大I・II式に相当するもの（※）

VII 群土器 擦文時代に属する土器群

石器は器種別に大まかに分類をし、剥片石器には石鏃、石槍又はナイフ、石錐、つまみ付ナイフ、スクレイパー、両面調整石器、石核等が見られる。これら以外のものについては、二次加工痕の認められるものをRフレイク、使用痕の認められるものをUフレイクとして石器に分類し、その他を剥片とした。

礫石器には石斧・石のみ・たたき石・すり石・石錘・石皿等がある。なお出土遺物点数については黒曜石等の原石・剥片・フレイクチップなども石器に含めてカウントしている。

石器の出土状況としては、土器と同様に調査区南西側から多く出土している。剥片集中範囲は2ヶ所で見られ、それぞれFC-1、FC-2とし第Ⅲ章2にて詳述する。

器種別の出土数としては、Rフレイク、石鏃、スクレイパー等が圧倒的に多く、次いでつまみ付ナイフとなり、礫石器については、石斧が多数見られる一方、たたき石・すり石・石皿などの礫石器が非常に少ないといった出土傾向に偏りが見られ、土坑や焼土等の遺構が検出されなかったことと併せ、直近には集落が存在していた可能性は低いと思われる。

第Ⅱ章 遺跡の環境

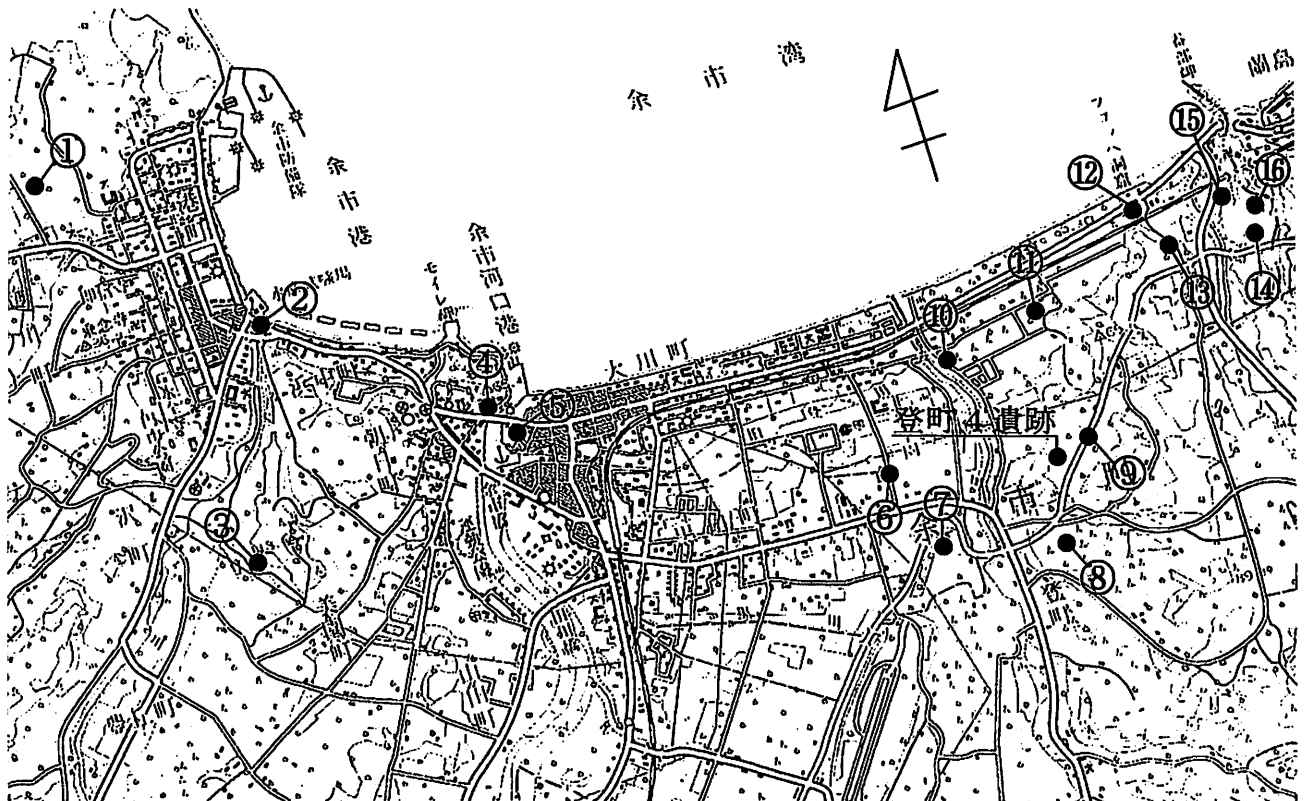
1. 遺跡の立地

登町4遺跡は、汀線に直交するように流れ込む登川と畚部川^{ふこっべ}の間に位置し、直線距離にして1.3km程北へ進むと余市湾が広がっている。標高約35~40mの丘陵地に立地し、遺跡全体は南向きの緩斜面となっており、調査区の北側約50mに丘頂を持つ。

余市湾は内陸部に連なる山地から余市川や登川が流れ込み、その海岸沿いは余市川河口から大浜中海岸を経て畚部岬付近までの緩やかな弧を描く砂浜地帯である。これらの主だった河川は、元々ひと続きであった梅川、豊丘、美園、登、栄地区等の丘陵地が赤井川火山や海底火山の影響を受け、ほぼ南北に走る幾つかの断層が生じた結果、それに沿って南部に位置する山地から余市湾に向かって概ね並行して流れるようになった。

余市平野周辺は、第四紀完新世に入り温暖化の影響で海水面が上がり、縄文時代前期頃まで海水が仁木町に至る奥深くまで浸入して古余市湾を形成していた。縄文時代中期頃になると気温が下降し、海水面が下がるとともに古余市湾が徐々に退き現汀線に並行する2本の砂丘が発達、それにより古余市湾は潟湖へと変貌、次第に淡水化し、泥炭が堆積して現在の姿になっていったと考えられている。

余市町内においては、縄文時代早期から近代まで各時代の遺跡（遺物包蔵地）が64ヶ所確認されており、これらの遺跡は余市町内の長きに亘る地形の変遷がその分布に大きく関連している。これまでの発掘調査から、縄文時代前期以前の遺跡は古余市湾を囲む丘陵地帯に、2本の砂丘のうち内陸に位置する黒川砂丘上には縄文時代中期以降の遺跡が、その外側に発達した大川砂丘上には縄文時代晩期以降の遺跡が形成されていることが明らかになっている。町内の主な遺跡の概要について以下の第4図と表とを合わせてご参照頂きたい。



第4図 余市町内の主な遺跡位置図

図中No.	遺跡名	調査機関	主な時期	備考
第4図①	木村台地遺跡	余市町教育委員会	縄文早期	貝殻文土器
第4図②	ヌッチ川遺跡	余市町教育委員会	近世	貝塚、骨角器、陶磁器、鉄製品
第4図③	沢町遺跡	余市町教育委員会	縄文晩期～擦文	晩期の墓坑群、徳利形土器、ヒスイ玉
第4図④	入舟遺跡	余市町教育委員会	縄文晩期～近世	近世の貝塚と墓坑群
第4図⑤	大川遺跡	余市町教育委員会	縄文晩期～近世	晩期～近世の墓坑群と副葬品
第4図⑥	安芸遺跡	余市町教育委員会	縄文中期～後期	大型構造部材等の木製品、土製品
第4図⑦	八幡山遺跡	北海道教育委員会	縄文後期	配石遺構、石棒
第4図⑧	登町11遺跡	余市町教育委員会	縄文中期～後期	住居跡1軒、土坑6基
第4図⑨	登町2遺跡	北海道埋蔵文化財センター	縄文中期	珪質頁岩製石錐の集中
第4図⑩	登川右岸遺跡	余市町教育委員会	縄文中期	剥片集中跡20ヶ所
第4図⑪	大谷地貝塚	余市町教育委員会	縄文中期～後期	国指定史跡、余市式土器の標識遺跡
第4図⑫	フゴッペ洞窟	フゴッペ洞窟調査団他	続縄文後期	国指定史跡、洞窟内壁面800ヶ以上の刻画
第4図⑬	フゴッペ貝塚	北海道埋蔵文化財センター	縄文前期～中期	住居跡39軒、土坑150基
第4図⑭	栄町5遺跡	北海道埋蔵文化財センター	縄文晩期	土坑墓
第4図⑮	栄町7遺跡	余市町教育委員会	縄文晩期	土偶
第4図⑯	西崎山環状列石	北海道埋蔵文化財センター他	縄文後期	道指定史跡、配石遺構、配石下の土坑

表Ⅱ-1 余市町内の主な遺跡一覧

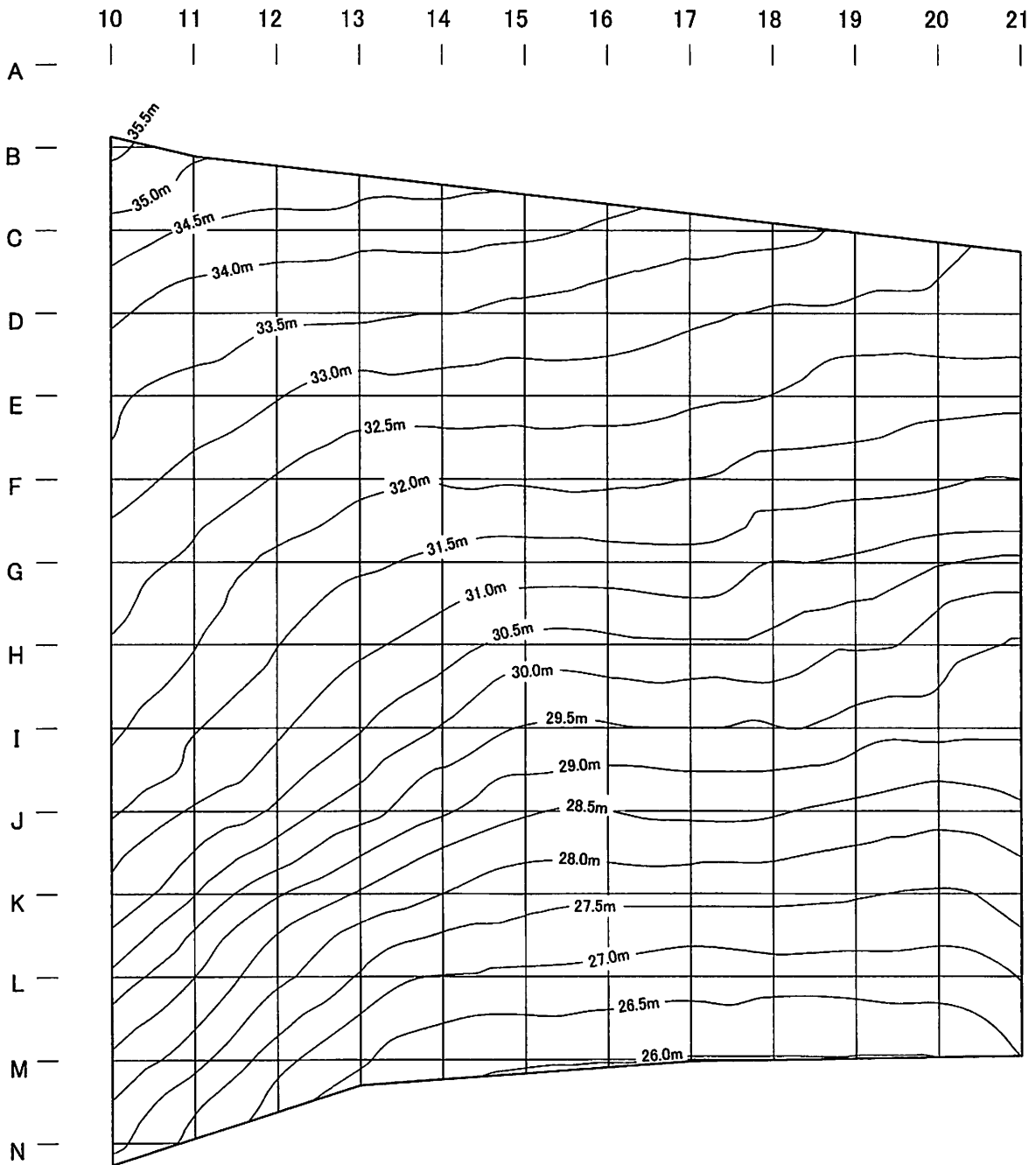
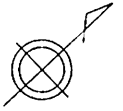
2. 遺跡の地形・地質

遺跡周辺は主に丘陵、砂丘（または浜堤）、沖積低地から成り、登町4遺跡はその中で丘陵地の丘腹緩斜面上に位置しており、北北西-南南東の方向性を有する。

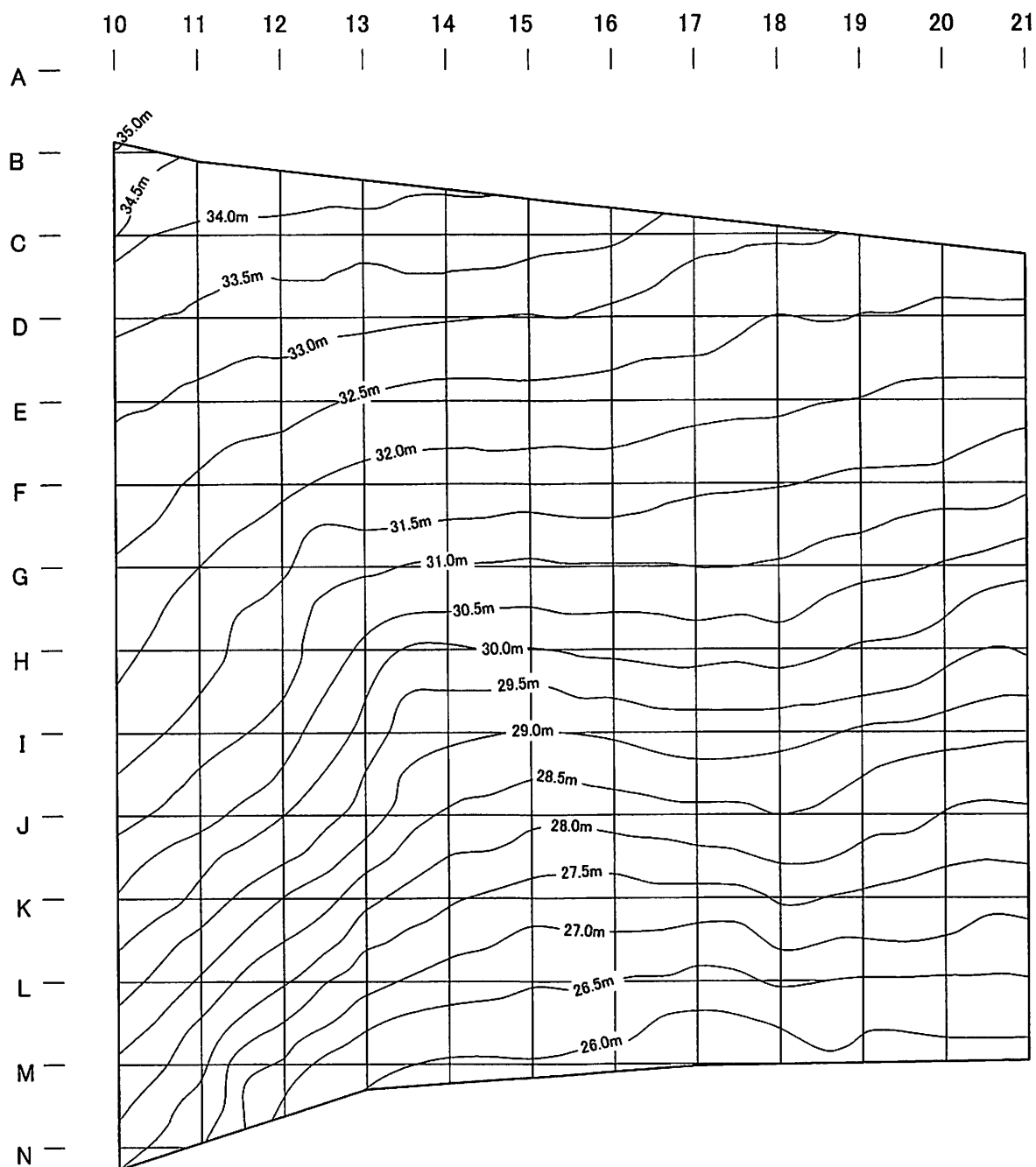
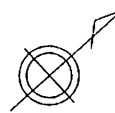
調査前の測量では最頂部の標高が約36m、最も低い東側との高低差は約9.5mで、南側の斜面が急にはなっているが、全体的には斜度10°程の斜面である（第5図）。昨年度の調査区地形と比べると沢状の自然地形が目立ち、なおかつ土が非常に硬く締めり掘り下げが困難な場所もみられた。

松田義章氏によれば、登町4遺跡の地形は主に角礫及び垂角礫によって構成されるソリフラクション堆積物状の堆積物が認められることから、この緩斜面は周氷河地形の可能性がある。また地質的には、主に新第三系中新統の倶知安層（小樽地域における「塩谷層」）の海底火山噴出物及びその関連堆積物すなわち、軽石凝灰岩及び凝灰質砂岩によって構成されているとの事である。

なお、この倶知安層の上層には赤色土が認められ、この赤色化は本層が堆積、形成した後に第四紀更新世の断続的な隆起・陸化によって浸食・風化面となることによる赤色風化殻の形成によるものである。これは丘陵地帯など高度のある場所で見られず、温暖な気候が一度ではなく繰り返しある事により一定の温度が地面にあたり、土壤に含まれている鉄分が熱に反応し赤くなると考えられると同氏よりご教示を得た。



第5図 調査前地形図



第6図 最終面地形図

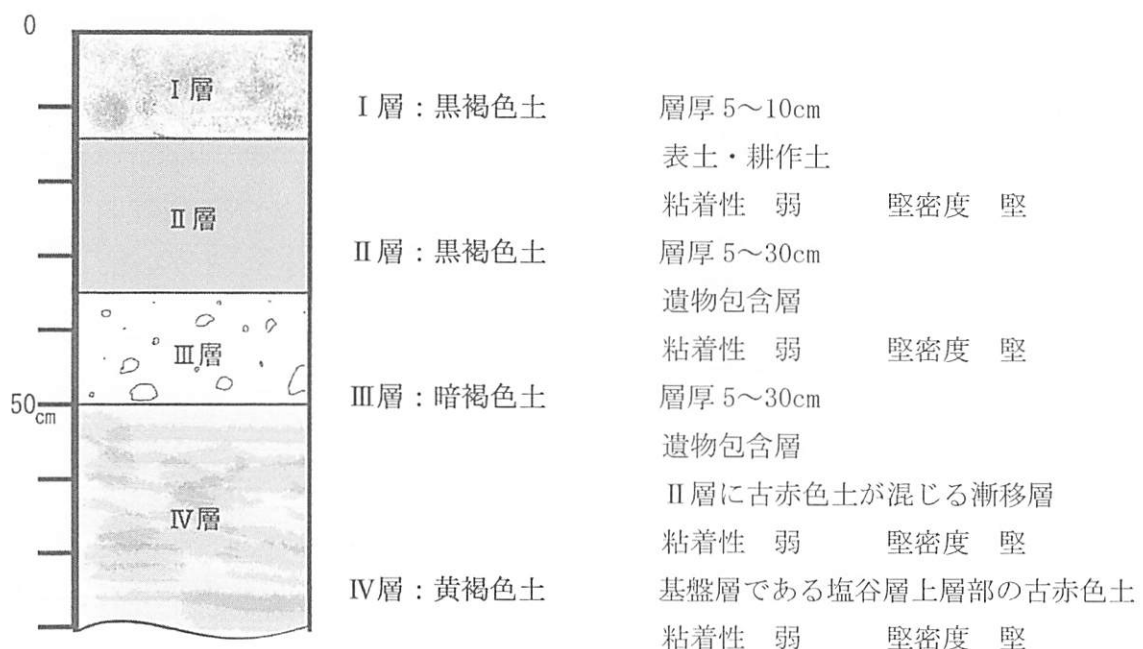
3. 基本層序

土層の堆積状態については、南西-北東方向（第8～9図、a-b）と北西-南東方向（第10～13図、c-d、e-f）の3ヶ所で観察した。土層は4つに分けられ、これらの各層を上から順にI～IV層とした。遺物包含層はII層及びIII層であり、昨年度の調査区と隣接するため同様の層序となっている（第7図）。

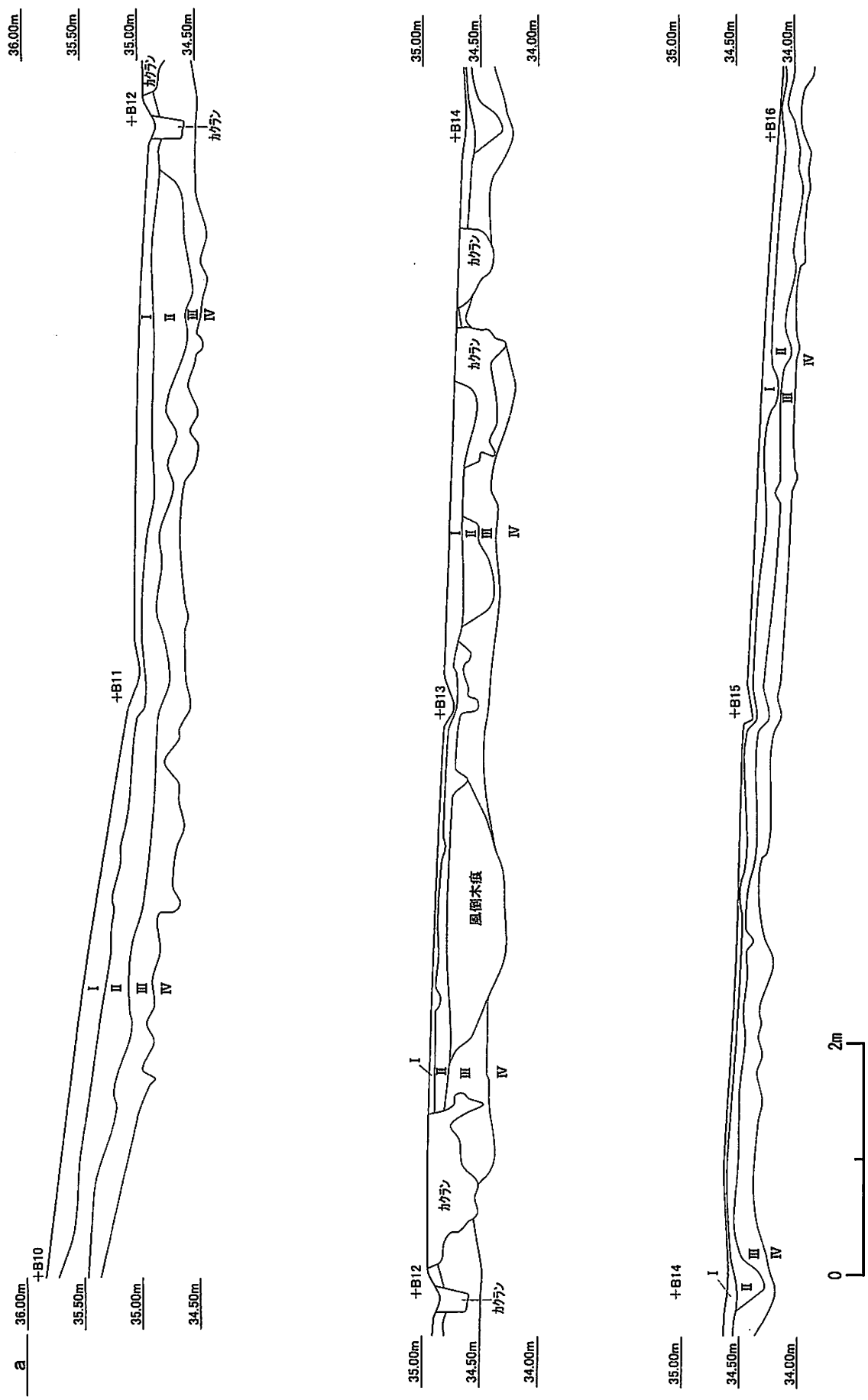
今年度の調査区は、以前に畑として利用された痕跡が認められ、ぶどう栽培に使用された金属製のアンカーや腐食した木杭、灌水チューブ、ビニールハウス等で使用されたハウスバンドやマルチフィルムなどが多量に出土し、大幅に削平されている部分や木杭等による攪乱が多くみられた。調査区北側は昨年度の調査区よりは大きな木根等はないもののササやイタドリが多く自生していたため、手作業による掘り下げの障害となった。

I層については表土層または、耕作土層である。II層についてはJ19グリッドから東側と南側が大幅に削平、攪乱されている場所が多く、すでにIII層が露出しているところや、IV層まで黒色土が入り込んでいる部分もあった。III層についてはII層からIV層への漸移層であり、II層との違いは色調と少量の小礫（1～5cm）が部分的に含まれている事である。IV層は俱知安層（塩谷層）の上層部で部分的に大礫（10～20cm）がまとまって認められる。多くの角礫状ないし亜角礫状のいわゆるクサレ礫を含んでいることから土層の一部は古赤色土の可能性があると、昨年度地質調査を依頼した松田氏より、ご教示頂いた。これら地質の詳細については『登町4遺跡（2012年度）』報告書、第V章付編2をご参照頂きたい。

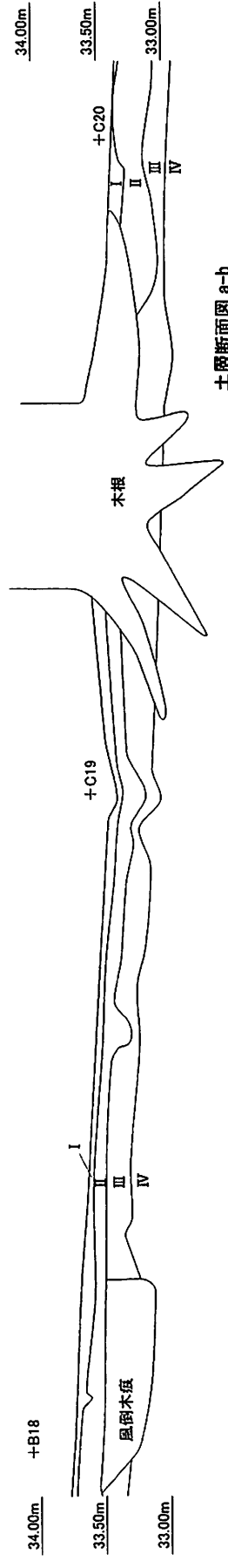
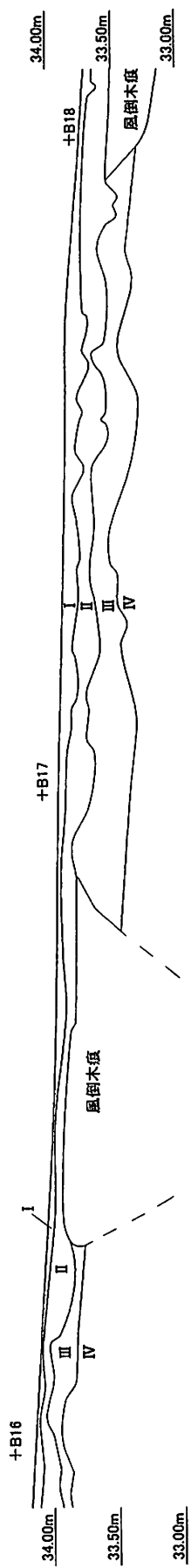
なお、土層の観察は、『土壌調査ハンドブック改訂版』（日本ペドロロジー学会編）および色調は『新版標準土色帖』（小山・竹原 1967）に基づいている。



第7図 基本土層模式図



第8図 土層断面図(1)



土層断面図 a-b

I層：黒褐色土 (10YR 2/3)

表土・耕作土

粘着性 弱 堅密度 堅

II層：黒褐色土 (10YR 3/2)

遺物包含層

粘着性 弱 堅密度 堅

III層：暗褐色土 (10YR 3/4)

遺物包含層

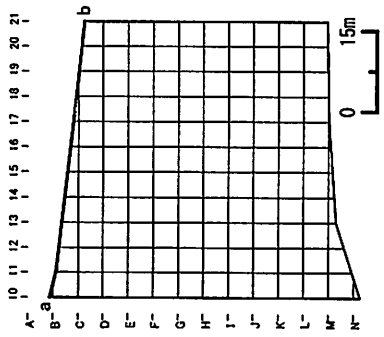
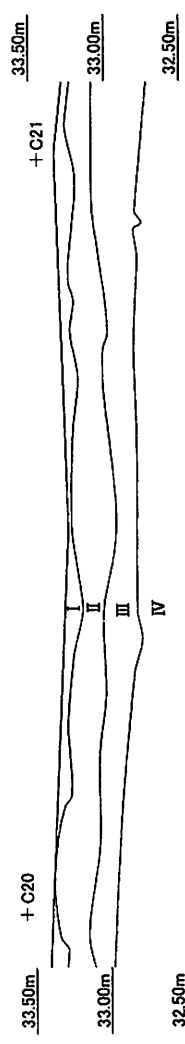
II層に古赤色土が混じる漸移層

粘着性 弱 堅密度 堅

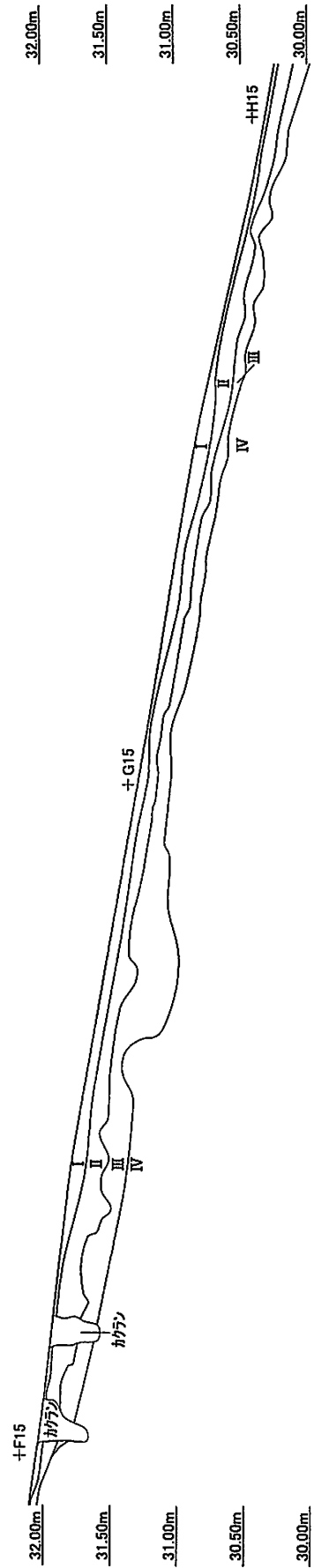
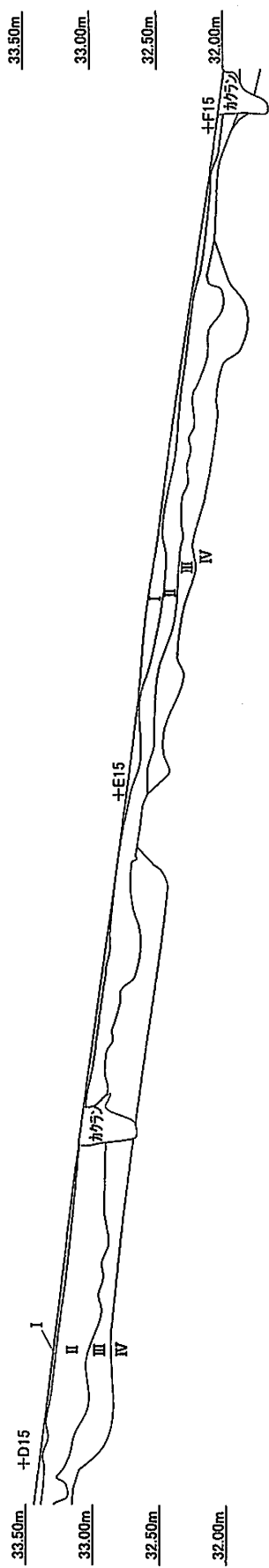
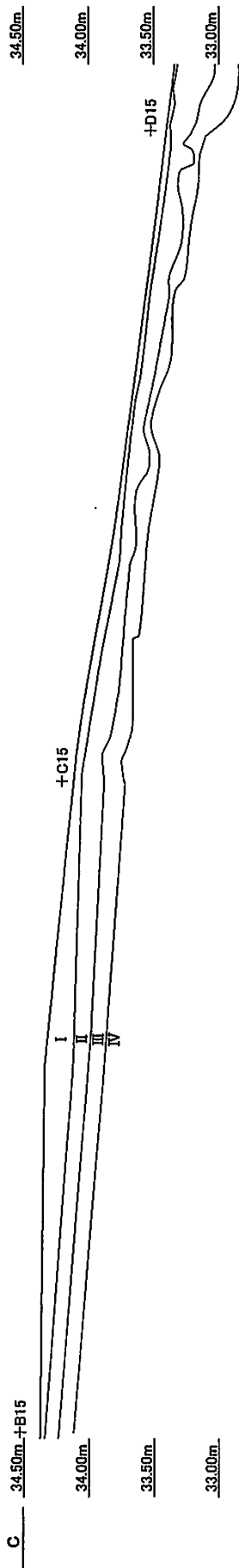
IV層：黄褐色土 (10YR 4/6)

基盤層である塩谷層上層部の古赤色土

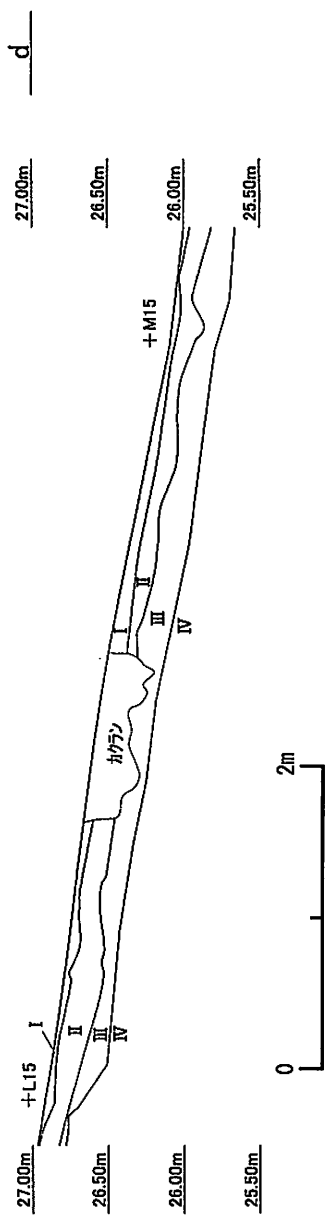
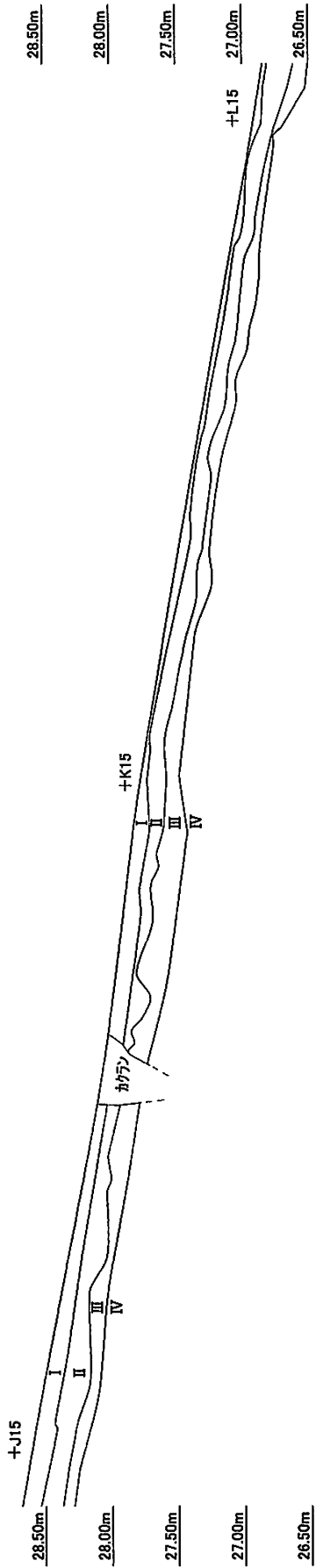
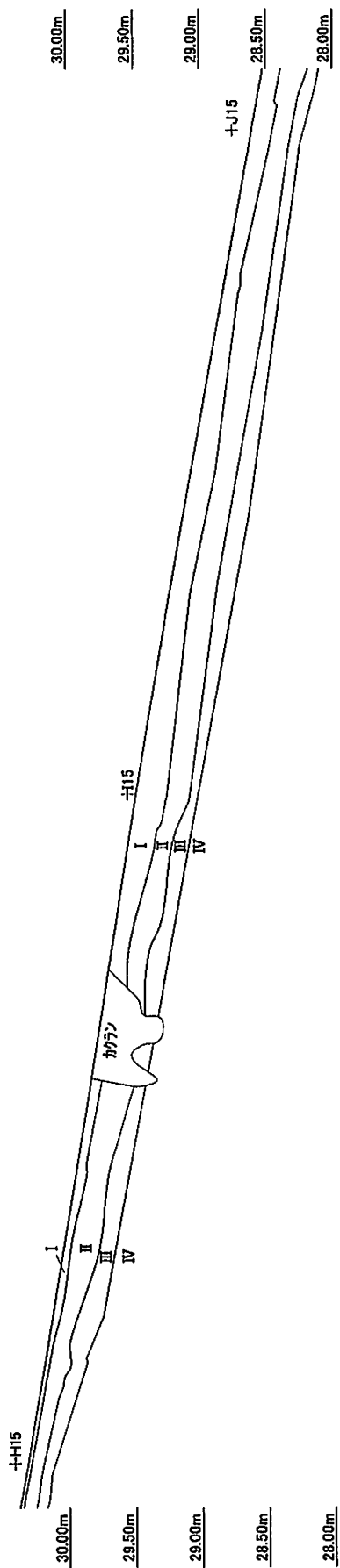
粘着性 弱 堅密度 堅



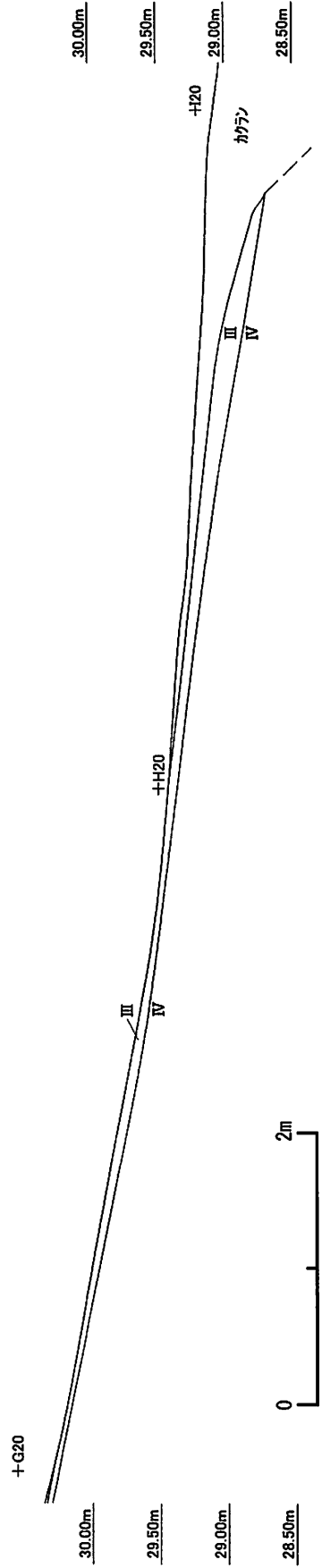
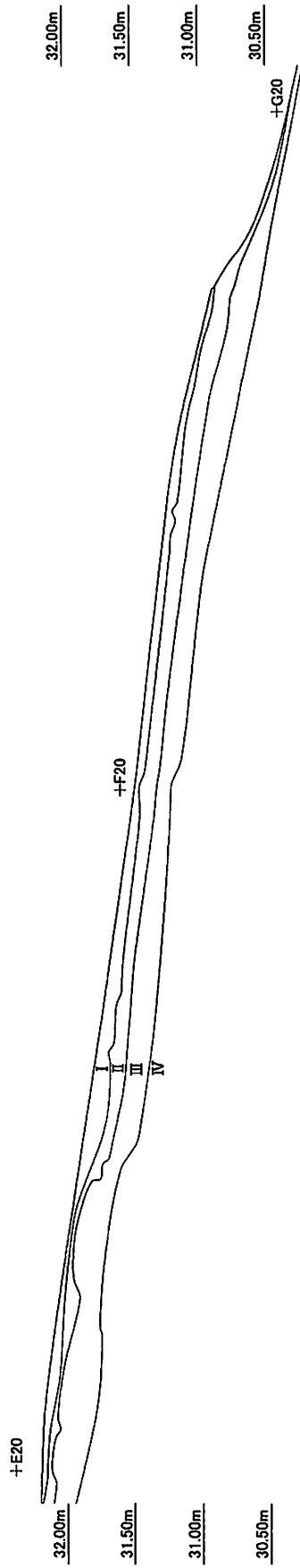
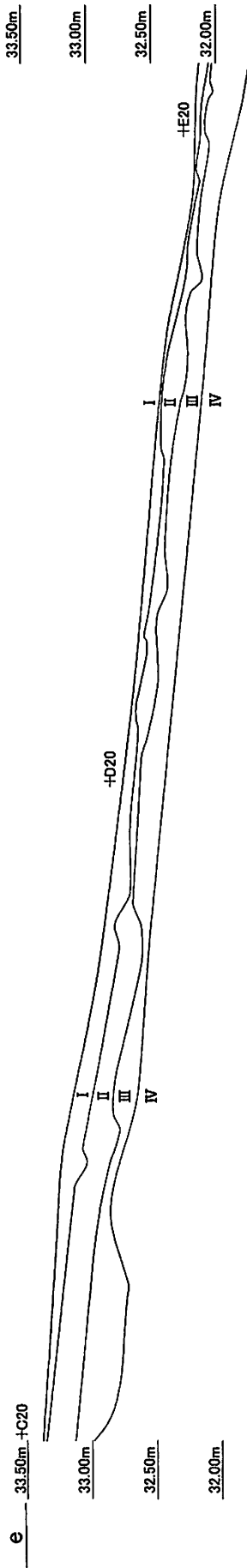
第9図 土層断面図 (2)



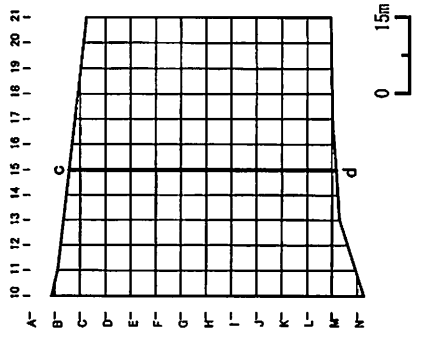
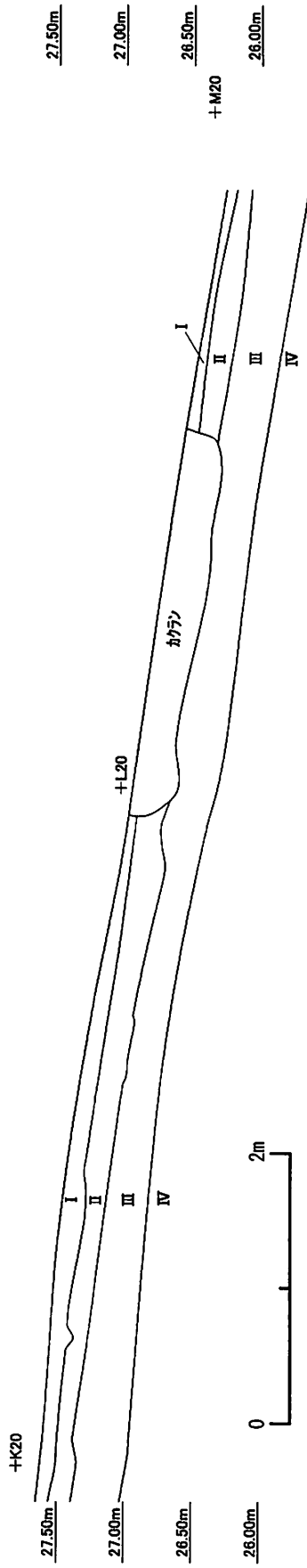
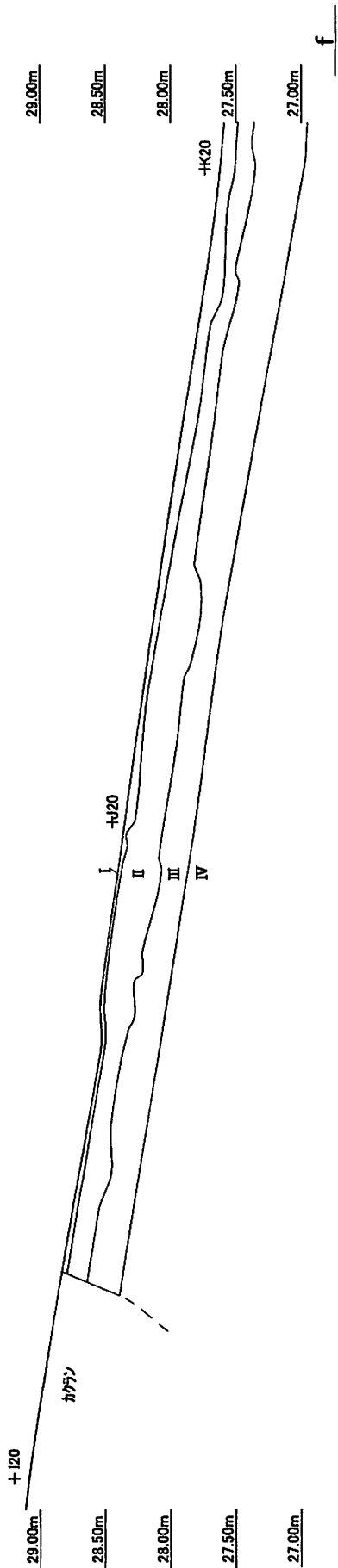
第10図 土層断面図 (3)



第11図 土層断面図 (4)



第12図 土層断面図 (5)



土層断面図 c-d・e-f

I層：黒褐色土 (10YR2/3)

表土・耕作土

粘着性 弱 堅密度 堅

II層：黒褐色土 (10YR3/2)

遺物包含層

粘着性 弱 堅密度 堅

III層：暗褐色土 (10YR3/4)

遺物包含層

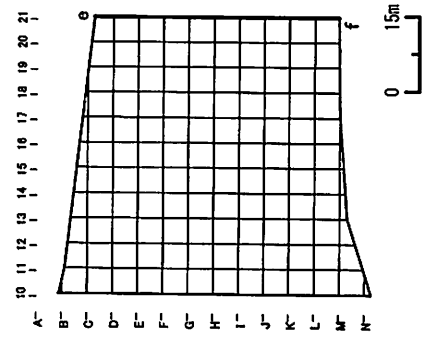
II層に古赤土が混じる漸移層

粘着性 弱 堅密度 堅

IV層：黄褐色土 (10YR4/6)

基盤層である塩谷層上層部の古赤色土

粘着性 弱 堅密度 堅



第13図 土層断面図 (6)

第三章 出土遺物

以下に各遺物の分類について述べるが、個々の遺物の出土地点・層位や計測値については一覧表を参照して頂きたい。なお、土器については接合を試みたが、復原できる個体は無かった。また摩耗の激しい破片が多く、良好な拓影図を掲載できたものは少ない。

1. 土器（第14～19図）

縄文時代早期（Ⅰ群）、前期（Ⅱ群）、中期（Ⅲ群）、後期（Ⅳ群）、続縄文時代（Ⅵ群）、擦文時代（Ⅶ群）に属するものがある。出土総数は1,962点である。主体をなすのは早期後半（Ⅰ群b類）の中茶路式で、その他早期前半（Ⅰ群a類）のアルトリ式相当のものを含めⅠ群に属するものは全体の約77%を占める。他には中期後半（Ⅲ群b類）北筒式や、その他中期（Ⅲ群）に属するものが多く、前期前半（Ⅱ群a類）静内中野式相当のものも少量ある。前期後半（Ⅱ群b類）円筒土器下層式、後期後葉（Ⅳ群c類）、続縄文（Ⅵ群）、擦文（Ⅶ群）に属するものはわずかである。

<Ⅰ群> 1～19はⅠ群a類土器。1は口縁部の破片で平縁と思われる。口唇部断面形は丸形である。器表面には貝殻条痕文が施されている。

2～19は胴部の破片。2～16は横走る条痕文のもの。2・4は薄手で、3は条痕が深い。3・4は内面が良くナデ調整されている。5は胎土に小石粒を多く含み、6は摩耗が激しいが内面は良くナデ調整されている。7～9は明褐色を呈し、7は内面が良くナデ調整されている。8～10は小石粒を多く含み、10は縦にも条痕が走る。11～13は内面が良くナデ調整されていて、11は摩耗が激しい。12・14～16は明褐色を呈し、13は薄手である。15～17は内面が良くナデ調整されていて、15・16は小石粒を多く含む。17は条痕文に加え貝殻腹縁圧痕文が2条施されている。18・19は横走る条痕文のもので明褐色を呈す。1～19は全て焼成が堅緻でありアルトリ式相当のものである。

20～125はⅠ群b類土器。20～25は口縁部の破片である。20は小波状口縁で口唇部断面形はやや尖る。口唇部直下に肥厚帯が巡り、器表面は摩耗が激しい。21は平縁で口唇部断面形は角形である。やや厚みがあり焼成が堅緻なためⅠ群a類のものかもしれない。22～24は平縁で口唇部断面形はやや尖る。いずれも横走る微隆起線と短縄文の組み合わせである。25は平縁で口唇部断面形は切り出し状である。口唇部直下から斜縄文が施されている。

26～114は胴部の破片。26～63は微隆起線と斜縄文や羽状縄文の組み合わせのものである。26は微隆起線下部を棒状工具で押しきながら整形している。小石粒を多く含む。27・28は微隆起線間に羽状縄文が施されている。29・30は斜縄文で29は内面調整が粗い。31は羽状縄文、32は微隆起線が1本波状に施されていると思われる。33～38は斜縄文で33は小石粒を多く含む。37は摩耗が激しく内面調整は粗い。小石粒を多く含む。39は羽状縄文、40～49は斜縄文で、44は微隆起線が磨滅している。50は一段目が短縄文でそれ以下は斜縄文になっている。51は絡条体圧痕文かもしれない。52は口縁部付近と思われる。53～62は斜縄文であるが、58・59は摩耗が激しく、54・55・61は短縄文かもしれない。63は羽状縄文で、64・65はカーブした微隆起線のみが狭い間隔で施されたもの。

66～114は微隆起線と短縄文の組み合わせのもの。66は3点、67・68は2点が接合したもので、66は小石粒を多く含む。69は微隆起線が1条波状になるとと思われる。71は器表面に指頭圧痕と思われる凹みがある。71・72・74は小石粒を多く含む。81は絡条体圧痕文かもしれない。82は底部付近のもの

で、他の破片に比べやや厚みがあり堅緻であることからⅠ群a類かもしれない。83・85・89・104・111は微隆起線が1条波状になると思われるもの。86は微隆起線の間隔が狭いもの。89・93・105・114は絡条体圧痕文かもしれないもの。103は一部斜縄文かもしれないものである。83・85・89・90・92・109・110は小石粒を多く含む。

115～125は底部の破片。115は平底で緩やかに立ち上がる。小石粒を多く含む。116は平底でわずかに張り出して立ち上がる。内面調整が粗い。117・118は平底でまっすぐに立ち上がり、118は胴部に微隆起線と斜縄文、最下部には短縄文が施されている。小石粒を多く含む。119・120は平底でまっすぐに立ち上がり、119は胴部に斜縄文が、120は胴部に微隆起線と斜縄文が施されている。121はやや上げ底でまっすぐに立ち上がる。122は底面の断面形状が不明であるが緩やかに立ち上がり、胴部に微隆起線と短縄文が施されている。小石粒を多く含む。123・124は平底でまっすぐに立ち上がり、123は胴部に斜縄文が、124は胴部に羽状縄文が施されている。125は平底で緩やかに立ち上がる。20～125は中茶路式である。

<Ⅱ群> 126～142はⅡ群a類土器。126・127は口縁部の破片である。126は口唇部がやや判然としないが口縁部であり、口唇部及び器面内外に渡り剥離面に燃糸の混入の痕が見られる。これは燃糸をそのまま混ぜ込み焼成したと思われ、胎土には繊維も多く含まれている。127は平縁で口唇部断面形は角形である。器面には太いLR斜縄文が施されている。胎土に直径5mm程の石粒が見られ繊維も含まれている。

128～142は胴部の破片。128は0段多条で細長い節のLR斜縄文が施文されている。胎土には小石粒と繊維を含む。129・130は太い縄の原体で施文されており、129はRL斜縄文、130はLR斜縄文である。共に内面が良くナデ調整されていて繊維を含み、129は小石粒も多く含む。131・133は摩耗が激しく胎土には繊維を多く含み、131には直径5mm程の石粒が見られる。132・134はLR斜縄文で132は繊維を多く含む。135はLR斜縄文で小石粒と繊維を多く含む。136・137は摩耗が激しいが繊維を多く含む。138は不整なLR斜縄文で胎土に直径5mm程の石粒が見られる。139～141はLR斜縄文でいずれも繊維を多く含んでいる。142は一部不整なLR斜縄文である。口縁部破片と137・140～142を除き全て厚手である。126～142は静内中野式相当のものである。なお、Ⅱ群b類については1点のみの出土であり、摩耗が著しく掲載はしていない。

<Ⅲ群> 143～154はⅢ群b類土器。143～147は口縁部の破片である。143は山形突起部で口唇部断面形は切り出し状である。突起部表面を三角形に肥厚させ、口唇部と肥厚部に篋状工具でキザミを施している。三角形内にはわずかな縄文も見える。胎土に小石粒を多く含む。144は平縁で口唇部断面形は角形である。肥厚帯直下に刺突文が巡り羽状縄文が施文され、内面にもRL斜縄文が施文されている。胎土には直径5mm程の石粒が見られる。145は平縁で口唇部断面形は丸みがある。肥厚帯直下に刺突文がありLR斜縄文が施文されている。小石粒を多く含む。146は平縁で口唇部断面形は角形である。肥厚帯は無く、口唇部直下に押引文が3条巡り、刺突文も施される。内面にLR斜縄文が施文されている。器面は摩耗が激しい。147は平縁で口唇部断面形はやや角形である。口唇部に縄の圧痕を斜めに連続して施文し、器面には羽状縄文が施文されている。

148～153は胴部の破片。148・149は羽状縄文が施文されている。150は羽状縄文であるが複節の縄文かもしれない。151は羽状縄文が施文されている。152は押引文が2条巡っているが摩耗が激しい。小石粒を多く含む。153は羽状縄文が施文されている。小石粒を多く含む。

154は底部の破片。平底でわずかに張り出し立ち上がる。摩耗が激しい。143は萩ヶ岡3式、144～154は北筒式である。

155～183は、大半が胴部の破片で細分類が困難なためⅢ群土器としたもので、第23図の土器分布図についても同様である。155は口縁部の破片、平縁でわずかに外反する。口唇部断面形はやや角形である。器面にはLR斜縄文が施文されている。胎土には石粒などが見られず焼成が良く堅緻である。

156～183は胴部の破片。156はやや外反しており羽状縄文が施文されている。157は羽状縄文であるが摩耗が激しい。158は羽状縄文で内面に指頭圧痕が見られる。159は器形がややくびれ、羽状縄文で原体の縄はかなり細いものを使用している。160は複節RLR縄とLR縄で羽状に施文しており綾絡文も施されている。萩ヶ岡3式と思われる。161は羽状縄文で小石粒を多く含む。162はLR縄とRL縄を結束せずに羽状に施文している。163はやや外反しており結束をせずにLR縄の向きを変えて羽状に施文している。164は摩耗が激しいがLR斜縄文であると思われる。器壁が厚く繊維を多く含むためⅡ群a類のものかもしれない。165は羽状縄文で内面に指頭圧痕が見られる。166は羽状縄文である。167は結束をせずにLR縄とRL縄を羽状に施文している。168は羽状縄文で内面に指頭圧痕が見られる。小石粒を多く含む。169と170は同一個体の可能性があるもので、共に羽状縄文で内面に指頭圧痕が多数みられる。胎土には小石粒を多く含む。171は羽状縄文で小石粒を多く含む。172は0段多条のLR斜縄文と思われる。173は羽状縄文でやや内湾している。174はLR斜縄文である。175は羽状縄文である。176はRL縄と篋状工具によるキザミで羽状に施文している。177は無節R縄での施文と思われる。178は結束せずに別原体のLR縄で羽状に施文している。179はLR斜縄文の後にRL縄を交差して施文している。180は羽状縄文である。181～183は結束せずにLR縄とRL縄を羽状に施文している。181はやや内湾し181・182は小石粒を多く含む。

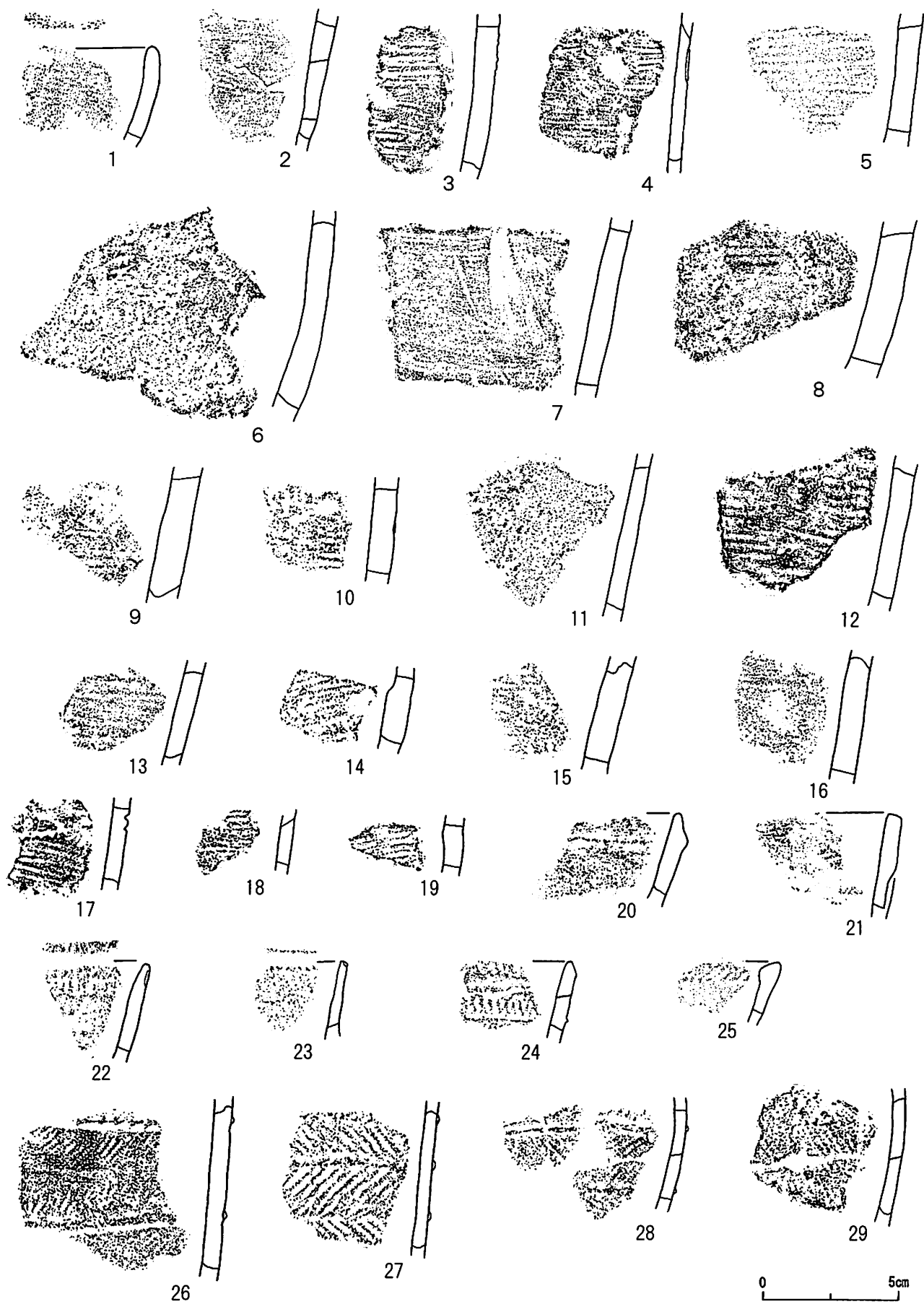
<Ⅳ群> 184・185はⅣ群c類土器。184は口縁部の破片と胴部の破片が接合したものである。口縁の小突起部で口唇部断面形は切り出し状である。口唇部内面側に縄によるキザミがある。器面にはLR斜縄文と木葉状沈線文と思われる文様が施文されている。胎土には小石粒を多く含む。

185は胴部の破片。LR斜縄文と木葉状沈線文と思われる文様が施文されている。器壁は薄く小石粒を含む。185は184と同一個体と思われ、文様や形質は同じである。今年度の調査においてⅣ群土器は掲載した184・185のみであり、御殿山式相当のものと考えてⅤ群に属するものかもしれない。

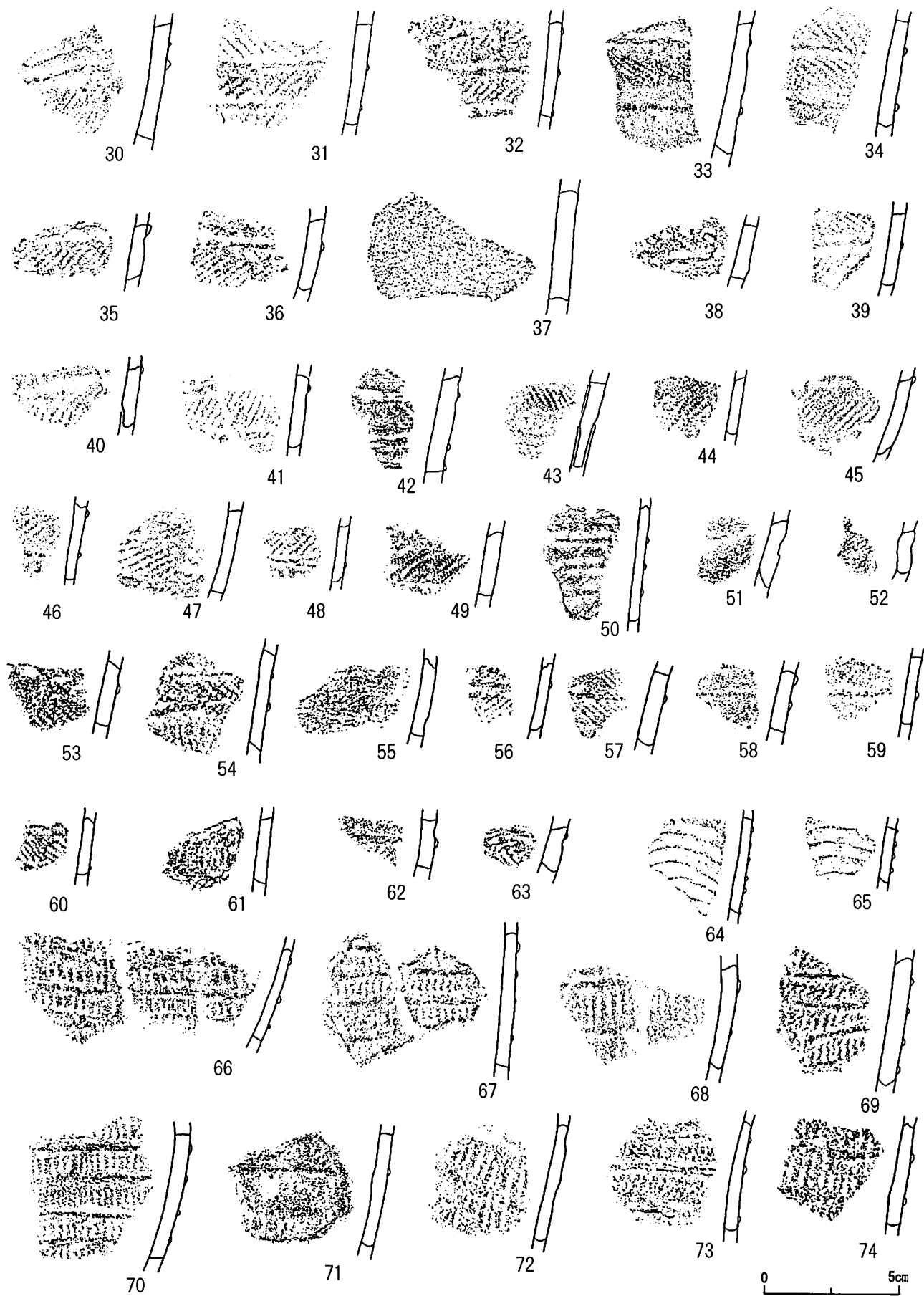
<Ⅵ群> 186・187はⅥ群b類土器。186は口縁部の破片。口唇部はわずかしか残っていないが断面形は細く尖る。口唇部直下は無文だが1条の列点文が巡り、さらに無文帯を挟んで帯縄文が巡っている。

187は胴部の破片で186と同一個体の可能性がある。列点文と帯縄文が巡っている。今年度の調査においてⅥ群土器は掲載の2点を含む3点のみであり、後北C₂-D式と思われる。

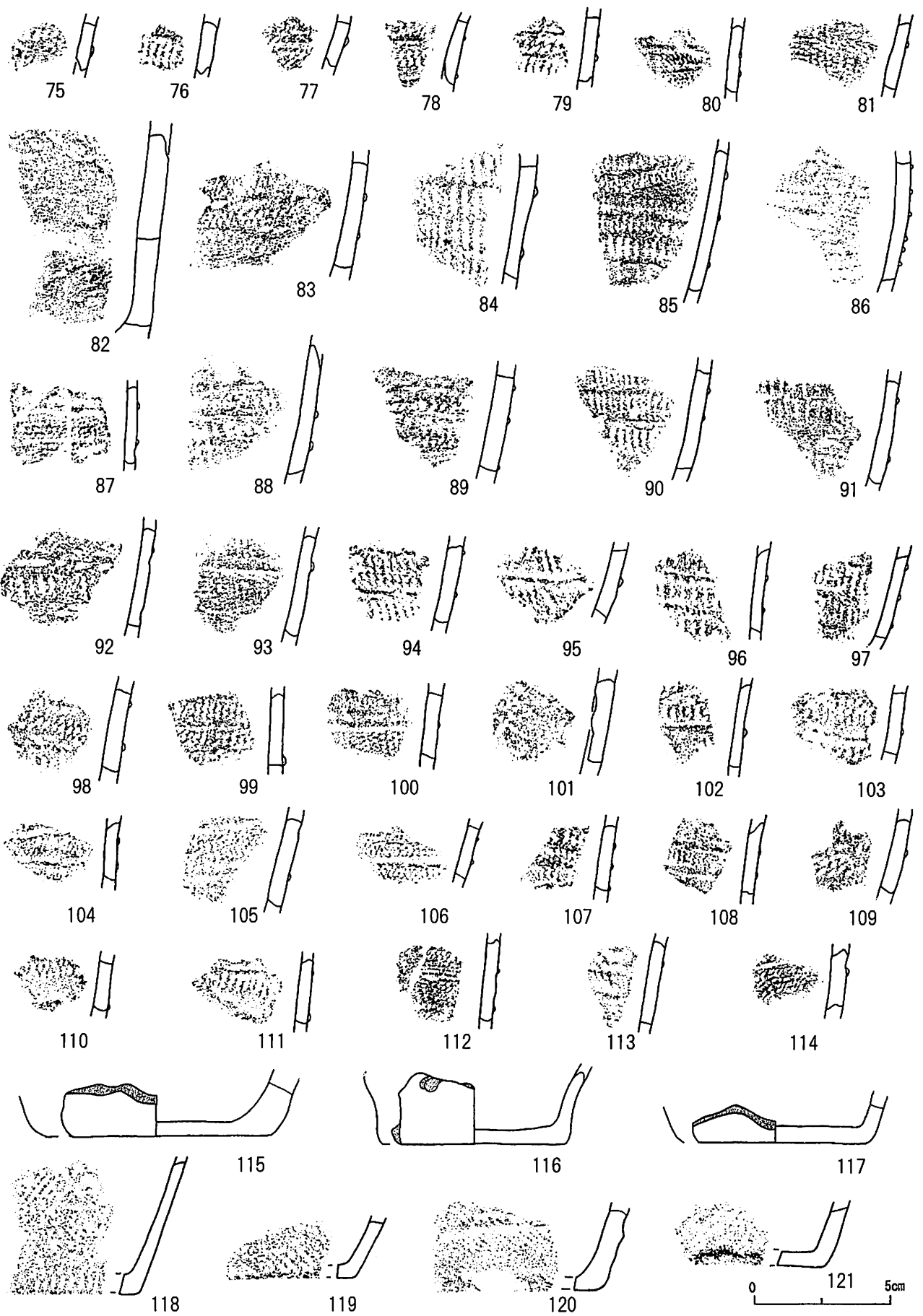
<Ⅶ群> 188・189はⅦ群土器。188・189共に胴部の破片で縦方向への擦痕がある。内面は横方向に篋状工具での削りによる整形がなされている。今年度の調査においてⅦ群土器は掲載の2点を含む3点のみである。



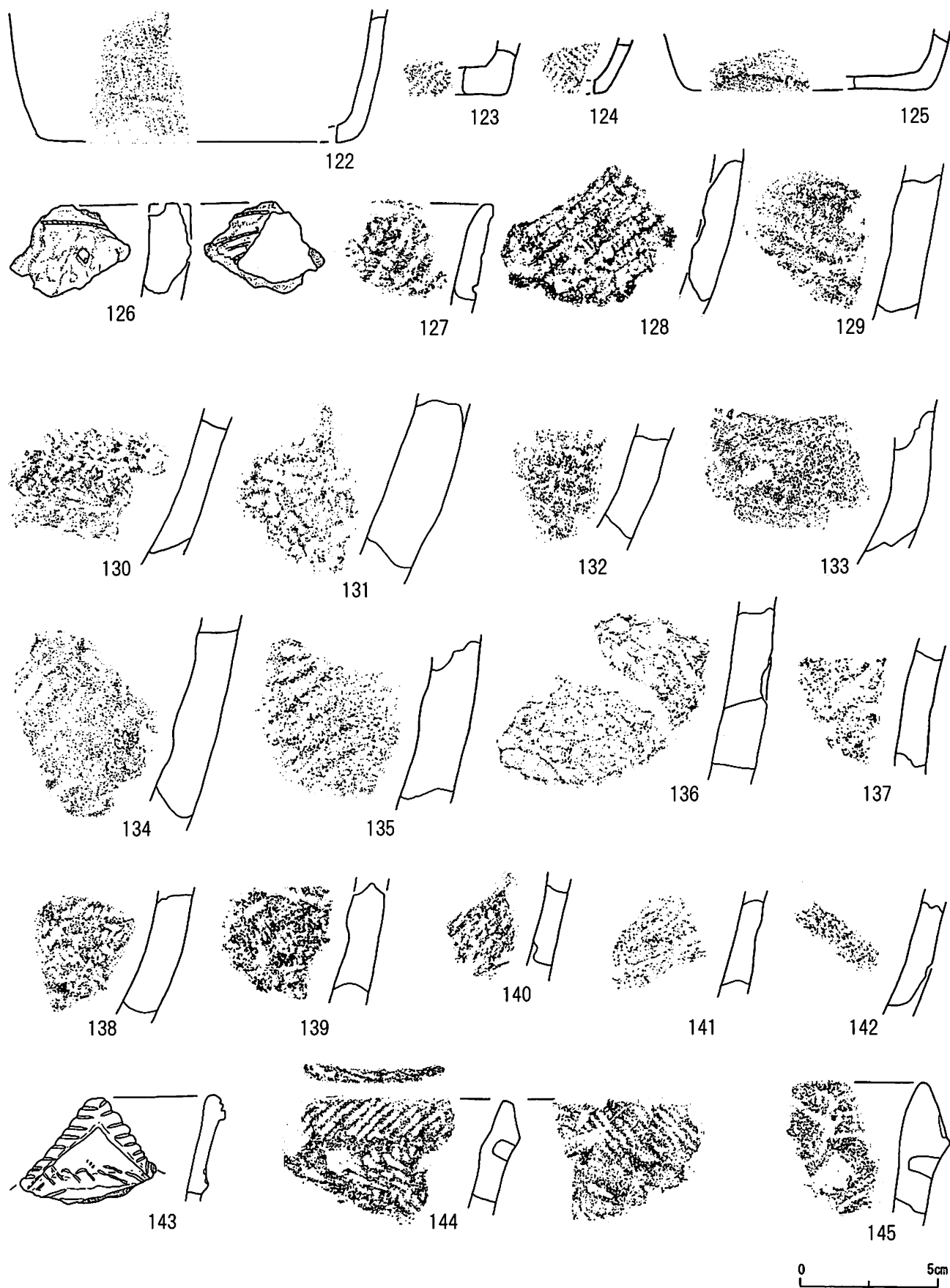
第14図 土器 (1)



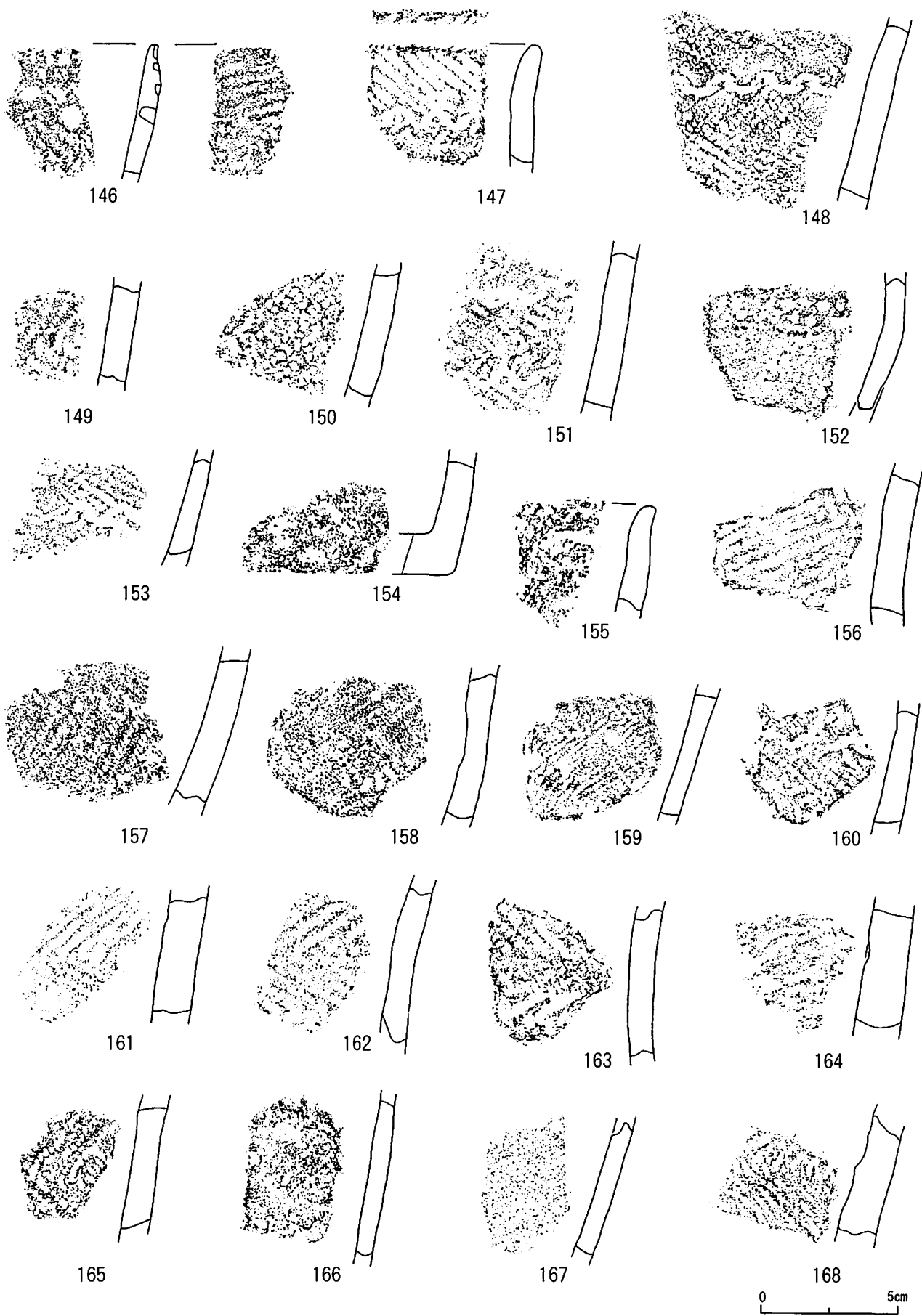
第15图 土器 (2)



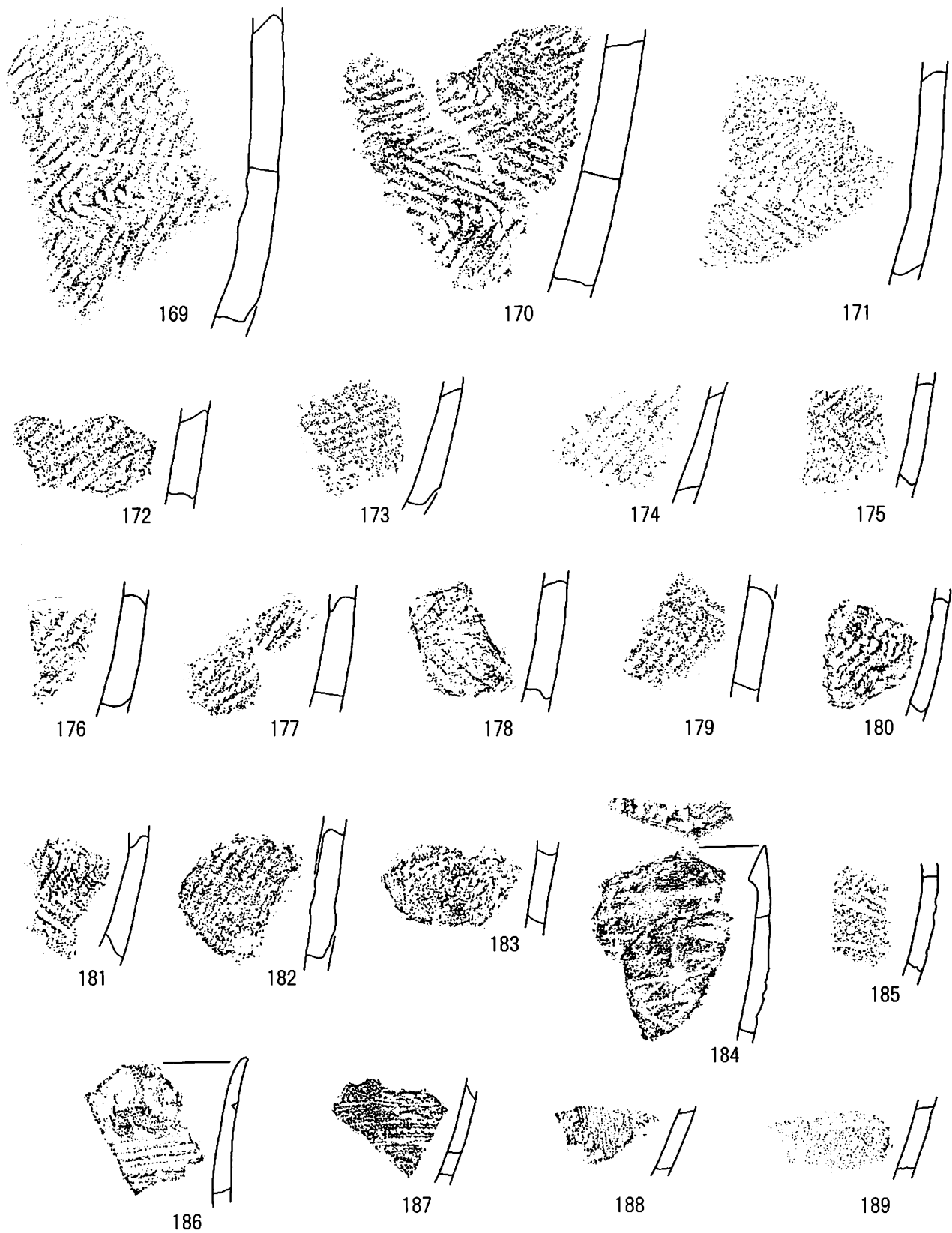
第16图 土器 (3)



第17图 土器 (4)



第18图 土器 (5)



0 5cm

第19图 土器 (6)

表Ⅲ－１ 掲載土器一覽表（１）

図版 No.	出土地点	層位	遺物No.	分類	部位	備考
第14図－1	F12d	Ⅱ	10	I a	口縁部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－2	I13d	Ⅱ	54	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－3	H13c	Ⅱ	247	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－4	G13c	Ⅱ	47	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－5	D16c	Ⅱ	11	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－6	I13b	Ⅱ	29	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－7	C11d	Ⅱ	24	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－8	G13b	Ⅱ	27	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－9	B11a	Ⅱ	63	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－10	I12c	Ⅱ	2	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－11	H13c	Ⅱ	285	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－12	F13c	Ⅱ	32	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－13	H13a	Ⅱ	108	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－14	I14a	Ⅱ	26	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－15	J14a	Ⅱ	10	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－16	I14d	Ⅱ	30	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－17	H11c	Ⅲ		I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－18	C11b	Ⅱ	2	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－19	H13b	Ⅱ	130	I a	胴部	アルトリ式相当、条痕文
第14図－20	F12c	Ⅲ		I b	口縁部	中茶路式、隆起帯
第14図－21	H13d	Ⅱ	231	I b	口縁部	中茶路式
第14図－22	G13c	Ⅱ	146	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、短縄文
第14図－23	C10d	Ⅱ	35	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、短縄文
第14図－24	G13c	Ⅱ	79	I b	口縁部	中茶路式、微隆起線、短縄文
第14図－25	D16d	Ⅱ	7	I b	口縁部	中茶路式、斜縄文
第14図－26	M10d	Ⅱ	6	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第14図－27	H14c	Ⅱ	99	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR・RLの羽状縄文
第14図－28	H13d	Ⅱ	177	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR羽状縄文、H13bⅡ層と接合
第14図－29	L11a	Ⅱ	46	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、斜縄文
第15図－30	L11b	Ⅱ	32	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図－31	H14a	Ⅱ	52	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR・RLの羽状縄文
第15図－32	H14a	Ⅱ	51	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図－33	E16a	Ⅱ	7	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、斜縄文
第15図－34	H14a	Ⅱ	18	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第15図－35	H14b	Ⅱ	6	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図－36	K10b	Ⅱ	9	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図－37	F12c	Ⅱ	12	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、斜縄文
第15図－38	K13b	Ⅱ	3	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第15図－39	E16b	Ⅱ	3	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR・RLの羽状縄文
第15図－40	F19b	Ⅱ	3	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図－41	G13c	Ⅱ	78	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文、2点接合
第15図－42	H14d	Ⅱ	93	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第15図－43	D17b	Ⅱ	2	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第15図－44	H13b	Ⅱ	44	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図－45	I13a	Ⅱ	15	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図－46	B11b	Ⅱ	43	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図－47	H13b	Ⅱ	34	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図－48	H13d	Ⅱ	224	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図－49	H13d	Ⅱ	300	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図－50	H14a	Ⅱ	11	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文とLR斜縄文
第15図－51	H13d	Ⅱ	263	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、斜縄文
第15図－52	F13c	Ⅱ	31	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、斜縄文
第15図－53	I13a	Ⅱ	69	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文

表Ⅲ-2 掲載土器一覽表(2)

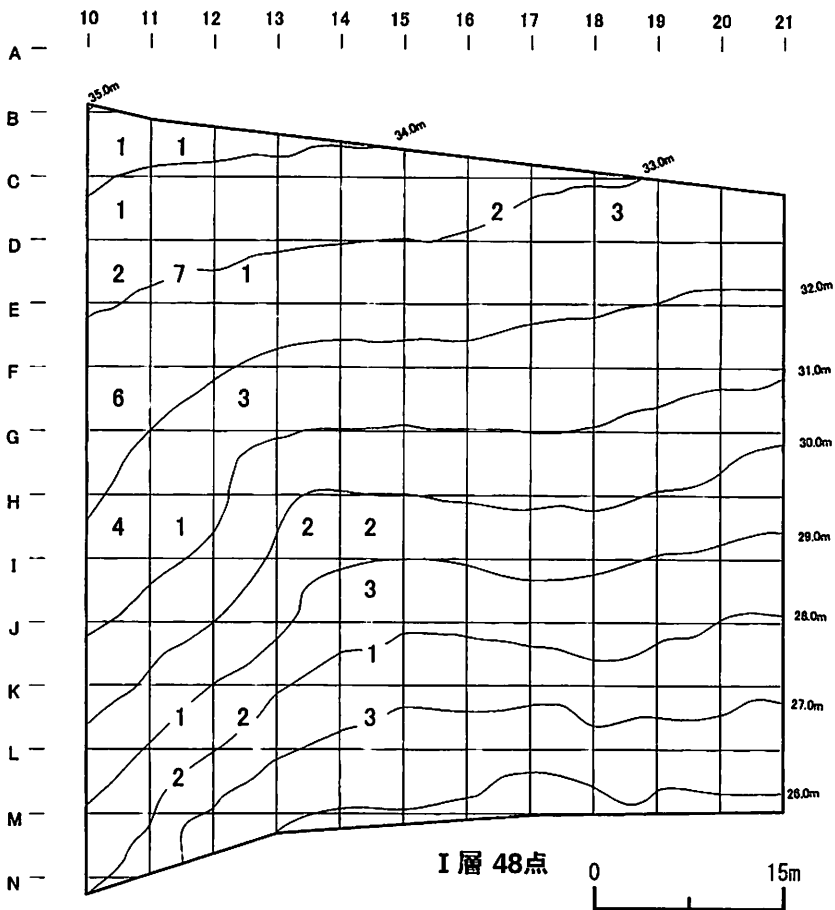
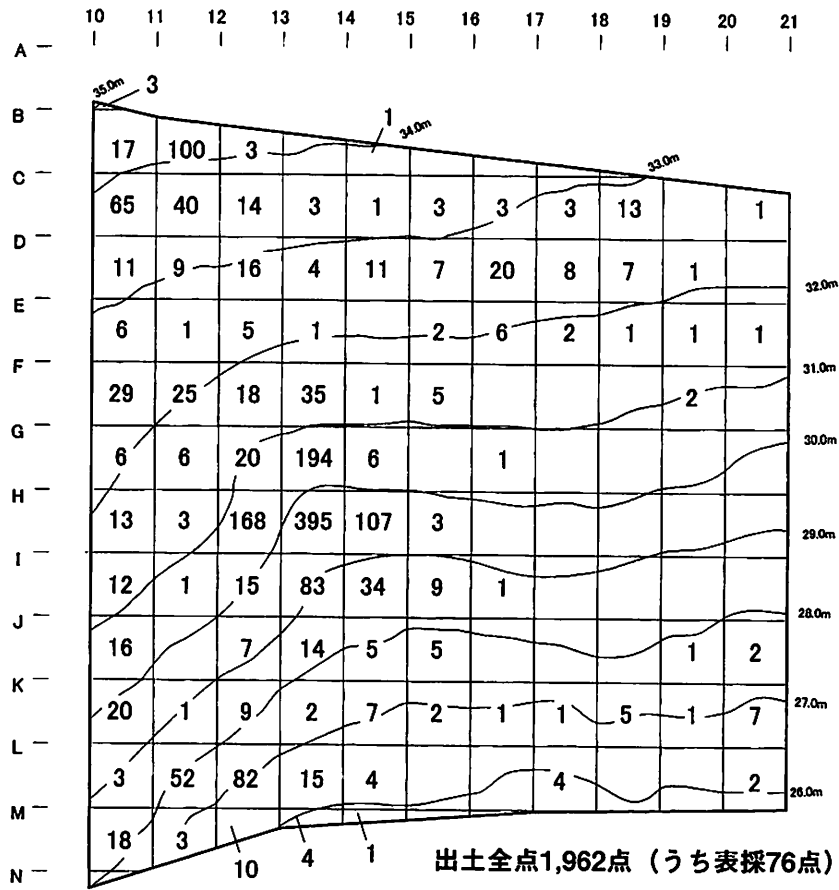
図版 No.	出土地点	層位	遺物No.	分類	部位	備考
第15図-54	G13b	Ⅱ	17	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第15図-55	H14a	Ⅱ	60	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、斜縄文
第15図-56	H14a	Ⅱ	26	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図-57	G13d	Ⅱ	5	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第15図-58	B11a	Ⅱ	25	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、斜縄文
第15図-59	G13b	Ⅱ	34	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、斜縄文
第15図-60	H13d	Ⅱ	302	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第15図-61	G13c	Ⅱ	97	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、斜縄文
第15図-62	H14a	Ⅱ	32	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文
第15図-63	C18b	I	1	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR羽状縄文
第15図-64	C10d	Ⅱ	18	I b	胴部	中茶路式、微隆起線のみ
第15図-65	C10d	Ⅱ	40	I b	胴部	中茶路式、微隆起線のみ
第15図-66	G13c	Ⅱ	102	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、短縄文、2点接合
第15図-67	G13c	Ⅱ	131	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第15図-68	I14c	Ⅱ	21	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第15図-69	L11c	Ⅱ	48	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第15図-70	H13d	Ⅱ	238	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第15図-71	H13d	Ⅱ	279	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第15図-72	C11a	Ⅱ		I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第15図-73	L11a	Ⅱ	45	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第15図-74	C10d	Ⅱ	19	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-75	B11d	Ⅱ	16	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、短縄文
第16図-76	H13d	Ⅱ	308	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-77	F13b	Ⅱ	22	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-78	L12a	Ⅱ	12	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-79	H13b	Ⅱ	48	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-80	I13c	Ⅱ	19	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-81	I13d	Ⅱ	47	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、短縄文
第16図-82	G11b	Ⅱ	4	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、短縄文、I13aⅡ層と接合
第16図-83	L12b	Ⅱ	66	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-84	C18a	Ⅱ	6	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-85	H13d	Ⅱ	267	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-86	I14d	Ⅲ		I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-87	L12b	Ⅱ	38	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文、2点接合
第16図-88	H13c	Ⅱ	319	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-89	G13d	Ⅱ	6	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-90	G13c	Ⅱ	92	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-91	I14d	Ⅱ	28	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-92	H13d	Ⅱ	328	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-93	L12a	Ⅱ	49	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-94	G13c	Ⅱ	117	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-95	H14a	Ⅱ	87	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-96	L12a	Ⅱ	22	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-97	G13c	Ⅱ	112	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-98	D18b	Ⅱ	2	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-99	H14b	Ⅱ	94	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-100	L12b	Ⅱ	35	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-101	M10d	Ⅱ	14	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-102	H14a	Ⅱ	100	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-103	H13d	Ⅱ	271	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-104	B10c	Ⅱ	8	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-105	L12b	Ⅱ	36	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-106	B11b	Ⅱ	6	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文

表Ⅲ-3 掲載土器一覧表(3)

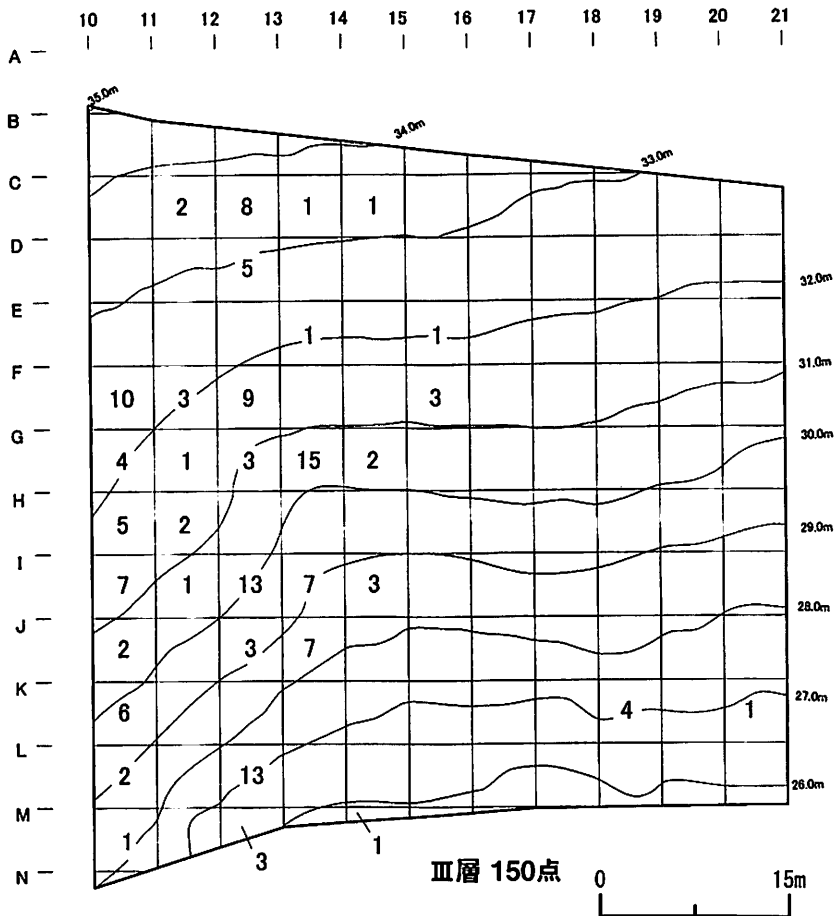
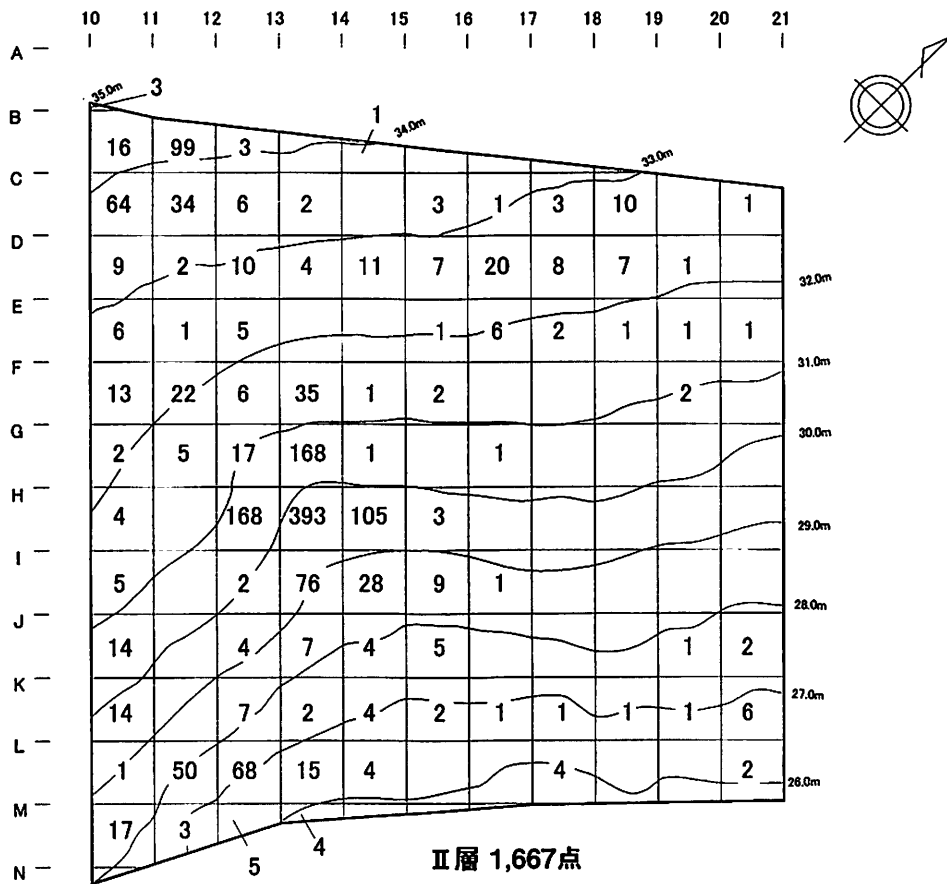
図版 No.	出土地点	層位	遺物No.	分類	部位	備考
第16図-107	H14a	Ⅱ	5	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-108	H13d	Ⅱ	266	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-109	H13a	Ⅱ	123	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-110	H13a	Ⅱ	187	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-111	H13b	Ⅱ	150	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-112	H13d	Ⅱ	311	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-113	I13d	Ⅱ	64	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第16図-114	D16c	Ⅱ	10	I b	胴部	中茶路式、微隆起線、LR短縄文
第16図-115	C16b	Ⅱ	4	I b	底部	中茶路式
第16図-116	L13c	Ⅱ	7	I b	底部	中茶路式
第16図-117	C18a	Ⅱ	7	I b	底部	中茶路式
第16図-118	H13a	Ⅱ	189	I b	底部	中茶路式、微隆起線、LR斜縄文、短縄文
第16図-119	L12d	Ⅱ	8	I b	底部	中茶路式、RL斜縄文
第16図-120	I13d	Ⅱ	23	I b	底部	中茶路式、微隆起線、RL斜縄文
第16図-121	G13b	Ⅱ	38	I b	底部	中茶路式
第17図-122	M12a	Ⅱ	3	I b	底部	中茶路式、微隆起線、RL短縄文
第17図-123	H14a	Ⅱ	55	I b	底部	中茶路式、LR斜縄文
第17図-124	C20b	Ⅱ	2	I b	底部	中茶路式、LR・RLの羽状縄文
第17図-125	C18a	Ⅱ	10	I b	底部	中茶路式
第17図-126	B11b	Ⅱ	38	Ⅱa	口縁部	静内中野式相当
第17図-127	F10a	Ⅱ	9	Ⅱa	口縁部	静内中野式相当、縄の太いLR斜縄文
第17図-128	C10c	Ⅱ	17	Ⅱa	胴部	静内中野式相当、0段多条のLR斜縄文
第17図-129	F13b	Ⅱ	21	Ⅱa	胴部	静内中野式相当、縄の太いRL斜縄文
第17図-130	L13d	Ⅱ	11	Ⅱa	胴部	静内中野式相当、縄の太いLR斜縄文、2点接合
第17図-131	F11a	Ⅱ	10	Ⅱa	胴部	静内中野式相当
第17図-132	J20b	Ⅱ	3	Ⅱa	胴部	静内中野式相当、LR斜縄文
第17図-133	G13a	Ⅱ	65	Ⅱa	胴部	静内中野式相当
第17図-134	C12b	Ⅱ	1	Ⅱa	胴部	静内中野式相当、LR斜縄文
第17図-135	C10c	Ⅱ	51	Ⅱa	胴部	静内中野式相当、LR斜縄文
第17図-136	C10b	Ⅱ	30	Ⅱa	胴部	静内中野式相当
第17図-137	B10a	Ⅱ	7	Ⅱa	胴部	静内中野式相当
第17図-138	G16a	Ⅱ	1	Ⅱa	胴部	静内中野式相当、不整なLR斜縄文
第17図-139	D10a	Ⅱ	5	Ⅱa	胴部	静内中野式相当、LR斜縄文
第17図-140	F10a	Ⅱ	17	Ⅱa	胴部	静内中野式相当、LR斜縄文
第17図-141	C10b	Ⅱ	22	Ⅱa	胴部	静内中野式相当、LR斜縄文
第17図-142	I14d	Ⅱ	29	Ⅱa	胴部	静内中野式相当、一部不整なLR斜縄文
第17図-143	K15d	Ⅱ	2	Ⅲb	口縁部	萩ヶ岡3式、口唇部と肥厚部に篋状工具でキザミ
第17図-144	M11d	Ⅱ	4	Ⅲb	口縁部	北筒式、結束第1種羽状縄文、刺突文、内面も縄文
第17図-145	B10b	Ⅱ	21	Ⅲb	口縁部	北筒式、LR斜縄文、刺突文
第18図-146	C11c	Ⅱ	10	Ⅲb	口縁部	北筒式、押引文、刺突文、内面も縄文
第18図-147	M10d	Ⅱ	12	Ⅲb	口縁部	北筒式、口唇部に縄の連続圧痕、結束第2種羽状縄文
第18図-148	D11c	I	3	Ⅲb	胴部	北筒式、結束第2種羽状縄文
第18図-149	I12c	Ⅱ	3	Ⅲb	胴部	北筒式、結束第1種羽状縄文
第18図-150	D14a	Ⅱ	3	Ⅲb	胴部	北筒式、結束第1種羽状縄文
第18図-151	M10c	Ⅱ	1	Ⅲb	胴部	北筒式、結束第2種羽状縄文
第18図-152	表採			Ⅲb	胴部	北筒式、押引文
第18図-153	D10a	Ⅱ	7	Ⅲb	胴部	北筒式、結束第2種羽状縄文
第18図-154	J12c	Ⅲ		Ⅲb	底部	北筒式、平底
第18図-155	I13a	Ⅱ	7	Ⅲ	口縁部	LR斜縄文
第18図-156	F10a	Ⅱ	16	Ⅲ	胴部	結束第1種羽状縄文
第18図-157	D13d	Ⅱ	8	Ⅲ	胴部	結束第2種羽状縄文
第18図-158	H12a	Ⅱ	1	Ⅲ	胴部	結束第1種羽状縄文、内面に指頭圧痕
第18図-159	J10b	Ⅱ	8	Ⅲ	胴部	結束第1種羽状縄文

表Ⅲ－４ 掲載土器一覽表（４）

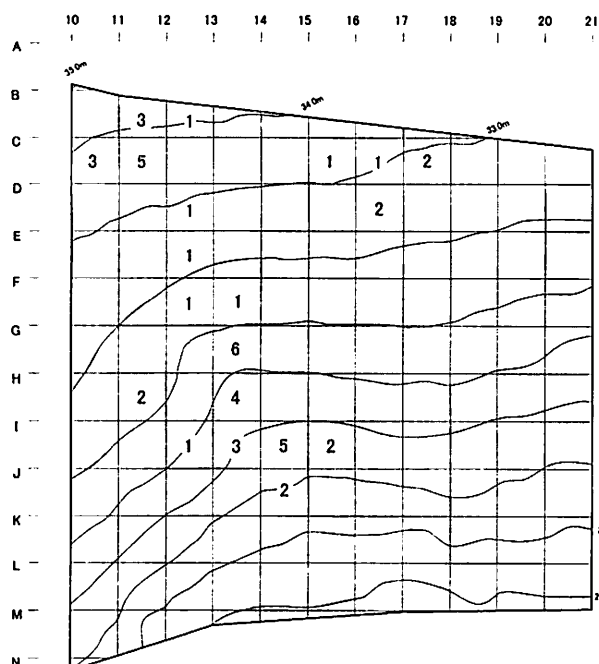
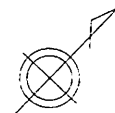
図版 No.	出土地点	層位	遺物No.	分類	部位	備考
第18図－160	L12d	Ⅱ	61	Ⅲ	胴部	萩ヶ岡3式、複節RLR縄とLR縄での羽状縄文、綾絡文
第18図－161	F11a	Ⅱ	1	Ⅲ	胴部	結束第1種羽状縄文
第18図－162	H10b	Ⅱ	11	Ⅲ	胴部	LR縄とRL縄を結束しない羽状縄文
第18図－163	L11c	Ⅱ	41	Ⅲ	胴部	LR縄の向きを変えた羽状縄文
第18図－164	F10a	Ⅱ	13	Ⅲ	胴部	LR斜縄文
第18図－165	J10a	Ⅱ	11	Ⅲ	胴部	結束第1種羽状縄文、内面に指頭圧痕
第18図－166	表採			Ⅲ	胴部	結束第1種羽状縄文
第18図－167	H10b	Ⅱ	6	Ⅲ	胴部	LR縄とRL縄を結束しない羽状縄文
第18図－168	B10b	Ⅱ	20	Ⅲ	胴部	結束第1種羽状縄文、内面に指頭圧痕
第19図－169	F10a	Ⅱ	8	Ⅲ	胴部	結束第1種羽状縄文、内面に指頭圧痕、2点接合
第19図－170	F10a	Ⅱ	11	Ⅲ	胴部	結束第1種羽状縄文、内面に指頭圧痕、2点接合
第19図－171	H11a	Ⅰ	1	Ⅲ	胴部	結束第1種羽状縄文
第19図－172	C12b	Ⅲ		Ⅲ	胴部	0段多条のLR斜縄文
第19図－173	L12c	Ⅱ	20	Ⅲ	胴部	結束第2種羽状縄文
第19図－174	K17b	Ⅱ	1	Ⅲ	胴部	LR斜縄文
第19図－175	M10d	Ⅲ		Ⅲ	胴部	結束第1種羽状縄文
第19図－176	B11d	Ⅱ	8	Ⅲ	胴部	RL縄と篋状工具によるキザミでの羽状縄文
第19図－177	B12b	Ⅱ	4	Ⅲ	胴部	無節R縄文、B12bⅡ層と接合
第19図－178	C10d	Ⅱ	4	Ⅲ	胴部	別原体のLR縄での羽状縄文
第19図－179	D11c	Ⅰ	2	Ⅲ	胴部	LR縄とRL縄を交差して施文
第19図－180	M10d	Ⅱ	5	Ⅲ	胴部	結束第1種羽状縄文
第19図－181	C10d	Ⅱ	13	Ⅲ	胴部	LR縄とRL縄を結束しない羽状縄文
第19図－182	F11b	Ⅱ	2	Ⅲ	胴部	LR縄とRL縄を結束しない羽状縄文
第19図－183	M11d	Ⅱ	2	Ⅲ	胴部	LR縄とRL縄を結束しない羽状縄文
第19図－184	D17a	Ⅱ		IVc	口縁部	御城山式相当、口唇部内面に縄によるキザミ、LR斜縄文、木葉状沈線文、D16dⅡ層と接合
第19図－185	D16d	Ⅱ	5	IVc	胴部	御城山式相当、LR斜縄文、木葉状沈線文
第19図－186	K14a	Ⅱ	13	VIb	胴部	後北C ₂ -D式、帯縄文、列点文
第19図－187	L14a	Ⅱ	2	VIb	胴部	後北C ₂ -D式、帯縄文、列点文
第19図－188	J12b	Ⅱ	1	VII	胴部	縦方向への擦痕、内面は横方向への篋削り
第19図－189	表採			VII	胴部	縦方向への擦痕、内面は横方向への篋削り



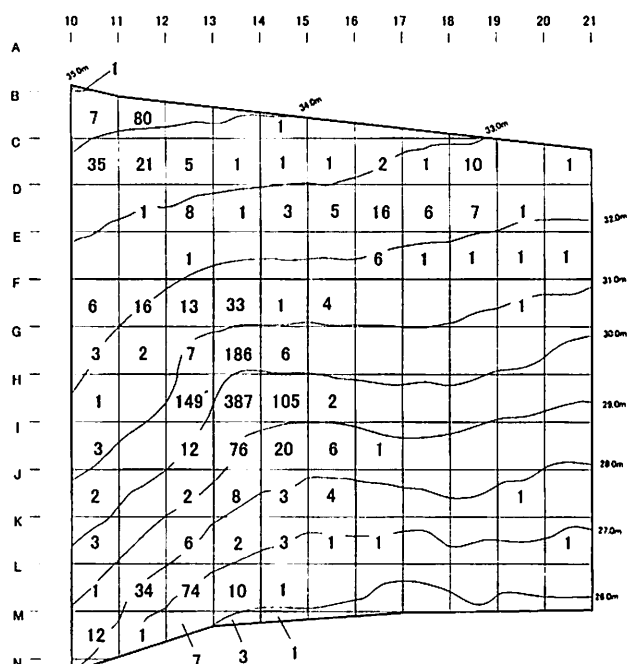
第20図 土器分布図 (1)



第21図 土器分布図 (2)

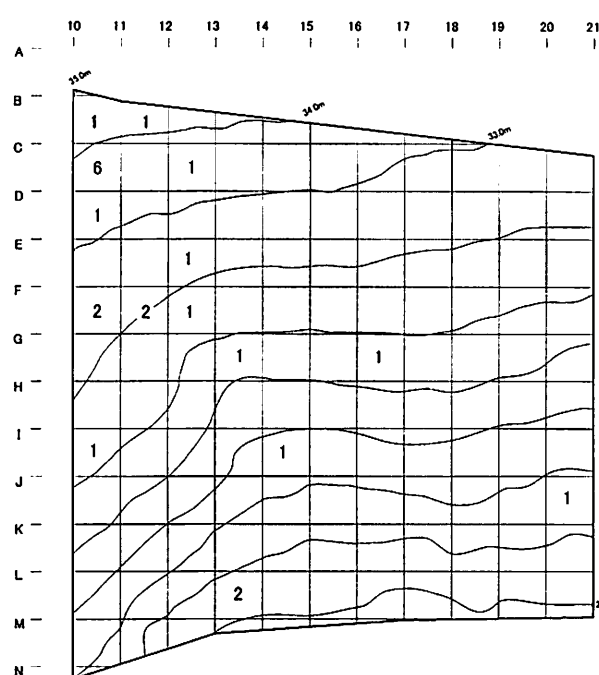


I 群 a 類 47 点

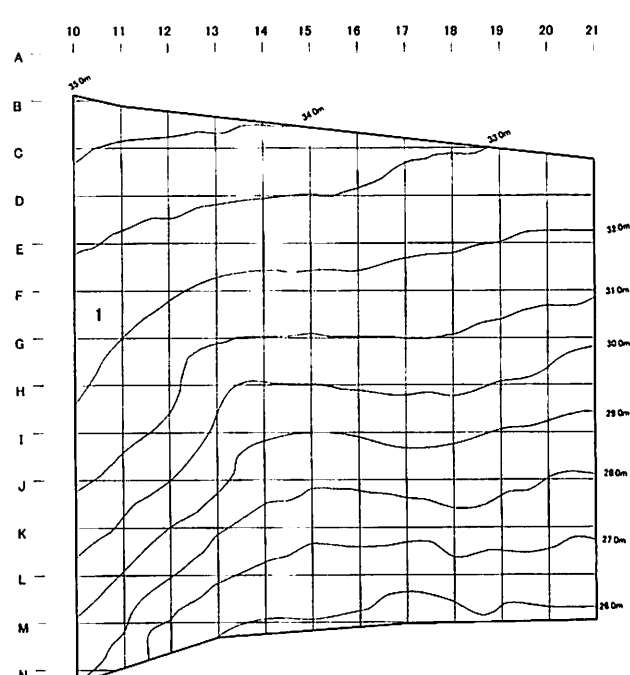


I 群 b 類 1,447 点

I 群土器 1,504 点 (うち表採 7 点、細分類不明 3 点)



II 群 a 類 23 点

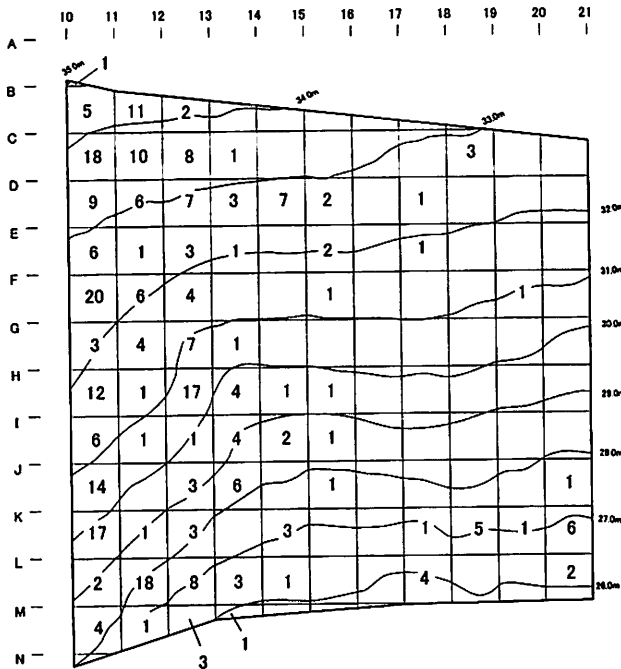


II 群 b 類 1 点

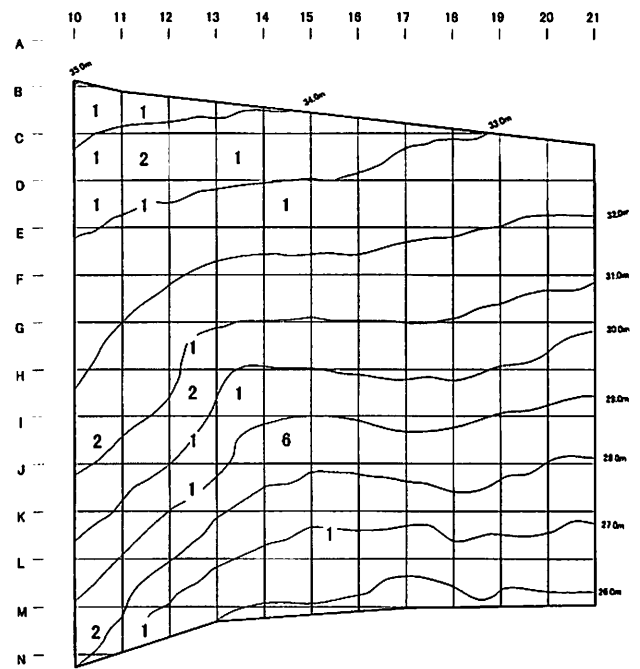
II 群土器 31 点 (うち表採 2 点、細分類不明 5 点)



第22図 土器分布図 (3)

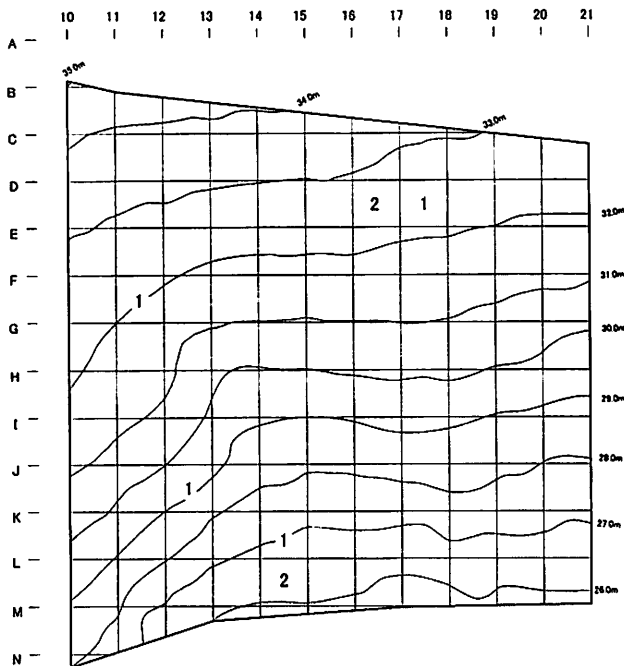


Ⅲ群 315点



Ⅲ群 b 類 27点

Ⅲ群土器 408点 (うち表採66点)



その他 9点 (うち表採1点)



第23図 土器分布図 (4)

2. 石器 (第24～29図)

剥片石器の中では石鏃が110点と多く、Rフレイクが211点ある。またスクレイパーが40点、つまみ付ナイフが25点と多く出土している。剥片の石質は黒曜石が最も多く、他に頁岩、珪化岩、チャートなどがある。礫石器の中では石斧と石のみが破片を含めて100点出土し、次いでたたき石が14点あるが、他はどの器種もわずか数点にとどまる。礫の石質は片岩、緑色泥岩、安山岩、デイサイトなどがある。

石鏃 (No.1～62)

1～24は三角形凹基。1と3は先端をわずかに欠損し、基部の形状がやや左右非対称なもの。2と4は先端付近の片側がややいびつに加工されていて、4の基部はわずかに欠損している。5は先端と片側の基部がわずかに欠損し基部に丸みがある。6は基部がやや左右非対称。7は丁寧な作り。8と9は基部がわずかに欠損している。8・10・11は腹面に主剥離面を多く残し、11は背面に表皮面を残す。12は丁寧な作り。13は側縁の2ヶ所が欠損している。14は細身で先端をわずかに欠損している。15は側縁の形状がややいびつで基部をわずかに欠損し、16はやや幅広で丁寧な作りで共に大形である。17～20は基部の挟りが深いもので、17と19は先端をわずかに欠損している。18～20は共に細身でいずれも丁寧な作りである。21は基部の形状が左右非対称。22と23は基部の片側を欠損しているが凹基と判断できるもので22は先端もわずかに欠損している。24は両面に主剥離面を残すもので加工がやや簡易である。16・19は頁岩製、その他は全て黒曜石製。

25～33は三角形平基。25と26は加工がやや簡易。27は基部の片側を、28は先端をわずかに欠損している。29は大形で加工がやや簡易。30～32は細身のもので、30は丁寧な作り、31は先端を欠損し腹面に主剥離面を残す。33は大形で加工がやや簡易である。31は頁岩製。その他は全て黒曜石製。

34～43は柳葉形。いずれもやや小形のもので、35～37と43は先端をわずかに欠損している。39～43は細身で41は大形である。43は加工が簡易で頁岩製。その他はいずれも丁寧な作りで黒曜石製。

44は木葉形。周縁の加工がやや簡易で頁岩製。

45～47は菱形。45は丁寧な作り。46は背面の周縁のみに簡易な加工をしている。47は先端と基部をわずかに欠損している。全て黒曜石製。

48～50は五角形。48は丁寧な作り。49は基部がややいびつ。50は基部が欠損しているが現形にて五角形とした。全て黒曜石製。

51～55は有茎凸基、56は有茎平基。51は非常に小形で丁寧な作りだが基部をわずかに欠損している。52はやや加工が簡易。53は両面に主剥離面を残し、54は形状がややいびつで共に先端をわずかに欠損している。55は基部を欠損しているが小さなかえし部があり、有茎凸基とした。56は先端と側縁をわずかに欠損しているが丁寧な作りである。全て黒曜石製。

57～62は形状不明のもの。57は丁寧な作りで、58・60・61は簡易な加工のもの。57・61はいずれも基部を欠損しているが柳葉形になるものと思われる。58は基部が非対称である。59は形状がいびつで、62は両端が尖り厚みがある。60は頁岩製。その他は全て黒曜石製。

石槍又はナイフ (No.63・64)

63は基部が円基で腹面に主剥離面を大きく残す。64は尖頭部側が約半分残存しているが、木葉形を呈すると思われる。63は黒曜石製。64は頁岩製。

石錐 (No.65～67)

65は棒状形で摩耗の見られる刺突部側が残存している。66は円形のつまみ部を持つもので刺突部をわずかに欠損している。67は大きなつまみ部を持つもので刺突部を欠損している。いずれも黒曜

石製。

つまみ付ナイフ (No.68～86)

68～73はバナナのような形状をしたものでいずれも片面加工である。68と69は丁寧な作りで背面右側縁に直線的で急角度の刃部を加工している。70は周縁のみの加工である。71と72は端部を欠損しているが丁寧な作りである。73はつまみ部の位置がやや変則的なものであるが丁寧な作りである。74は木葉形で薄く反っている。

75～84はナスのような形状をしたものでいずれも片面加工である。75・76・78～81は丁寧な作りのもの。76は背面右側縁の刃部が逆くの字状になっている。77は周縁のみの加工である。79は背面右側縁に急角度の刃部を加工している。80は端部がこぶ状に張り出している。82は端部が直線的に加工されている。83と84は簡易な刃部を加工しているもの。85はつまみ部を加工しているが刃部は未加工のもの。86は黒曜石製。75・77はチャート製。他は全て頁岩製。

両面調整石器 (No.87・88)

87は円形で薄く整形されている。88は大きく欠損しているが石槍の基部側の可能性がある。共に黒曜石製。

スクレイパー (No.89～110)

89～107はサイドスクレイパーである。89は薄く背面全面に丁寧な加工をしている。90と91は端部を曲線的に加工したもの。92・94～96は端部がやや尖る形状のもの。97は背面が丁寧な加工でつまみ付ナイフの欠損品の可能性がある。98と99は小形で楕円形のもの。100は多角形をしたもの。101は片側が内湾している。102～107は加工が簡易なもの。103は後述する異形石器の可能性があり。108はエンドスクレイパーで籠状の端部に刃部を加工している。表皮面を大きく残す。109～110はラウンドスクレイパーで共に周縁に刃部を加工している。110は表皮面を大きく残す。89・91・92・101・103～110は黒曜石製。他は全て頁岩製。

Rフレイク (No.111～118)

いずれも剥片素材の一部に簡易的な二次加工が見られるもの。111と115は緩いノッチ状の刃部を加工したもの。112は尖頭部に加工したもの。116は外湾する刃部で、他は直線的な刃部を加工したもの。113は頁岩製。114は珪化岩製。他は全て黒曜石製。

Uフレイク (No.119～122)

いずれも剥片素材の一部に使用痕と見られる小剥離があるもの。120は背面の対向する2面が楔形の形状をしている。122は表皮面を大きく残す。121は黒曜石製。他は全て頁岩製。

石核 (No.123～127)

123は楕円形素材で小さい剥片を連続して剥離しているようであり、ピエス・エスキーユの可能性があり。124～127はやや大きめの剥片を連続して剥離している。125は頁岩製。他は全て黒曜石製。

異形石器 (No.128～130)

いずれも小形でひょうたん形に加工している。他の遺跡での過去の出土例からも、縄文時代早期後半の東釧路式系土器に伴って出土することから、当遺跡の主体をなす中茶路式土器の時期に製作されたものと考えている。全て黒曜石製。

石斧・石のみ (No.131～139)

刃部のみや基部・胴部のみのものが数多く出土したが、ここでは9点を掲載した。131は全体を敲打により整形し刃部周辺のみ研磨したもので片刃。平面形は撥形で円刃である。132～137は擦切

り技法による磨製石斧で135と137が両刃で他は片刃。平面形は132が撥形で他はやや撥形をしている。刃部は132と135がやや尖る円刃になると思われ、133と134は円刃、136と137はやや偏刃で136は器形が薄い。138は定角石斧で4面とも研磨が施されている。刃部を破損しているが両刃で蛤刃になるものと思われる。139は長さ約15cm、幅約3cmの磨製石のみで片側縁が全面欠けている。刃部は片刃で使用による欠けが見られる。本資料は今年度調査で出土したものが約50mを隔てて昨年度の調査で出土したものと接合した資料である。131は玄武岩製。138は安山岩製。139は片岩製。他は全て緑色泥岩製。

たたき石 (No.140~152)

140~142は楕円形の扁平礫の両端にたたき痕があるもの。140は片側のたたき痕部分が欠けている。143~147は片側の端部にたたき痕があるもの。いずれも楕円形で144・147は扁平礫、その他はやや厚みがあるもの。148は球形に近い形状で両端にたたき痕がある。149は尖り気味の片側端部にたたき痕がある。150は楕円形の扁平礫で端部にたたき痕がある。151・152は長楕円形の扁平礫で両面の中央部付近にたたき痕があり、151は片面にすり痕も見られる。141・149はチャート製、151はデイサイト製、他は全て安山岩製。

すり石 (No.153~155)

153は円礫の長軸の一面に幅の広いすり痕がある。154は円礫の長軸の一面にすり痕がある。155は扁平な円礫の長軸の側縁にすり痕がある。154はチャート製、他は安山岩製。

石錘 (No.156)

156は菱形に近い楕円形の扁平礫の長軸側両端2ヶ所を打ち欠いている。泥岩製。

台石 (No.157・158)

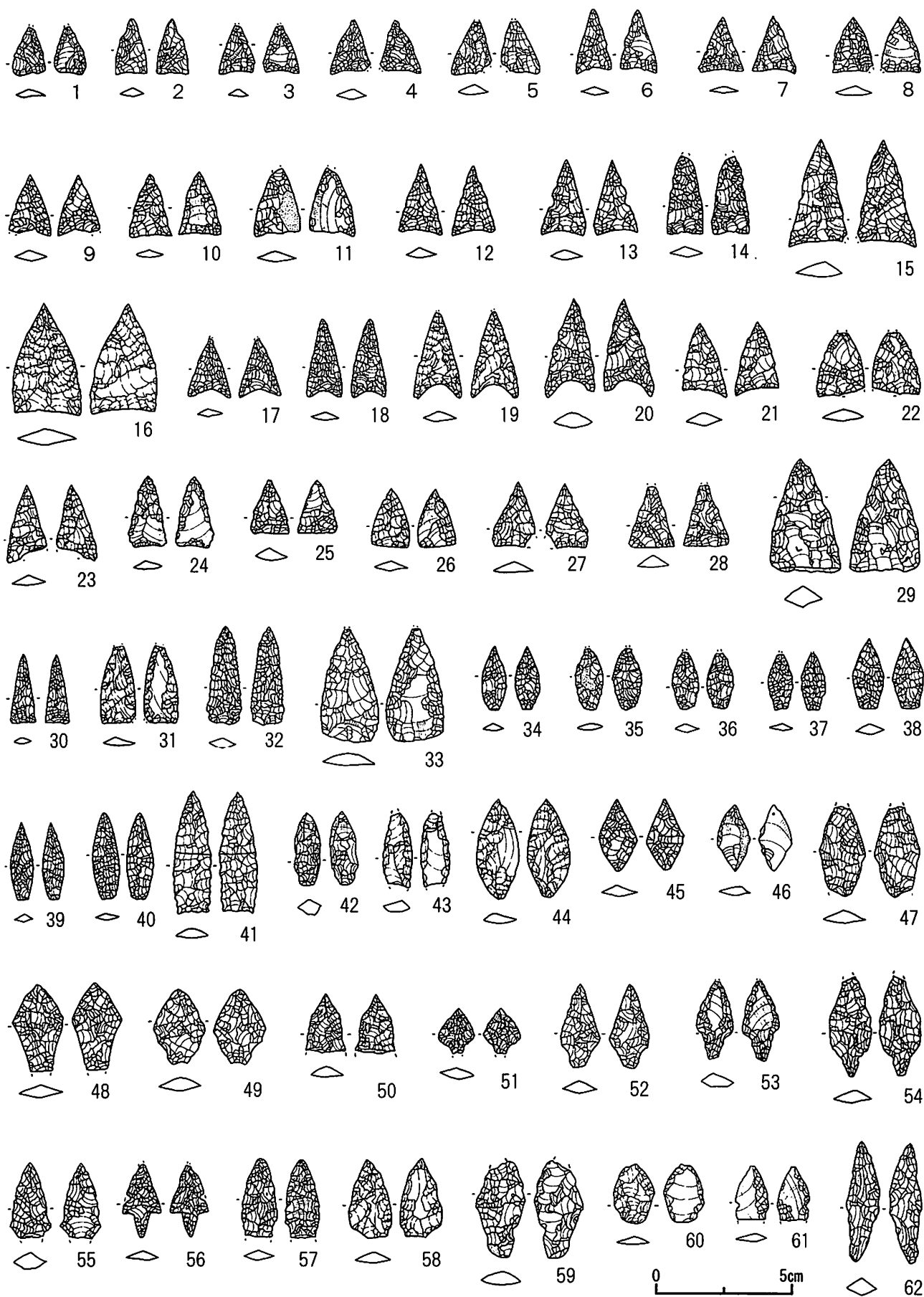
157は楕円形の扁平礫の片面にたたき痕がある。158は楕円形の扁平礫の両面ほぼ中央部にたたき痕があり、一面のほぼ全面にすり痕がある。157は安山岩製。158はデイサイト製。

石皿 (No.159)

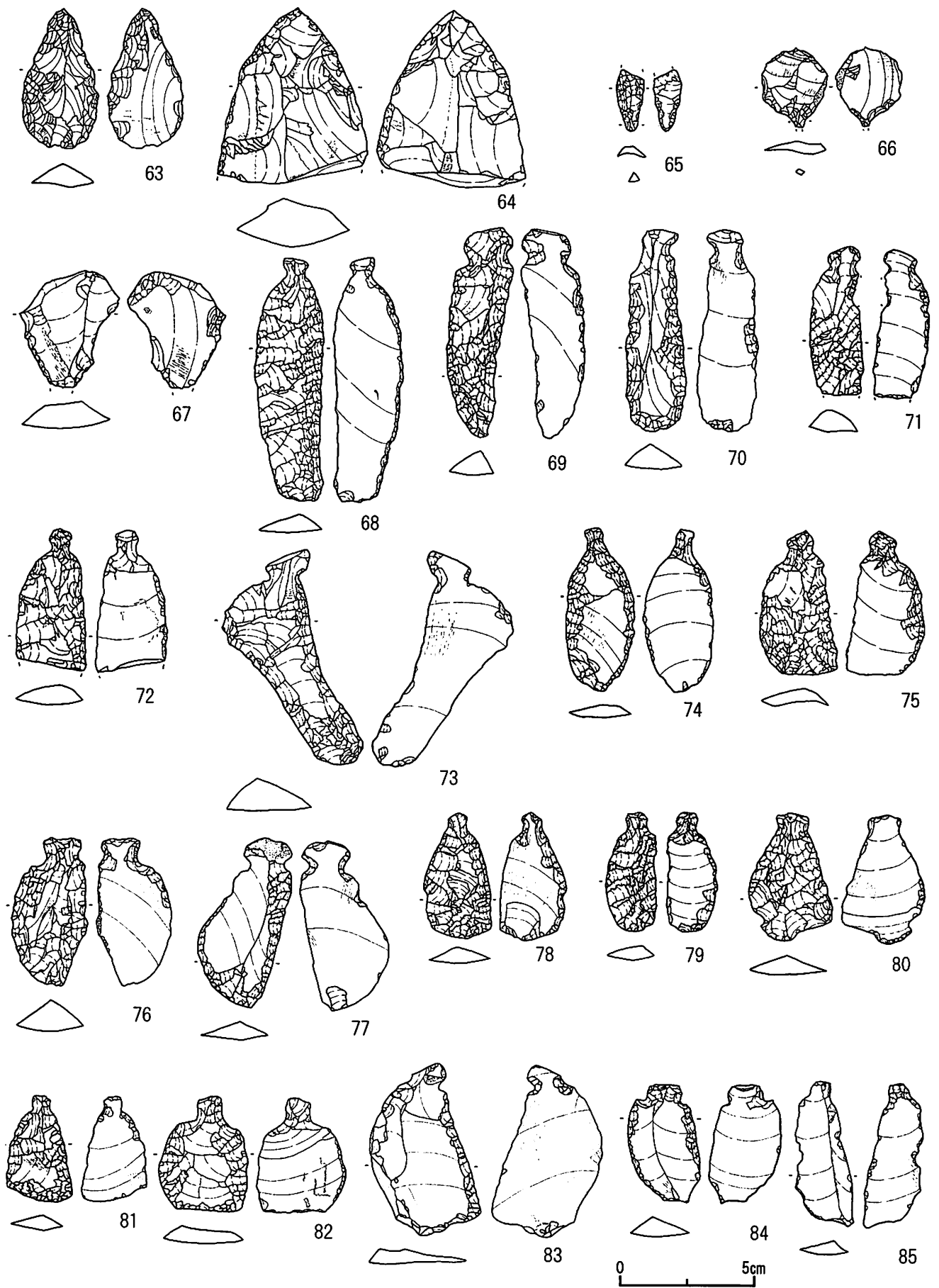
159は楕円形のやや厚みのある扁平礫の一面にすり痕がある。安山岩製。

石製品 (No.160)

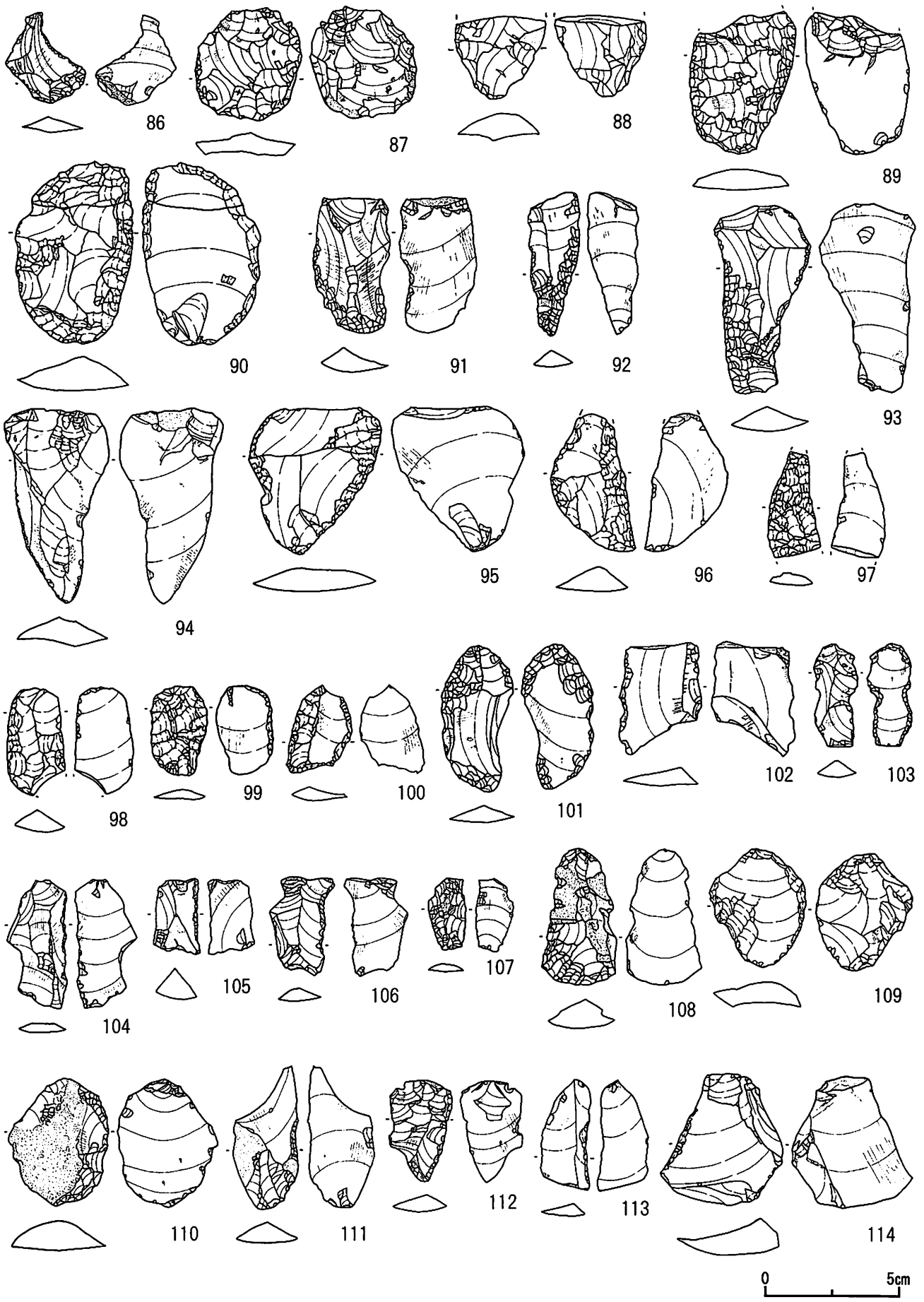
160は軽石製石製品の破片で人工的に加工が施され、器の形状を呈すると考えるが実体は不明である。



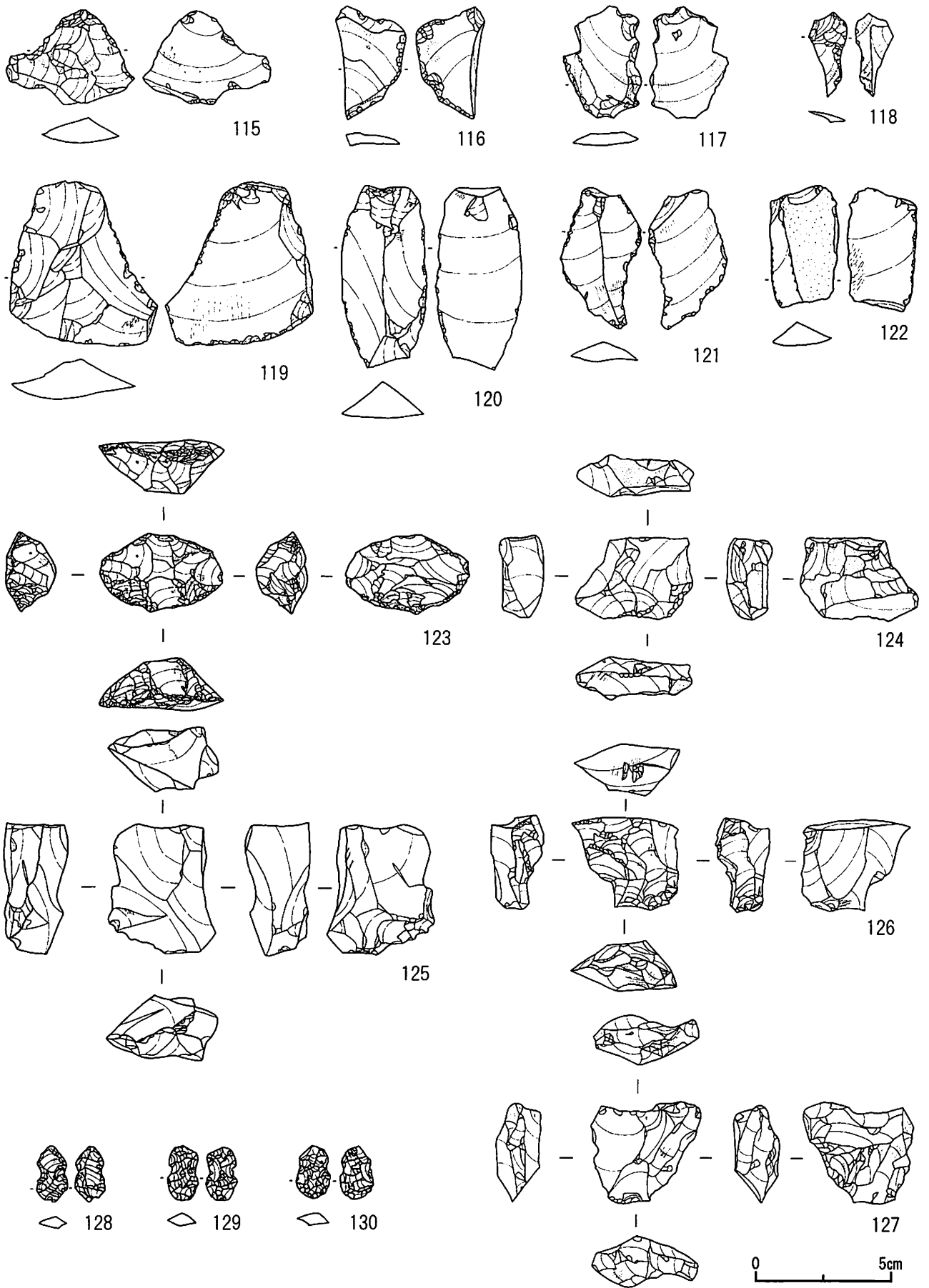
第24图 石器 (1)



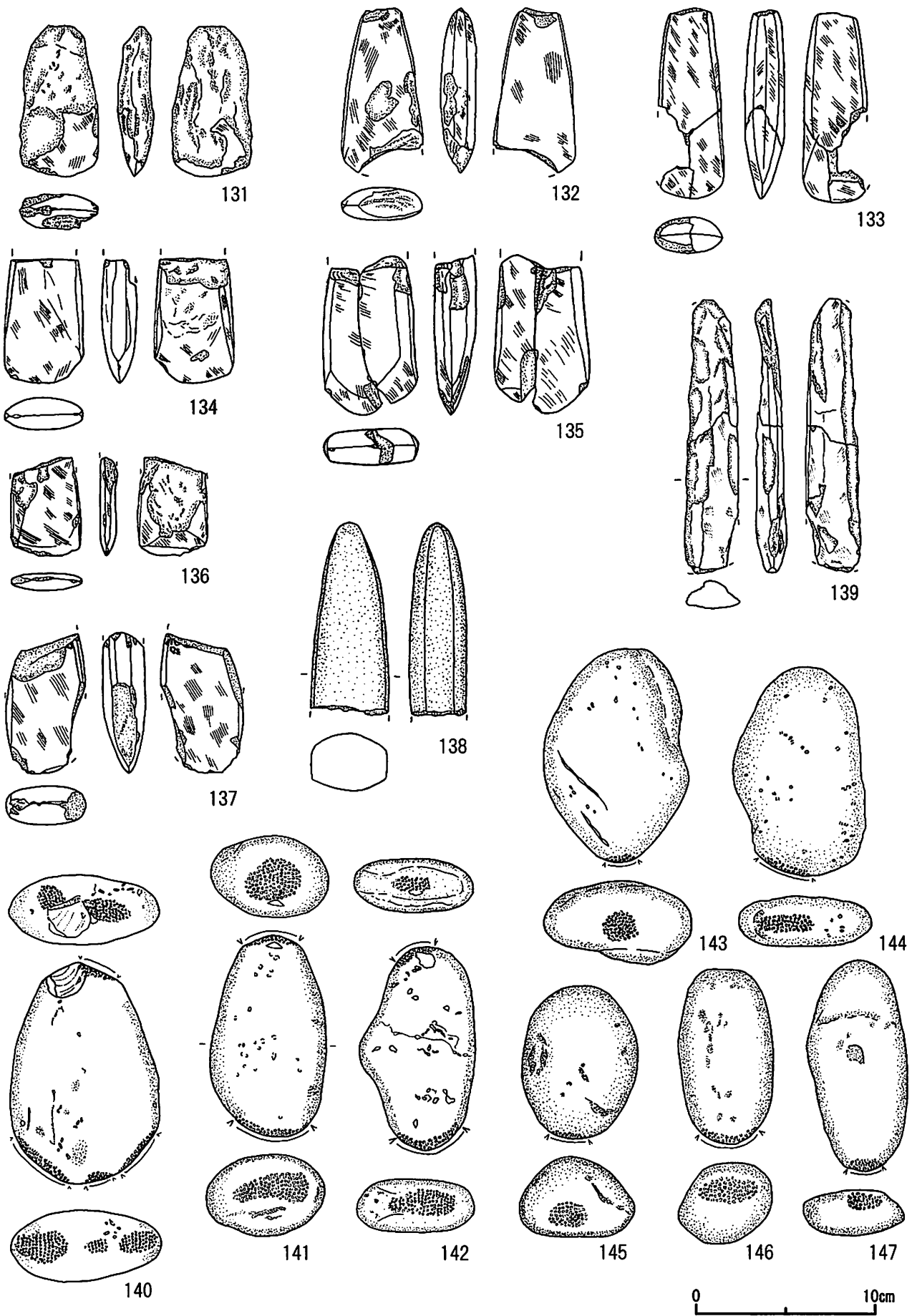
第25图 石器 (2)



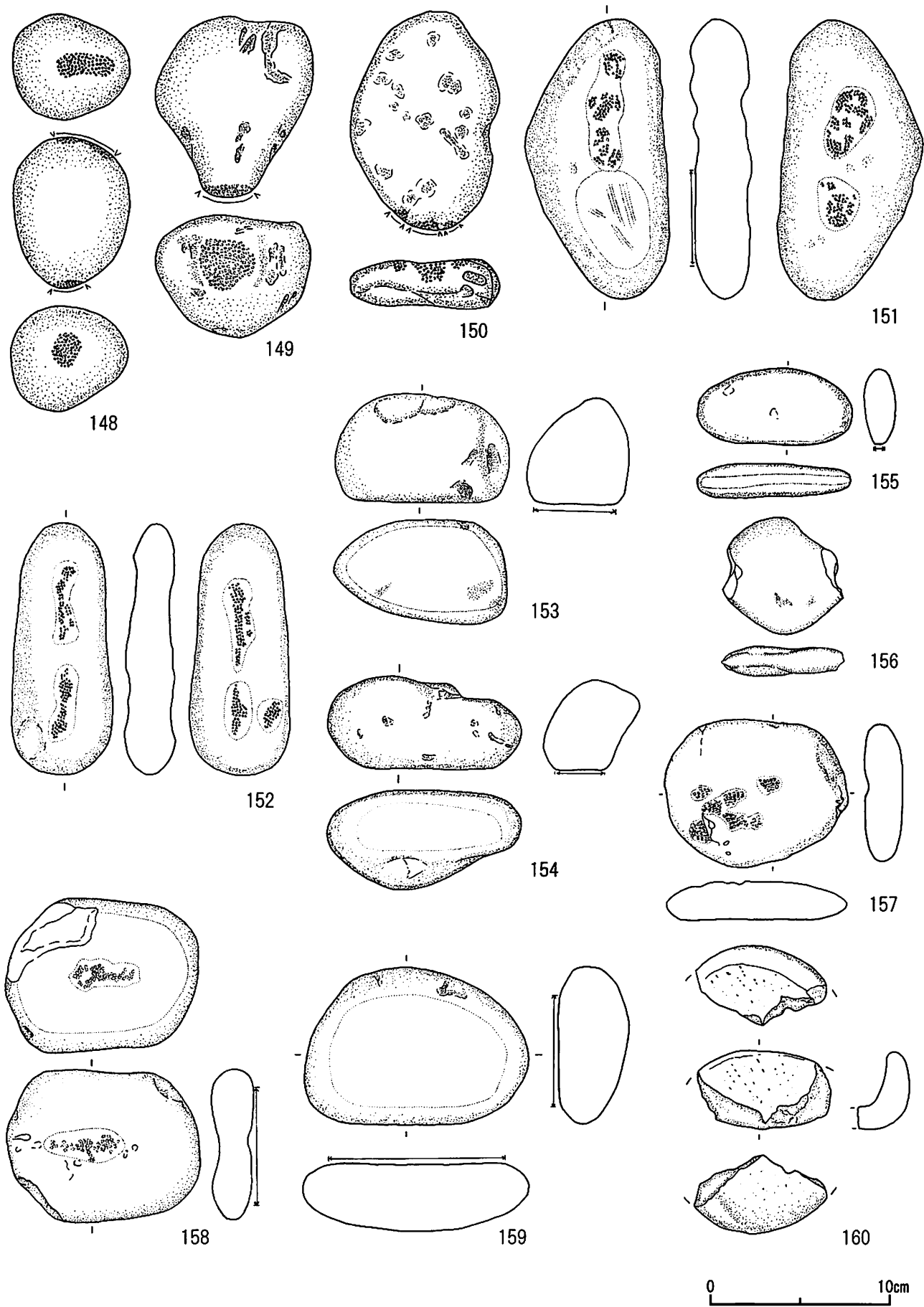
第26图 石器 (3)



第27图 石器 (4)



第28图 石器 (5)



第29图 石器 (6)

表Ⅲ-5 掲載石器一覽表(1)

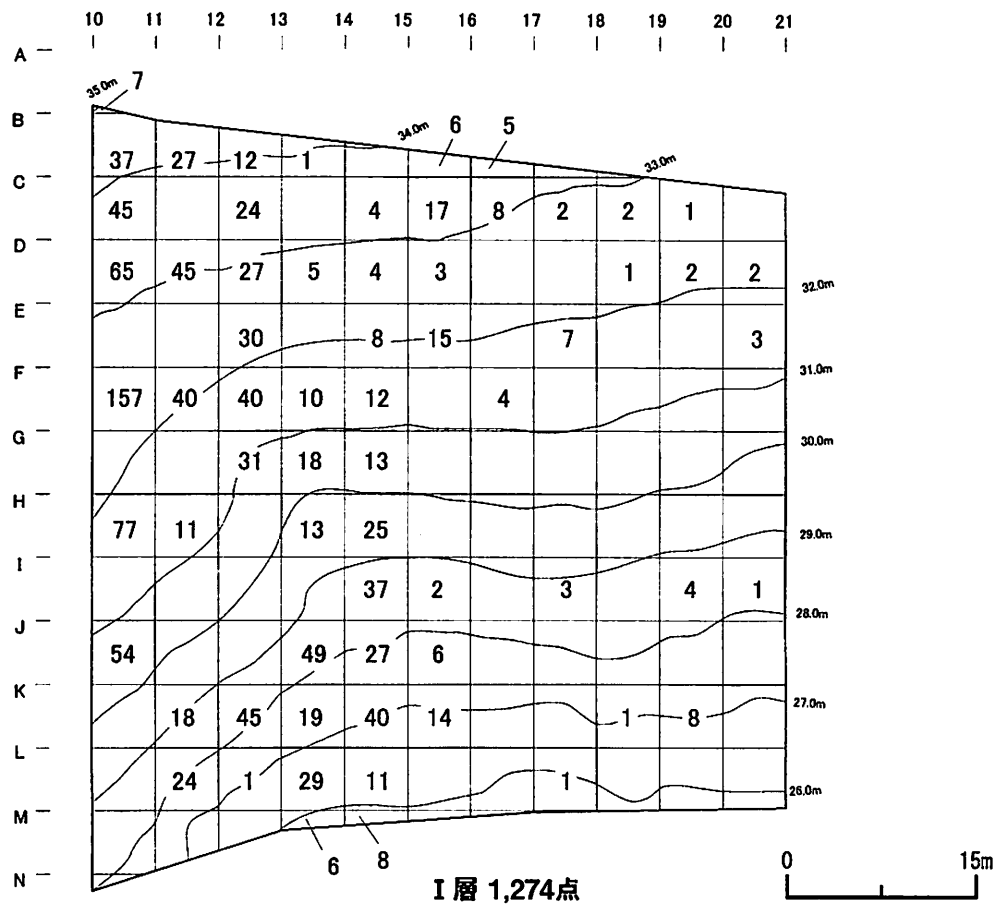
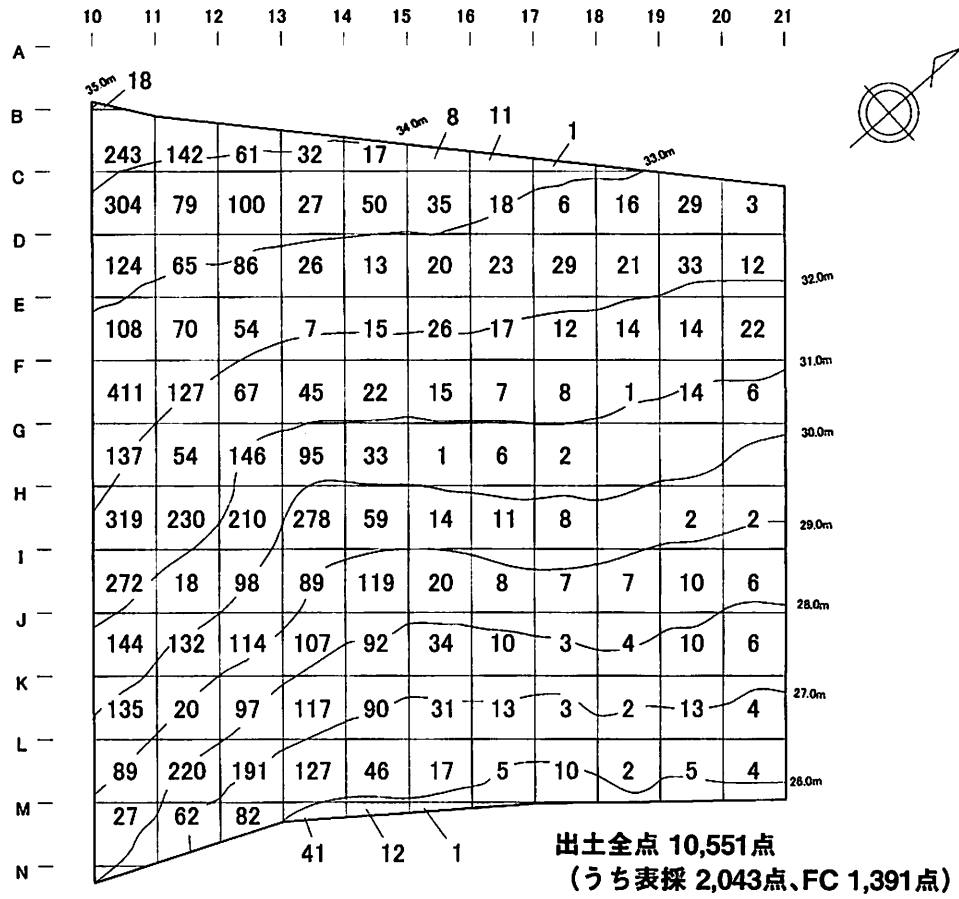
図版No.	出土地点	層位	遺物No.	分類	計測値				石質	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
第24図-1	H10b	Ⅱ	12	石 鏃	(1.8)	1.2	0.3	(0.5)	黒曜石	三角形凹基
第24図-2	D16d	Ⅱ	9	石 鏃	2.1	1.2	0.35	0.6	黒曜石	三角形凹基
第24図-3	M13a	Ⅱ		石 鏃	(1.8)	1.4	0.3	(0.6)	黒曜石	三角形凹基
第24図-4	表採			石 鏃	2.0	(1.5)	0.4	(0.7)	黒曜石	三角形凹基
第24図-5	F17d	Ⅱ	1	石 鏃	(2.0)	(1.5)	0.4	(0.8)	黒曜石	三角形凹基
第24図-6	J20a	Ⅱ	2	石 鏃	2.4	1.3	0.3	0.5	黒曜石	三角形凹基
第24図-7	I14b	Ⅰ	6	石 鏃	2.1	1.7	0.3	0.4	黒曜石	三角形凹基
第24図-8	D19d	Ⅱ	3	石 鏃	2.1	(1.5)	0.4	(0.8)	黒曜石	三角形凹基
第24図-9	E10c	Ⅱ	8	石 鏃	(2.3)	(1.5)	0.4	(0.7)	黒曜石	三角形凹基
第24図-10	J19c	Ⅱ	6	石 鏃	2.3	1.6	0.3	0.7	黒曜石	三角形凹基
第24図-11	C10c	Ⅱ		石 鏃	(2.5)	1.8	0.4	(1.1)	黒曜石	三角形凹基
第24図-12	H20b	Ⅱ	1	石 鏃	2.6	1.6	0.4	0.8	黒曜石	三角形凹基
第24図-13	I16a	Ⅱ	2	石 鏃	2.8	1.7	0.4	(0.8)	黒曜石	三角形凹基
第24図-14	I14a	Ⅰ	5	石 鏃	(2.9)	1.4	0.4	(1.1)	黒曜石	三角形凹基
第24図-15	C20b	Ⅱ	3	石 鏃	4.0	(2.2)	0.6	(2.9)	黒曜石	三角形凹基
第24図-16	E13a	Ⅲ	1	石 鏃	4.2	2.5	0.6	4.6	珪化岩	三角形凹基
第24図-17	H10b	Ⅱ	9	石 鏃	(2.2)	1.6	0.3	(0.6)	黒曜石	三角形凹基
第24図-18	E20d	Ⅲ	2	石 鏃	2.9	1.3	0.3	0.8	黒曜石	三角形凹基
第24図-19	H13c	Ⅱ	26	石 鏃	(3.2)	1.8	0.4	(1.3)	頁岩	三角形凹基
第24図-20	D13a	Ⅱ	7	石 鏃	3.6	1.9	0.6	1.9	黒曜石	三角形凹基
第24図-21	K16a	Ⅱ	2	石 鏃	2.8	1.7	0.5	1.1	黒曜石	三角形凹基
第24図-22	C15b	Ⅱ		石 鏃	(2.3)	1.8	0.5	(1.3)	黒曜石	三角形凹基
第24図-23	J17d	Ⅱ	1	石 鏃	(2.9)	(1.5)	0.4	(0.8)	黒曜石	三角形平基
第24図-24	L18b	Ⅱ	3	石 鏃	2.6	1.5	0.3	0.7	黒曜石	三角形平基
第24図-25	表採			石 鏃	2.0	1.4	0.5	0.8	黒曜石	三角形平基
第24図-26	J14b	Ⅱ	7	石 鏃	2.2	1.4	0.4	0.7	黒曜石	三角形平基
第24図-27	表採			石 鏃	2.4	(1.6)	0.4	(0.9)	黒曜石	三角形平基
第24図-28	F12b	Ⅰ	4	石 鏃	(2.2)	1.7	0.5	(1.0)	黒曜石	三角形平基
第24図-29	F10a	Ⅰ	6	石 鏃	4.2	2.6	0.8	6.4	黒曜石	三角形平基
第24図-30	L10b	Ⅱ	2	石 鏃	2.5	0.9	0.3	0.5	黒曜石	三角形平基
第24図-31	D10a	Ⅱ	12	石 鏃	(2.8)	(1.3)	3.5	(1.0)	頁岩	三角形平基
第24図-32	J14b	Ⅰ	2	石 鏃	3.6	1.3	0.4	1.3	黒曜石	三角形平基
第24図-33	F15a	Ⅱ	3	石 鏃	(4.2)	2.1	0.4	(3.3)	黒曜石	三角形平基
第24図-34	表採			石 鏃	2.4	0.9	0.3	0.4	黒曜石	柳葉形
第24図-35	L13b	Ⅱ	3	石 鏃	(2.2)	1.1	0.2	(0.4)	黒曜石	柳葉形
第24図-36	B11b	Ⅱ	60	石 鏃	(2.1)	1.0	0.4	(0.6)	黒曜石	柳葉形
第24図-37	H13d	Ⅱ	280	石 鏃	(2.1)	0.9	0.3	(0.4)	黒曜石	柳葉形
第24図-38	I12c	Ⅱ	1	石 鏃	2.6	1.15	0.4	0.8	黒曜石	柳葉形
第24図-39	I13c	Ⅱ	14	石 鏃	2.9	0.8	0.3	0.5	黒曜石	柳葉形
第24図-40	F13b	Ⅱ	6	石 鏃	3.2	1.0	0.3	0.7	黒曜石	柳葉形
第24図-41	I14c	Ⅱ	22	石 鏃	4.5	1.4	0.4	1.7	黒曜石	柳葉形、F11aⅢ層と接合
第24図-42	I14a	Ⅱ	25	石 鏃	2.7	1.0	0.6	1.3	黒曜石	柳葉形
第24図-43	G14a	Ⅱ	2	石 鏃	(2.8)	1.1	0.4	(1.0)	頁岩	柳葉形
第24図-44	B10d	Ⅱ	18	石 鏃	3.65	1.6	0.4	1.9	頁岩	木葉形
第24図-45	L20b	Ⅱ	5	石 鏃	2.7	1.4	0.4	0.9	黒曜石	菱形
第24図-46	F10c	Ⅱ		石 鏃	2.5	1.2	0.4	0.8	黒曜石	菱形
第24図-47	F10d	Ⅱ	22	石 鏃	(3.3)	1.7	0.5	(2.0)	黒曜石	菱形
第24図-48	H15b	Ⅱ	5	石 鏃	(3.3)	1.9	0.5	(2.0)	黒曜石	五角形
第24図-49	C18d	Ⅱ	5	石 鏃	2.8	1.9	0.5	1.7	黒曜石	五角形
第24図-50	G14d	Ⅰ	1	石 鏃	(2.2)	1.5	0.4	(0.6)	黒曜石	五角形
第24図-51	C13d	Ⅱ	9	石 鏃	(1.7)	0.9	0.4	(0.6)	黒曜石	有茎凸基
第24図-52	C18c	Ⅱ		石 鏃	3.1	1.5	0.5	1.4	黒曜石	有茎凸基
第24図-53	B11b	Ⅱ	61	石 鏃	(2.9)	1.4	0.5	(1.3)	黒曜石	有茎凸基
第24図-54	K13c	Ⅱ	4	石 鏃	(3.7)	1.6	0.5	(2.0)	黒曜石	有茎凸基

表Ⅲ-6 掲載石器一覧表(2)

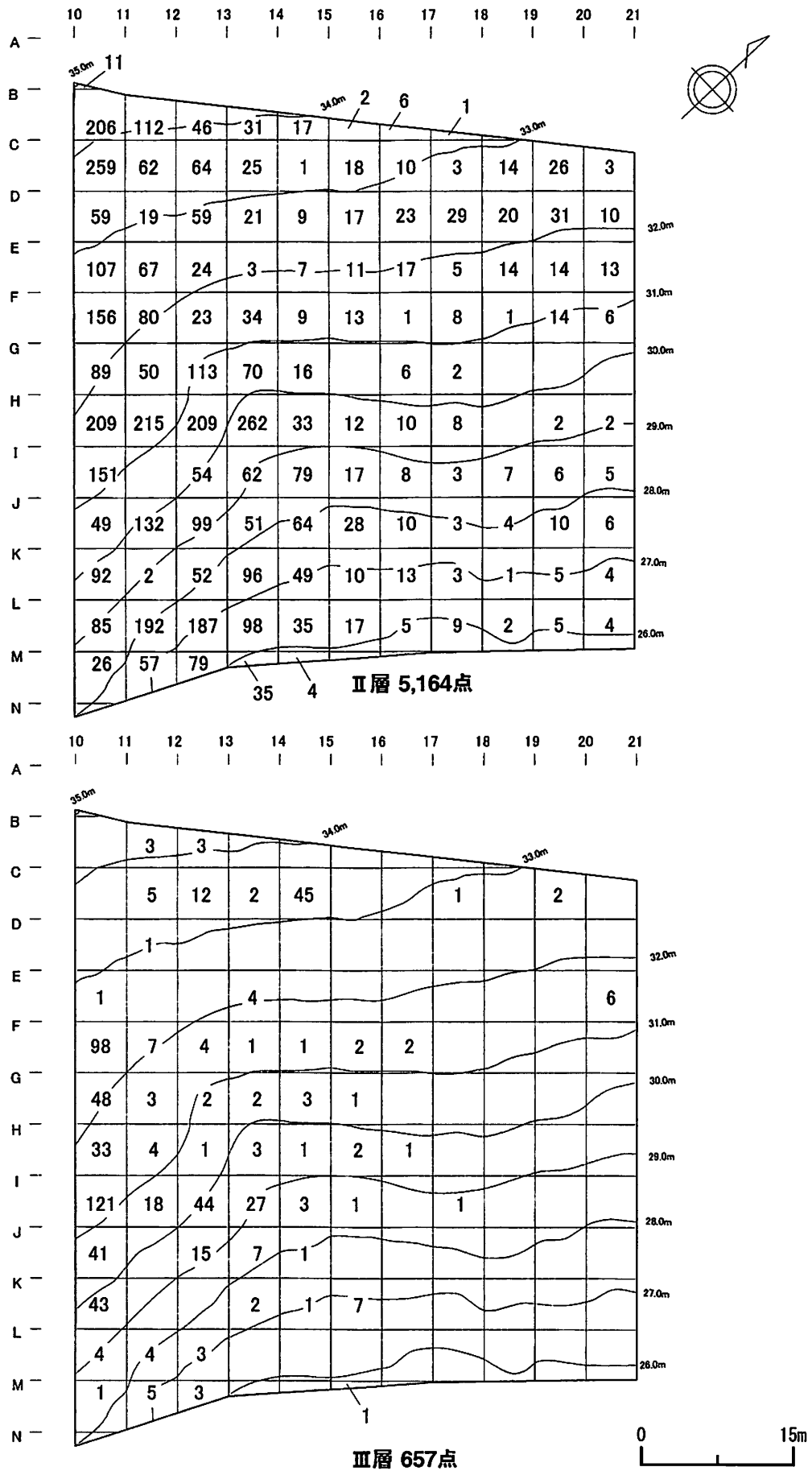
図版 No.	出土地点	層位	遺物No.	分類	計測値				石質	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
第24図-55	B11d	Ⅱ	82	石 鏃	(2.8)	1.55	0.6	(1.5)	黒曜石	有茎凸基
第24図-56	A10b	Ⅱ	4	石 鏃	(2.7)	1.5	0.4	(0.6)	黒曜石	有茎平基
第24図-57	C11d	Ⅲ		石 鏃	(2.9)	1.3	0.4	(1.3)	黒曜石	形状不明
第24図-58	C16b	Ⅱ	6	石 鏃	2.9	1.6	0.4	1.6	頁岩	形状不明
第24図-59	B12b	Ⅰ	2	石 鏃	(3.6)	1.9	0.5	(2.9)	黒曜石	形状不明
第24図-60	F20d	Ⅱ		石 鏃	(2.2)	1.5	0.3	(0.7)	頁岩	形状不明
第24図-61	J15a	Ⅰ	1	石 鏃	(2.0)	1.2	0.3	(0.6)	黒曜石	形状不明
第24図-62	D20b	Ⅱ	1	石 鏃	4.5	1.3	0.7	2.5	黒曜石	形状不明
第25図-63	C15b	Ⅱ		石槍又はナイフ	5.3	2.8	0.9	9.8	黒曜石	無茎円基
第25図-64	E11d	Ⅱ	2	石槍又はナイフ	(6.5)	5.5	1.9	(53.5)	頁岩	木葉形
第25図-65	F10a	Ⅰ		石 錐	(2.3)	1.1	0.45	(0.8)	頁岩	
第25図-66	F10d	Ⅱ		石 錐	(3.0)	2.5	0.5	(2.6)	黒曜石	
第25図-67	G12c	Ⅱ		石 錐	(4.3)	3.7	1.0	(13.8)	頁岩	
第25図-68	J13a	Ⅱ	4	つまみ付ナイフ	9.0	2.6	0.7	15.4	頁岩	
第25図-69	E12c	Ⅰ	5	つまみ付ナイフ	7.7	2.4	0.9	16.0	頁岩	
第25図-70	B10a	Ⅰ	1	つまみ付ナイフ	7.5	2.3	1.0	13.2	頁岩	
第25図-71	H11b	Ⅱ	1	つまみ付ナイフ	5.5	2.0	0.9	8.9	頁岩	
第25図-72	M11d	Ⅱ	1	つまみ付ナイフ	(5.2)	2.6	0.8	(7.4)	頁岩	
第25図-73	F10a	Ⅱ	21	つまみ付ナイフ	7.9	5.2	1.2	20.0	頁岩	
第25図-74	K15d	Ⅱ	3	つまみ付ナイフ	6.0	2.6	0.5	6.4	頁岩	
第25図-75	G12a	Ⅱ	7	つまみ付ナイフ	5.3	2.9	0.7	9.2	チャート	
第25図-76	表採			つまみ付ナイフ	5.4	2.8	1.2	15.0	頁岩	
第25図-77	G12b	Ⅱ	3	つまみ付ナイフ	6.3	3.4	0.7	11.2	チャート	
第25図-78	H11c	Ⅱ	2	つまみ付ナイフ	4.6	2.5	0.6	6.1	頁岩	
第25図-79	H10b	Ⅱ	13	つまみ付ナイフ	4.4	1.9	0.6	5.1	頁岩	
第25図-80	L12c	Ⅱ	4	つまみ付ナイフ	4.7	3.1	0.8	8.1	頁岩	
第25図-81	K14d	Ⅰ	6	つまみ付ナイフ	3.9	2.4	0.6	3.7	頁岩	
第25図-82	L10b	Ⅲ		つまみ付ナイフ	4.3	3.3	0.7	8.0	頁岩	
第25図-83	C10a	Ⅱ	41	つまみ付ナイフ	6.3	4.1	0.6	14.4	珪化岩	
第25図-84	F12d	Ⅲ		つまみ付ナイフ	4.4	2.7	0.8	6.3	珪化岩	
第25図-85	F10b	Ⅰ	7	つまみ付ナイフ	5.4	2.2	0.5	4.1	頁岩	
第26図-86	表採			つまみ付ナイフ	3.4	3.0	0.7	3.2	黒曜石	
第26図-87	L10b	Ⅱ		両面調整石器	4.3	4.0	0.9	15.8	黒曜石	
第26図-88	A10b	Ⅱ		両面調整石器	(3.1)	(3.4)	(1.1)	(8.6)	黒曜石	
第26図-89	表採			スクレイパー	(5.4)	3.9	0.8	(16.6)	黒曜石	
第26図-90	F13b	Ⅱ	1	スクレイパー	(5.4)	4.4	1.3	(33.2)	頁岩	D15dⅡ層と接合
第26図-91	K13d	Ⅱ		スクレイパー	5.1	2.9	1.0	11.0	黒曜石	
第26図-92	C10c	Ⅱ		スクレイパー	5.4	2.0	0.7	3.9	黒曜石	
第26図-93	K10a	Ⅱ	15	スクレイパー	7.1	3.7	0.9	17.0	黒曜石	
第26図-94	B10b	Ⅱ	16	スクレイパー	7.3	4.0	1.2	17.4	頁岩	
第26図-95	K16b	Ⅱ	4	スクレイパー	5.4	5.0	0.9	22.0	頁岩	
第26図-96	C12b	Ⅱ		スクレイパー	(5.1)	3.1	1.0	(10.2)	頁岩	
第26図-97	E10d	Ⅱ		スクレイパー	(4.0)	2.0	0.5	(3.7)	頁岩	
第26図-98	H10b	Ⅱ	10	スクレイパー	(4.0)	(2.2)	0.9	(5.6)	頁岩	
第26図-99	L11c	Ⅱ	44	スクレイパー	3.4	2.1	0.4	2.6	頁岩	
第26図-100	B14b	Ⅱ		スクレイパー	3.3	2.5	0.5	2.9	頁岩	
第26図-101	C10b	Ⅰ		スクレイパー	5.5	2.7	0.7	6.6	黒曜石	
第26図-102	K16b	Ⅱ		スクレイパー	4.2	3.2	0.8	9.7	頁岩	
第26図-103	B12b	Ⅱ		スクレイパー	3.9	1.7	0.7	3.0	黒曜石	
第26図-104	F10b	Ⅲ		スクレイパー	4.8	2.3	0.4	3.7	黒曜石	
第26図-105	D19a	Ⅱ		スクレイパー	2.9	1.7	1.2	4.0	黒曜石	
第26図-106	表採			スクレイパー	3.7	2.4	0.5	3.9	黒曜石	
第26図-107	C11a	Ⅱ		スクレイパー	2.7	1.4	0.3	0.8	黒曜石	
第26図-108	L11d	Ⅱ		スクレイパー	5.1	2.9	1.1	13.8	黒曜石	

表Ⅲ-7 掲載石器一覧表(3)

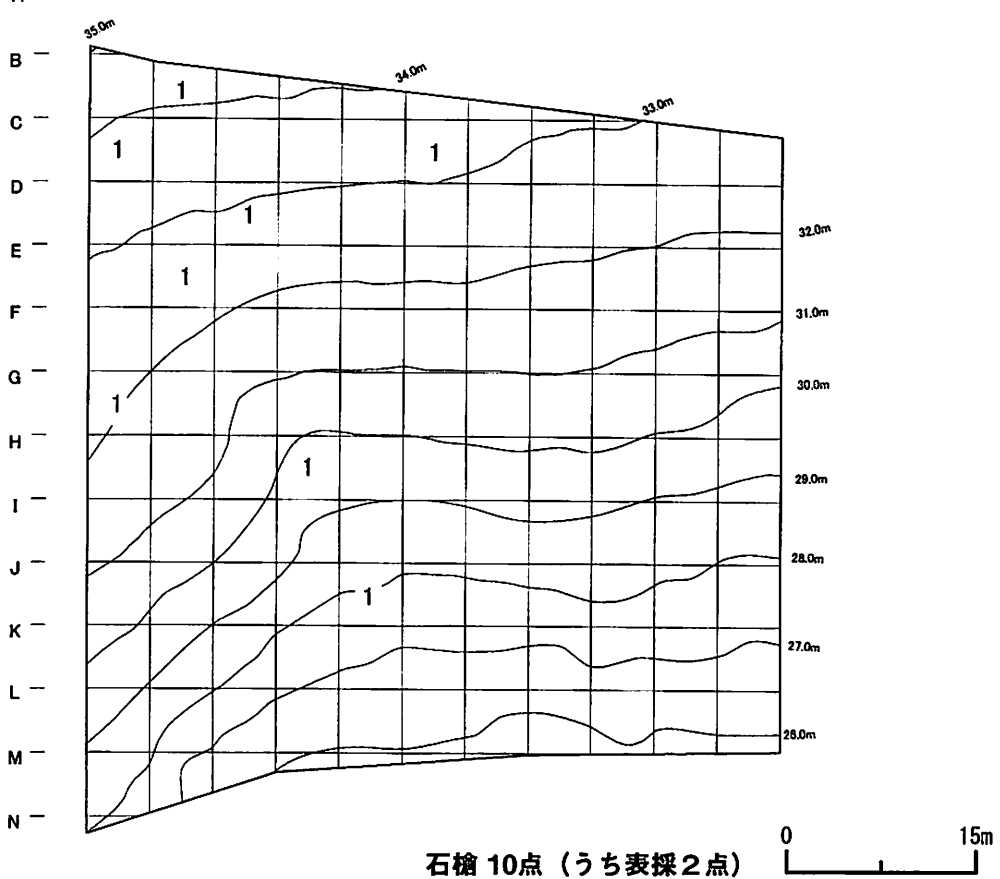
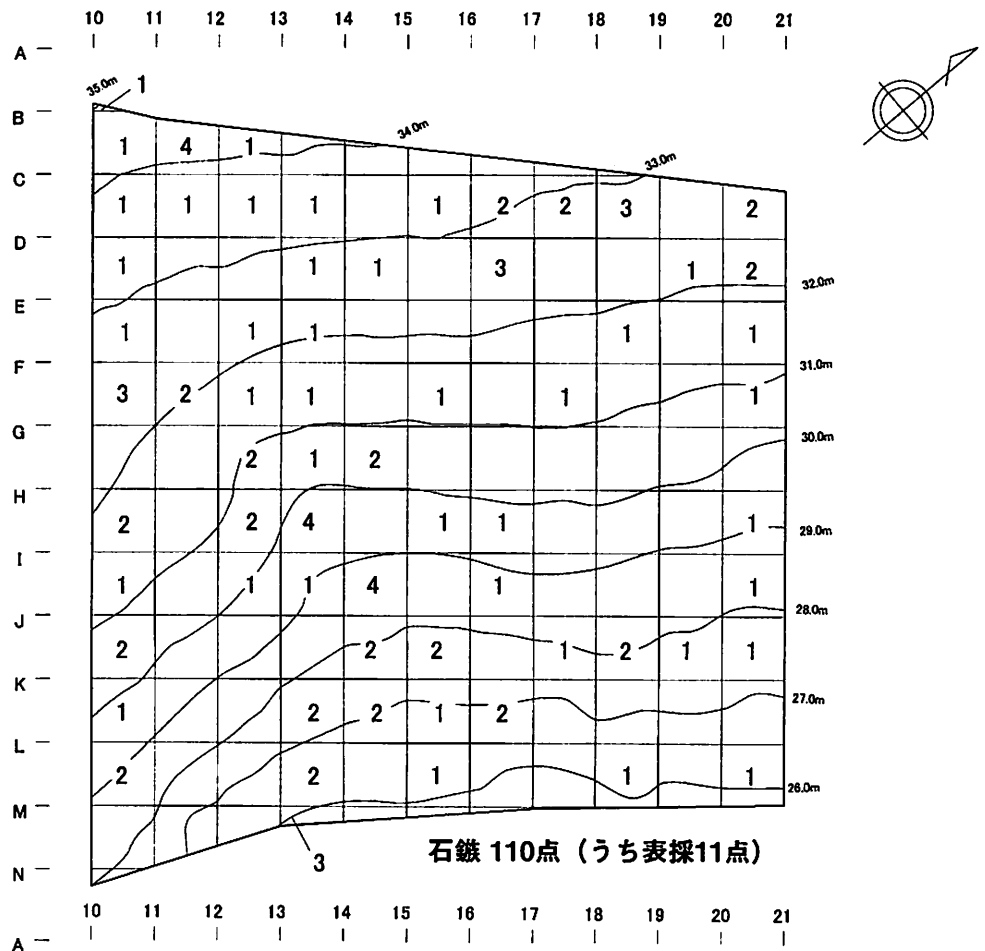
図版No.	出土地点	層位	遺物No.	分類	計測値				石質	備考
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
第26図-109	B12a	I	1	スクレイパー	4.4	3.6	1.0	13.2	頁岩	
第26図-110	J13a	II		スクレイパー	4.8	3.8	1.2	21.0	黒曜石	
第26図-111	E10a	II		Rフレイク	5.3	2.5	0.8	6.6	黒曜石	
第26図-112	B10c	II		Rフレイク	3.8	2.4	0.7	3.8	黒曜石	
第26図-113	E11c	II		Rフレイク	4.2	1.9	0.5	2.8	頁岩	
第26図-114	D17d	II		Rフレイク	4.9	4.6	1.4	23.2	珪化岩	
第27図-115	H12a	II		Rフレイク	3.6	4.7	1.0	9.5	黒曜石	
第27図-116	B11c	II	62	Rフレイク	4.2	2.6	0.5	5.0	黒曜石	
第27図-117	C10b	II		Rフレイク	4.2	2.9	0.5	4.9	黒曜石	
第27図-118	C14b	III		Rフレイク	3.2	1.4	0.5	0.8	黒曜石	
第27図-119	G13b	II		Uフレイク	6.1	5.5	1.5	39.6	頁岩	
第27図-120	C16b	II	5	Uフレイク	6.8	3.2	1.4	23.2	頁岩	
第27図-121	L11c	II		Uフレイク	5.2	3.0	0.8	7.2	黒曜石	
第27図-122	D10d	I		Uフレイク	4.5	2.6	0.9	10.4	頁岩	
第27図-123	C20d	II		石核	3.0	4.5	2.0	20.8	黒曜石	
第27図-124	G10c	II		石核	3.0	4.4	1.6	19.0	黒曜石	
第27図-125	D10c	I		石核	4.8	4.0	2.5	36.4	頁岩	
第27図-126	I13c	II		石核	3.4	4.0	1.9	18.0	黒曜石	
第27図-127	F11d	II		石核	3.7	4.1	2.0	20.4	黒曜石	
第28図-128	表採			異形石器	2.1	1.1	0.5	0.7	黒曜石	
第28図-129	J14b	II	6	異形石器	2.0	1.1	0.5	1.1	黒曜石	
第28図-130	H12c	II	17	異形石器	2.0	1.3	0.5	1.2	黒曜石	
第28図-131	C17d	I		石斧	(8.5)	(4.5)	(2.0)	(100.0)	玄武岩	
第28図-132	D19c	II	1	石斧	9.3	4.5	2.0	120.5	緑色泥岩	
第28図-133	H13d	II	339	石斧	10.7	(3.8)	2.3	(115.0)	緑色泥岩	F12bII層-H13dII層と接合
第28図-134	E10a	II	5	石斧	(6.9)	4.4	2.0	(100.0)	緑色泥岩	
第28図-135	D18c	II	8	石斧	(8.9)	(5.3)	2.5	(152.5)	緑色泥岩	D19bIII層と接合
第28図-136	表採			石斧	(5.5)	4.0	1.0	(35.0)	緑色泥岩	
第28図-137	G12c	II		石斧	(7.8)	(4.5)	2.2	(120.5)	緑色泥岩	
第28図-138	J19b	II	2	石斧	(10.8)	(4.4)	3.2	(250.0)	安山岩	
第28図-139	K16b	II	3	石のみ	(15.2)	(3.0)	1.8	(120.0)	片岩	H24年度 E8cII層と接合
第28図-140	B10b	I		たたき石	12.5	8.4	4.0	600.0	安山岩	
第28図-141	I19b	II		たたき石	11.2	6.6	4.6	451.5	チャート	
第28図-142	F10a	I		たたき石	11.3	6.6	3.0	252.5	安山岩	
第28図-143	I13c	II		たたき石	11.9	8.2	4.6	55.1	安山岩	
第28図-144	D12a	II		たたき石	11.6	7.3	2.9	345.0	安山岩	
第28図-145	C19b	II		たたき石	8.6	6.5	4.2	259.0	安山岩	
第28図-146	B10c	II		たたき石	9.8	5.4	4.4	(250.0)	安山岩	
第28図-147	B10d	I		たたき石	11.7	5.6	2.6	249.0	安山岩	
第29図-148	G12d	II		たたき石	8.5	6.5	5.9	420.0	安山岩	
第29図-149	表採			たたき石	10.6	8.0	6.5	710.0	チャート	
第29図-150	表採			たたき石	12.4	8.4	2.8	350.0	安山岩	
第29図-151	C10b	II		たたき石	15.7	8.1	3.6	365.0	デイサイト	
第29図-152	I12d	III		たたき石	14.0	5.7	3.1	252.0	安山岩	
第29図-153	I18d	II		すり石	9.3	6.0	5.6	458.0	安山岩	
第29図-154	E10c	II		すり石	10.7	5.9	4.5	351.0	チャート	
第29図-155	D12c	II		すり石	8.6	4.3	1.9	80.0	安山岩	
第29図-156	D10d	II	9	石錘	6.7	6.6	1.7	(52.0)	泥岩	
第29図-157	B10c	I		台石	10.3	8.2	2.0	256.0	安山岩	
第29図-158	K12c	II		台石	10.8	8.5	2.5	230.0	デイサイト	
第29図-159	H13	II		石皿	12.6	9.0	4.3	649.5	安山岩	
第29図-160	J11a	II		石製品	(4.8)	(3.0)	(2.9)	(15.2)	軽石	



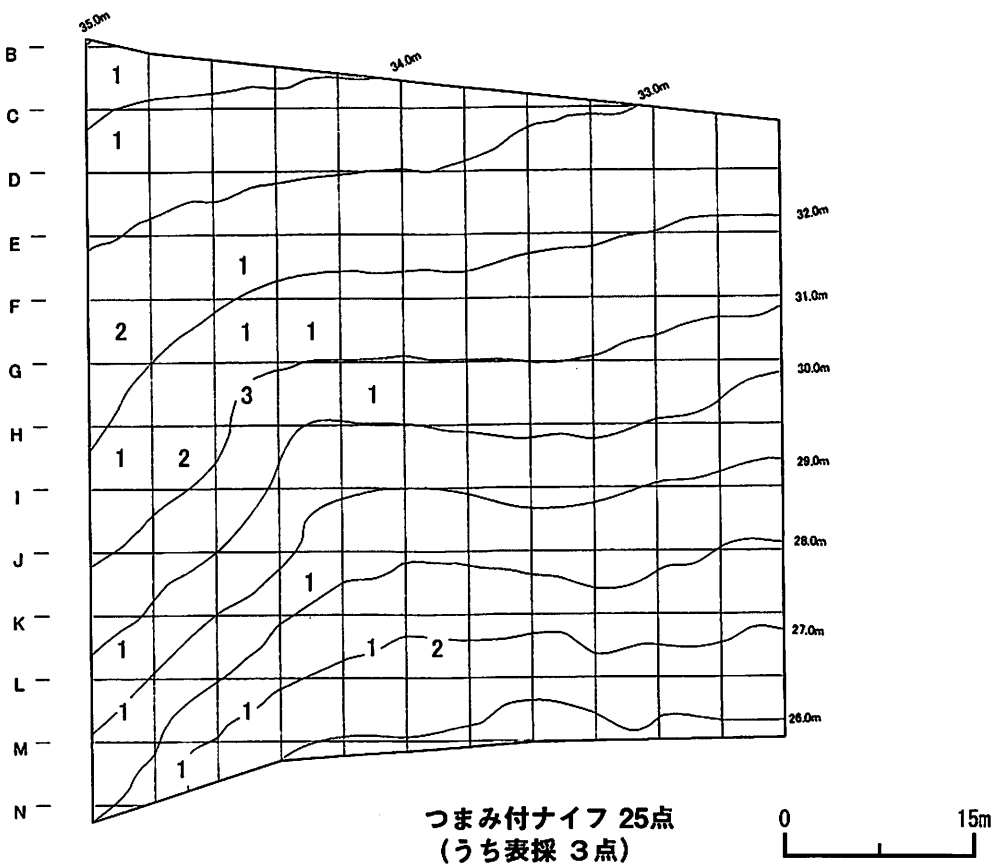
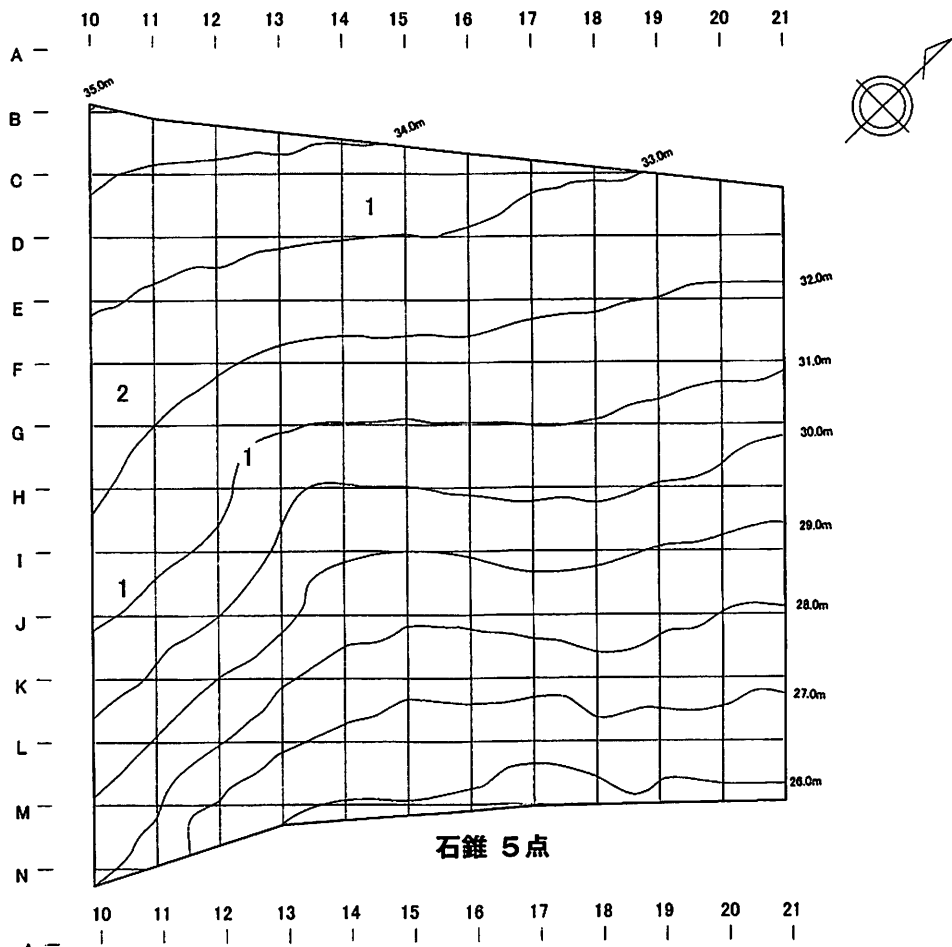
第30図 剥片石器・剥片分布図 (1)



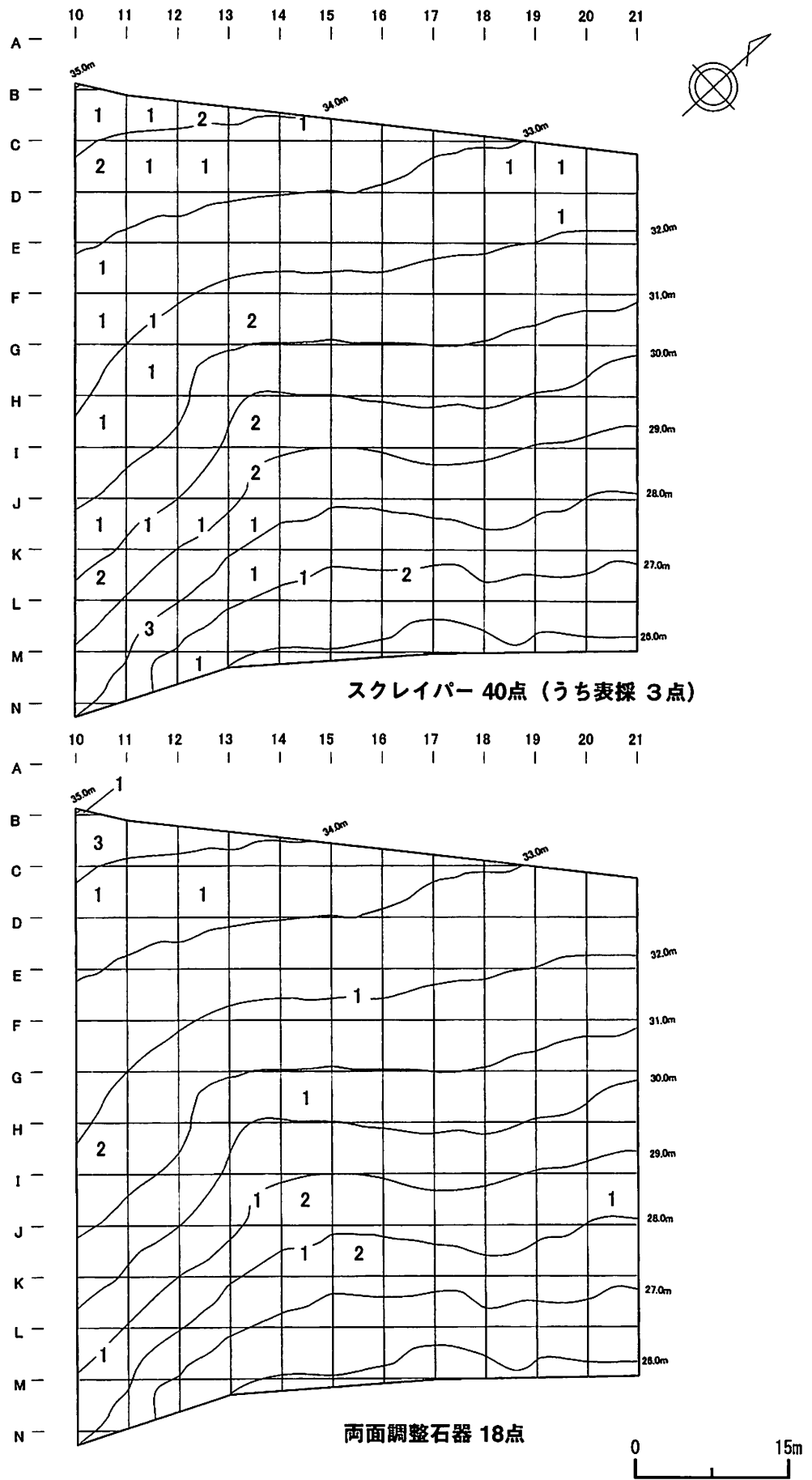
第31图 剥片石器·剥片分布图(2)



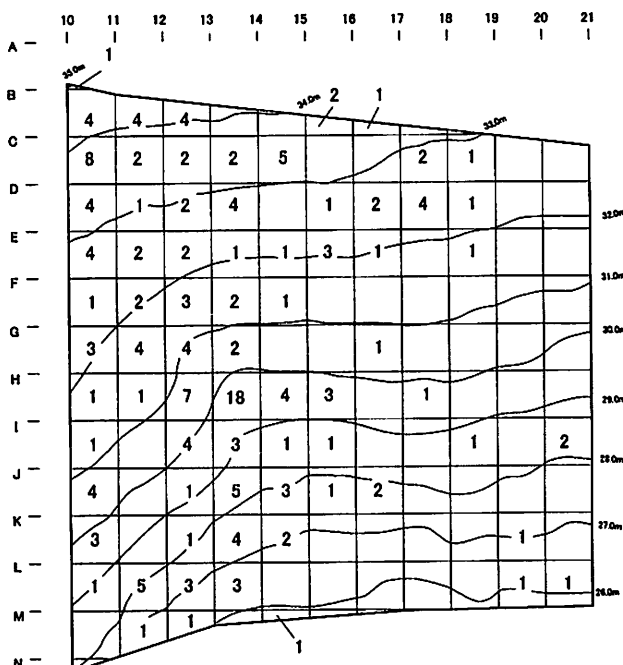
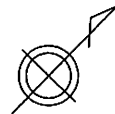
第32図 剥片石器・剥片分布図 (3)



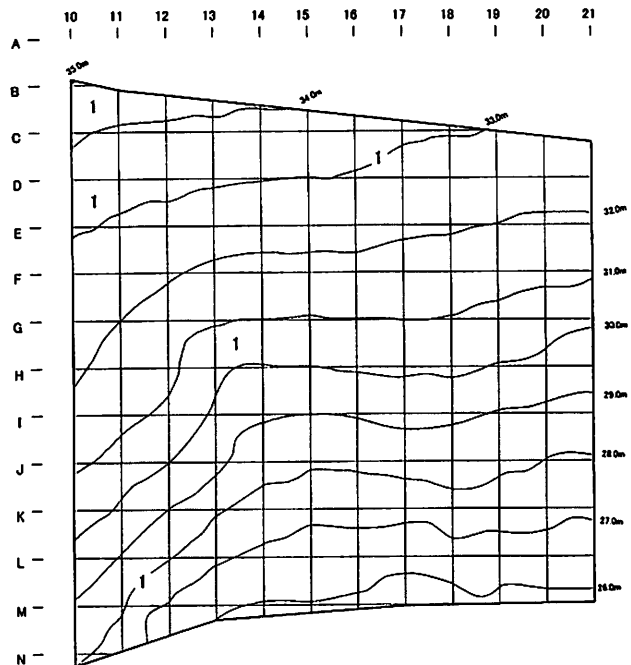
第33図 剥片石器・剥片分布図(4)



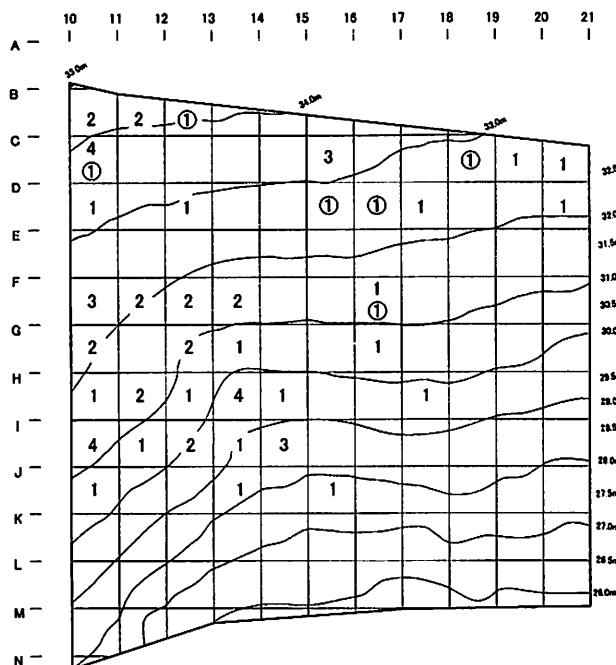
第34図 剥片石器・剥片分布図 (5)



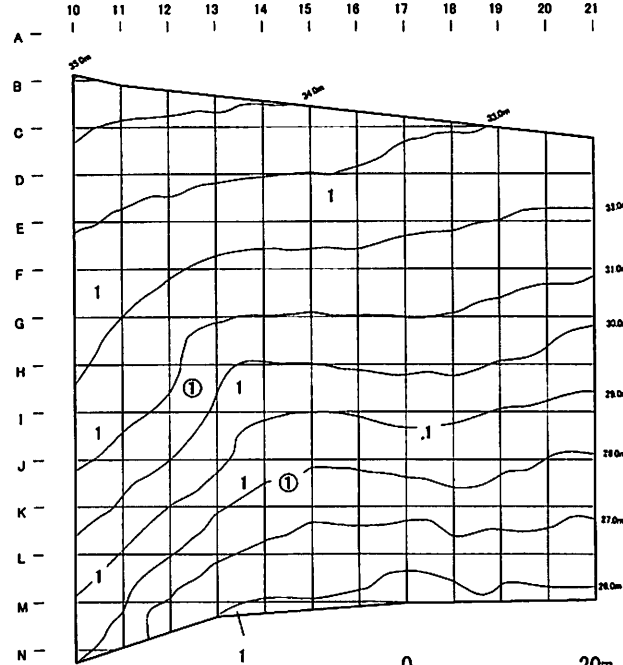
Rフレイク 211点 (うち表採 24点)



Uフレイク 5点

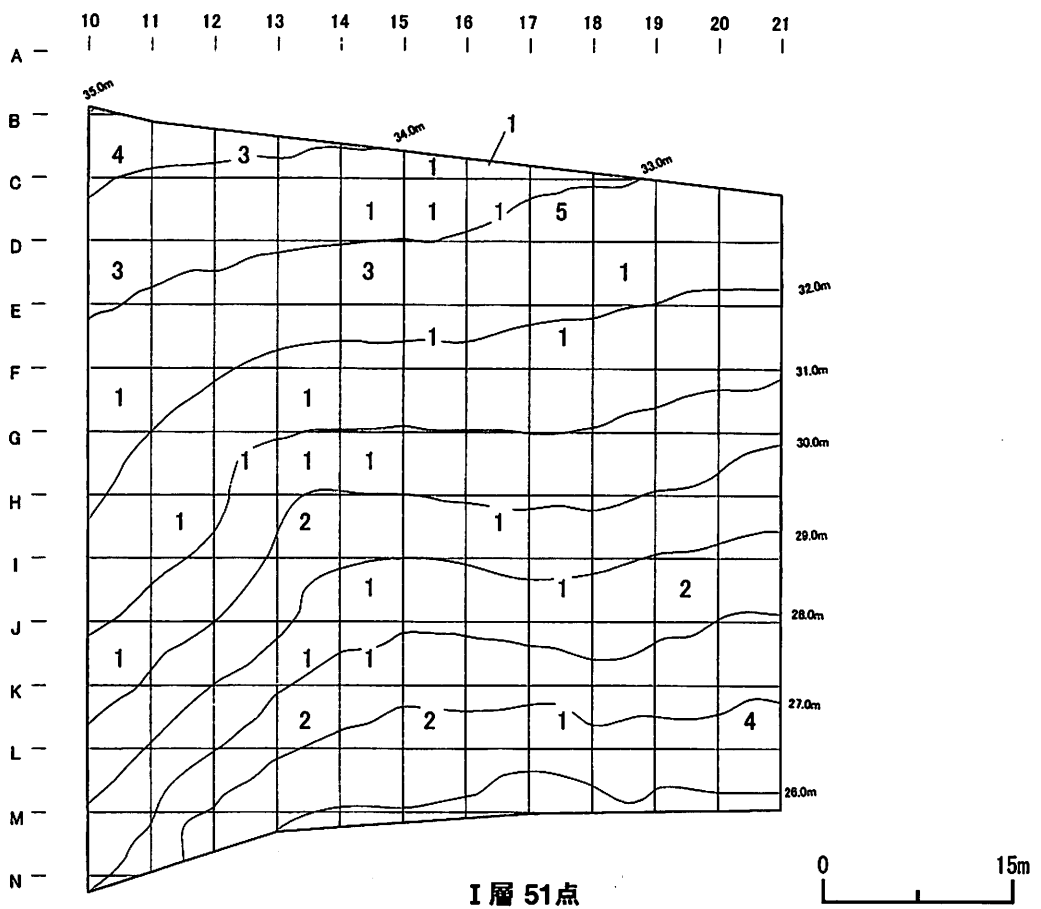
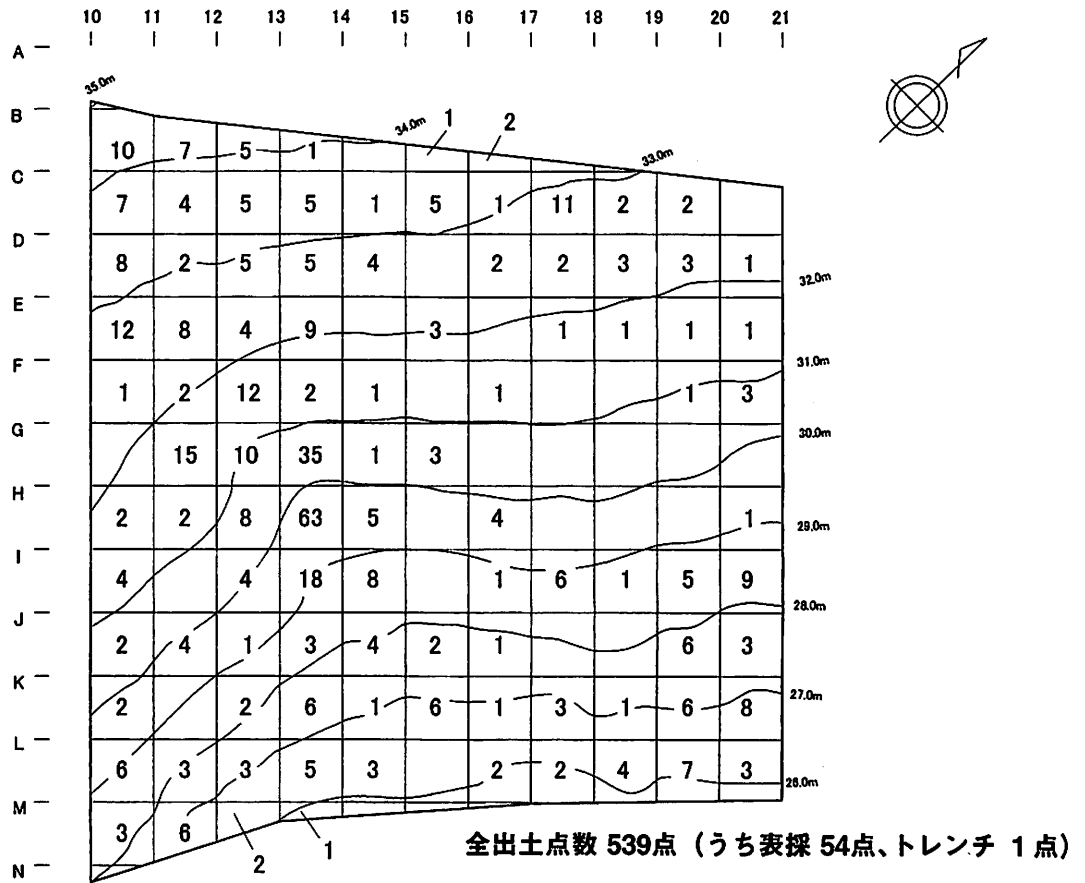


石核 57点
ピース・エスキーユ 6点 ○印

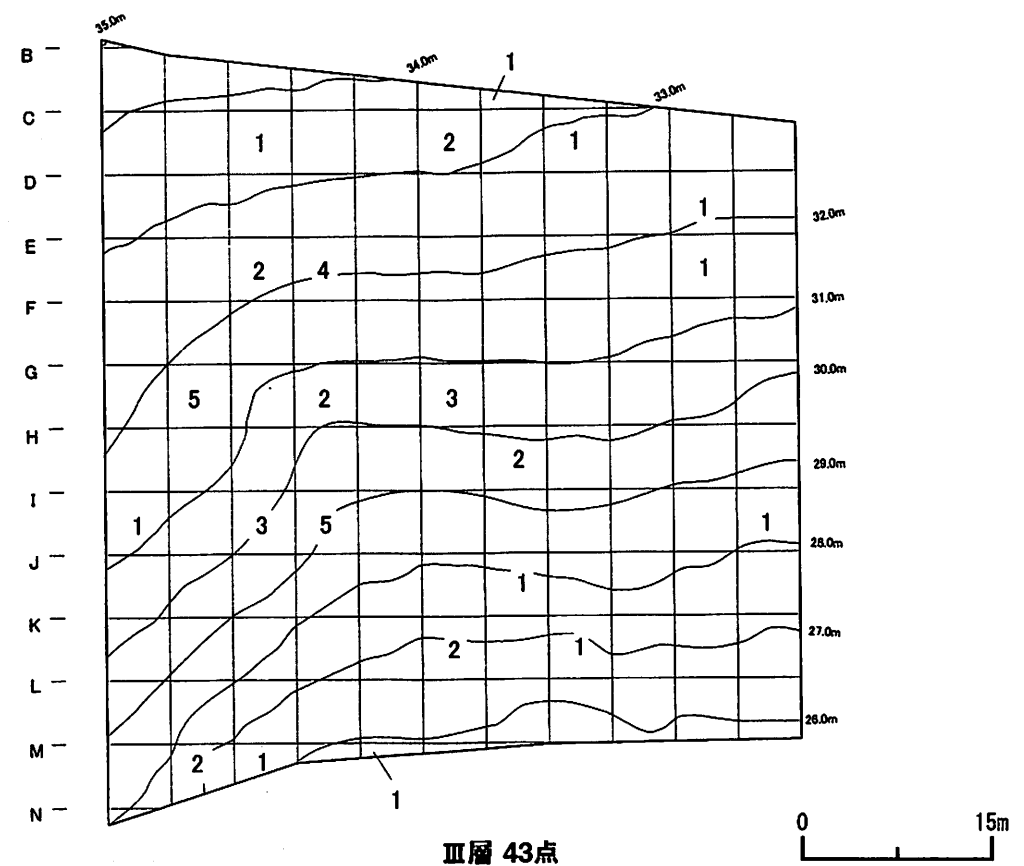
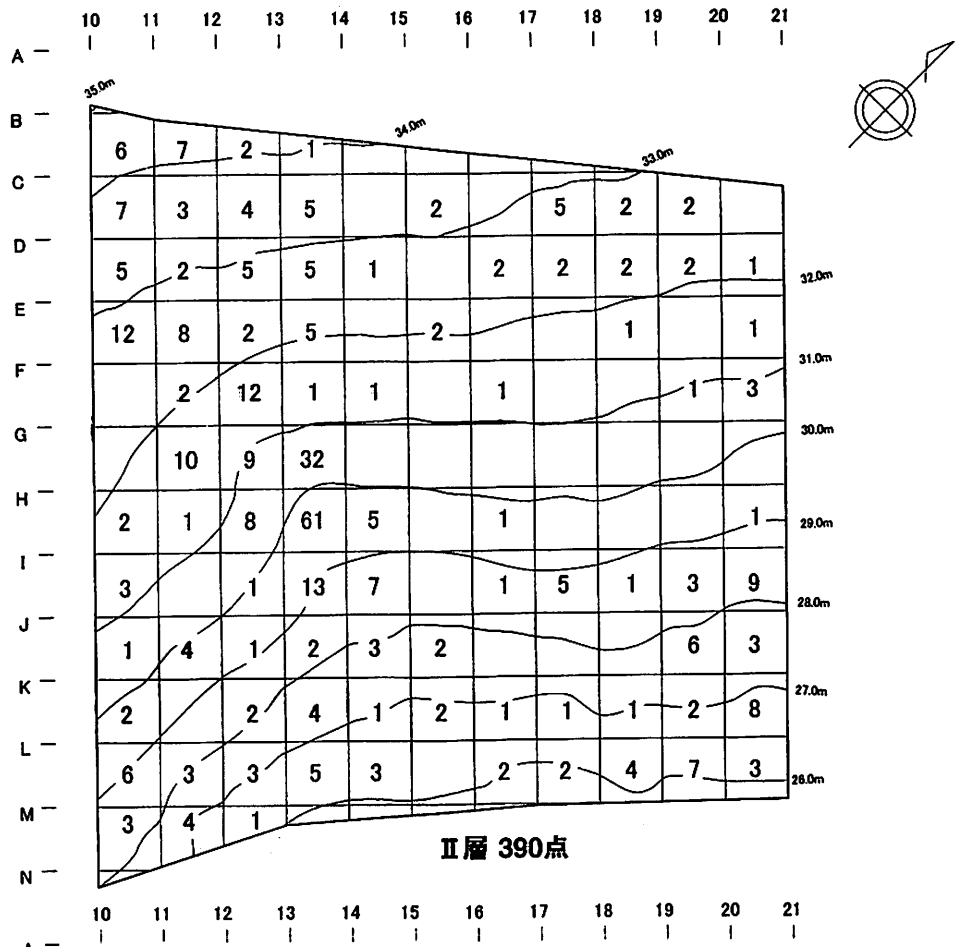


原石 8点
異形石器 3点 (うち表採 1点) ○印

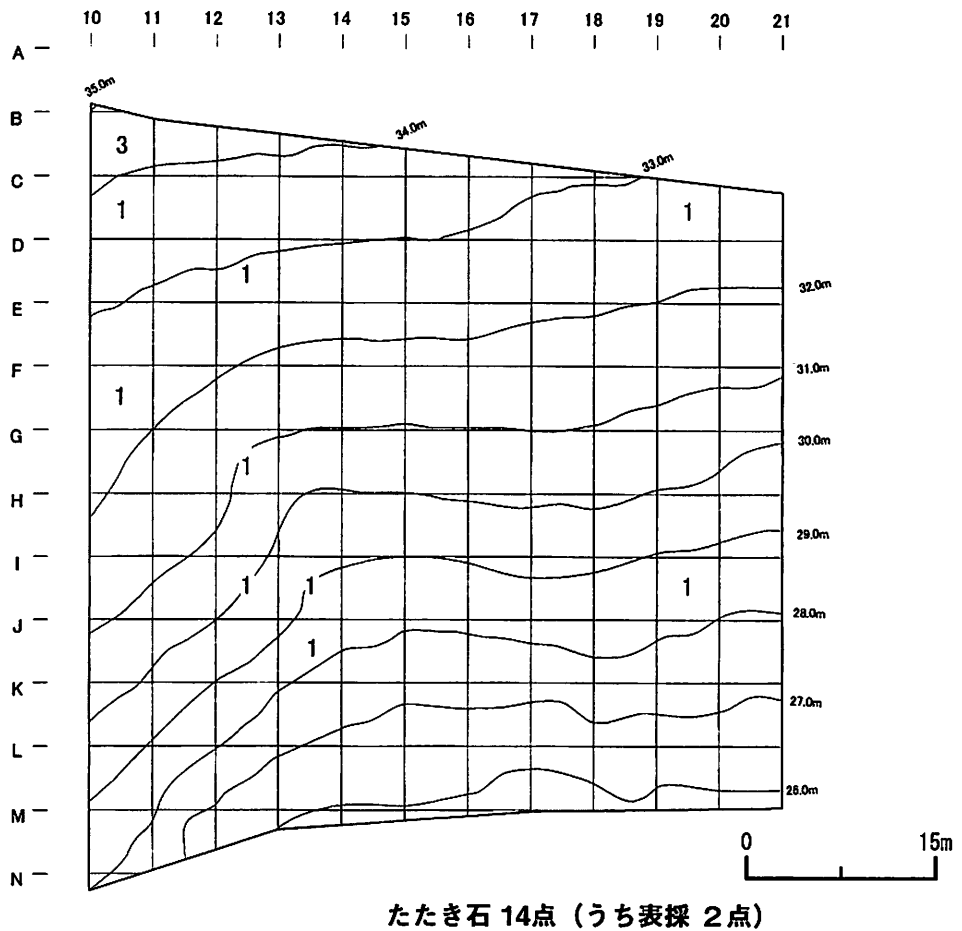
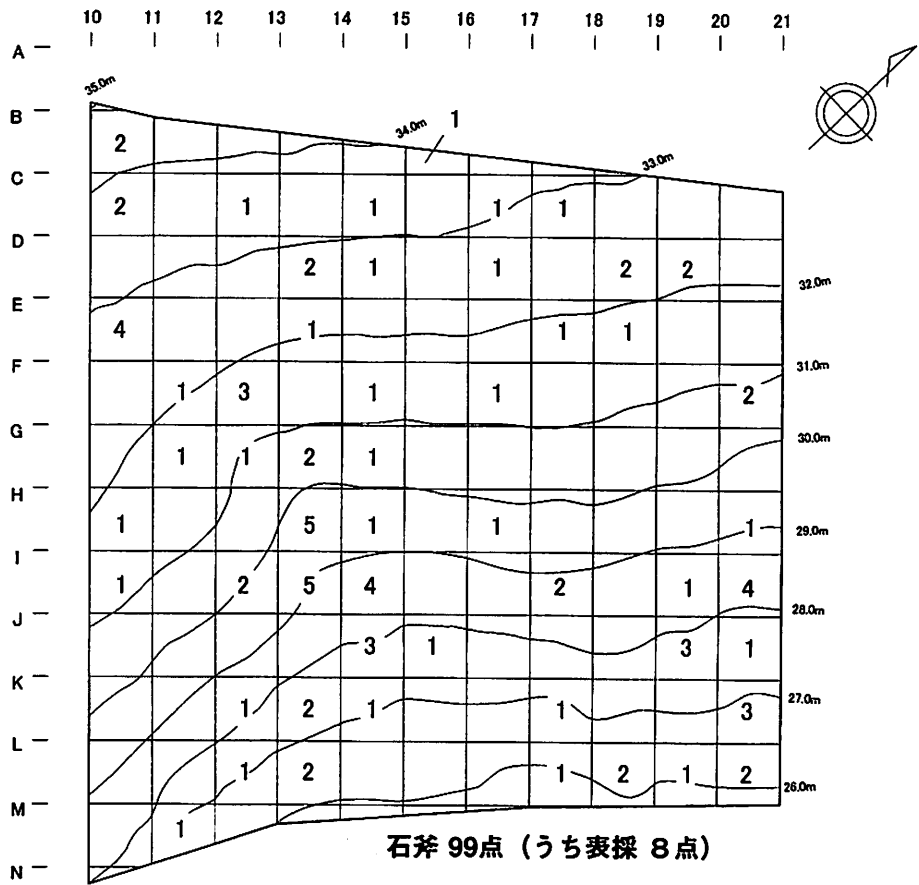
第35図 剥片石器・剥片分布図 (6)



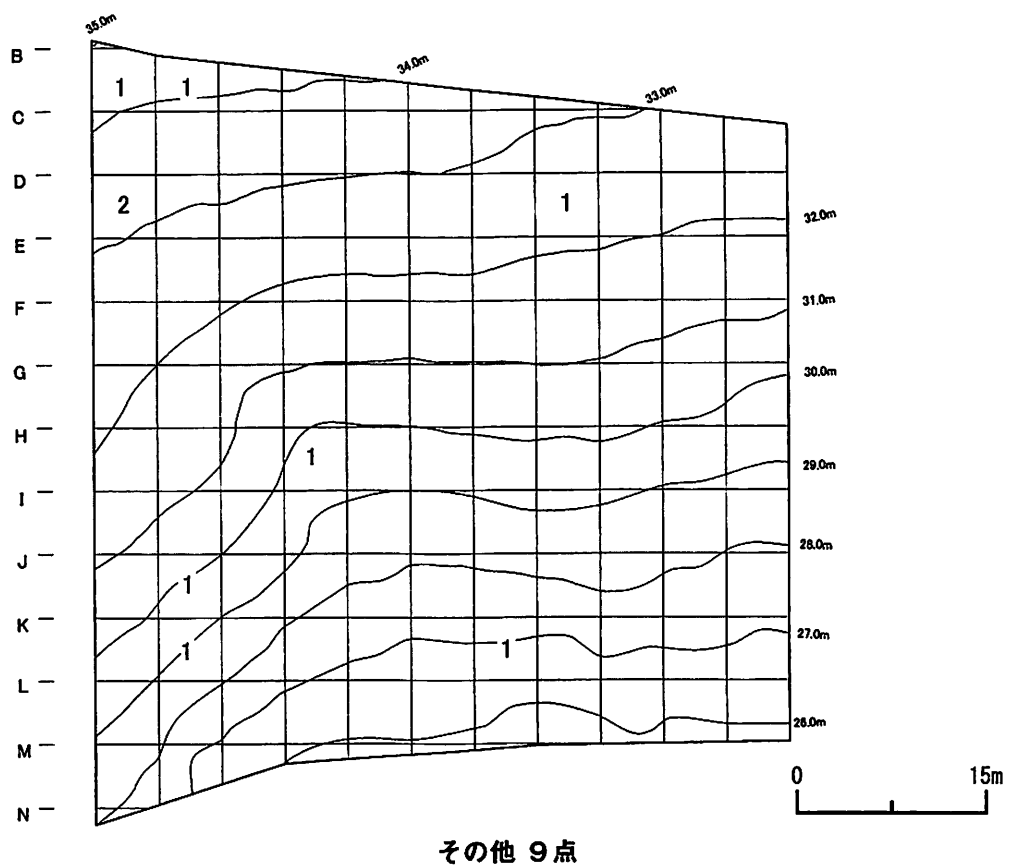
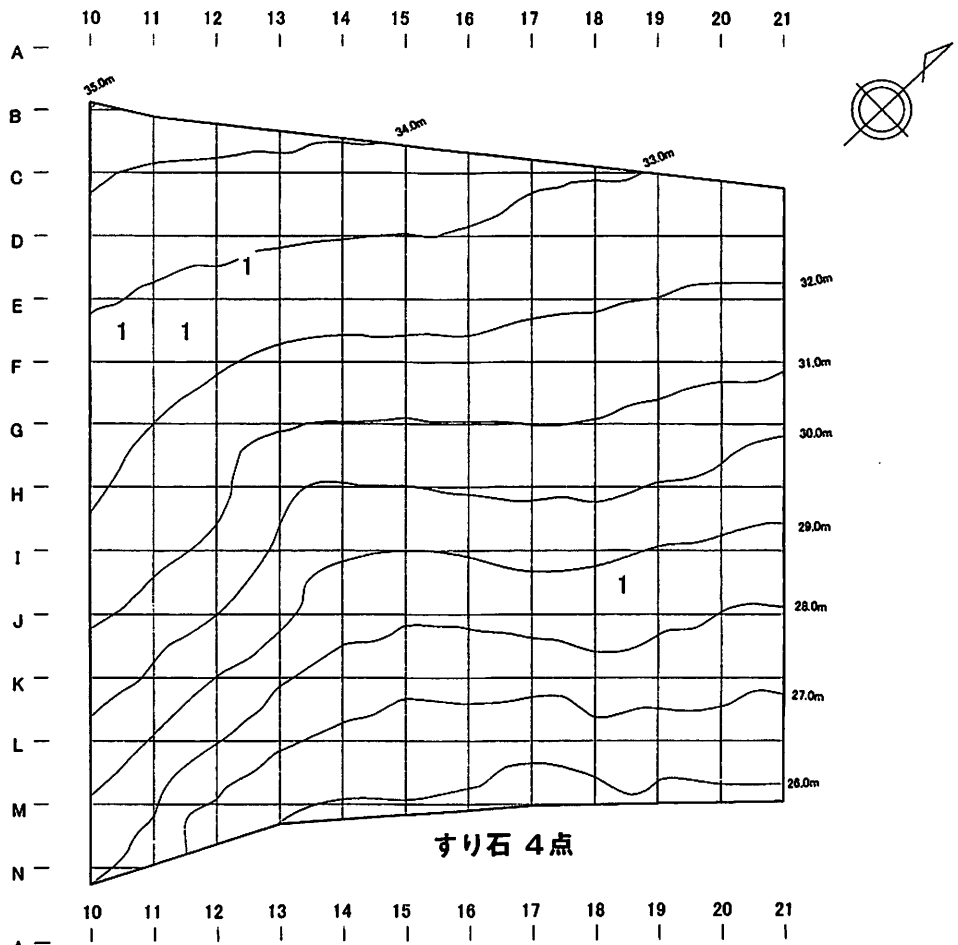
第36図 礫石器・礫分布図 (1)



第37図 礫石器・礫分布図 (2)



第38図 礫石器・礫分布図 (3)



第39図 礫石器・礫分布図 (4)

3. 剥片集中範囲 (第40~41図)

調査区のⅡ層～Ⅲ層包含層調査において、剥片集中が2ヶ所検出されている。いずれも黒曜石を主体とした剥片のみで、土器やその他の遺物は同時に出土していない。これらの剥片集中をFC-1・FC-2とし、接合資料の掲載と共に以下に報告する。

FC-1

調査区C10グリッドのⅡ層調査中に剥片がややまとまって出土した。Ⅱ層上位では直径40~50cm程の範囲に点在していたが、1回目の取り上げ後再度掘り下げたところ、直径25cm程の範囲に剥片の集中が見られた。2回目の取り上げ後さらにⅡ層下部を掘り下げたところ、直径20cm程の集中が見られ3回目の取り上げをした。その後取り上げが困難な小剥片となったため、Ⅲ層まで土壤ごと採取し、その後2mmメッシュの篩にかけ選別を行ったが、剥片以外の微細な遺物は検出されなかった。

取り上げをした剥片は1,160点であり、その中で接合したものは図に示した9例であった。なお篩にかけ採取できた小剥片は28.8gで、取り上げたものと合計で182.4gあった。

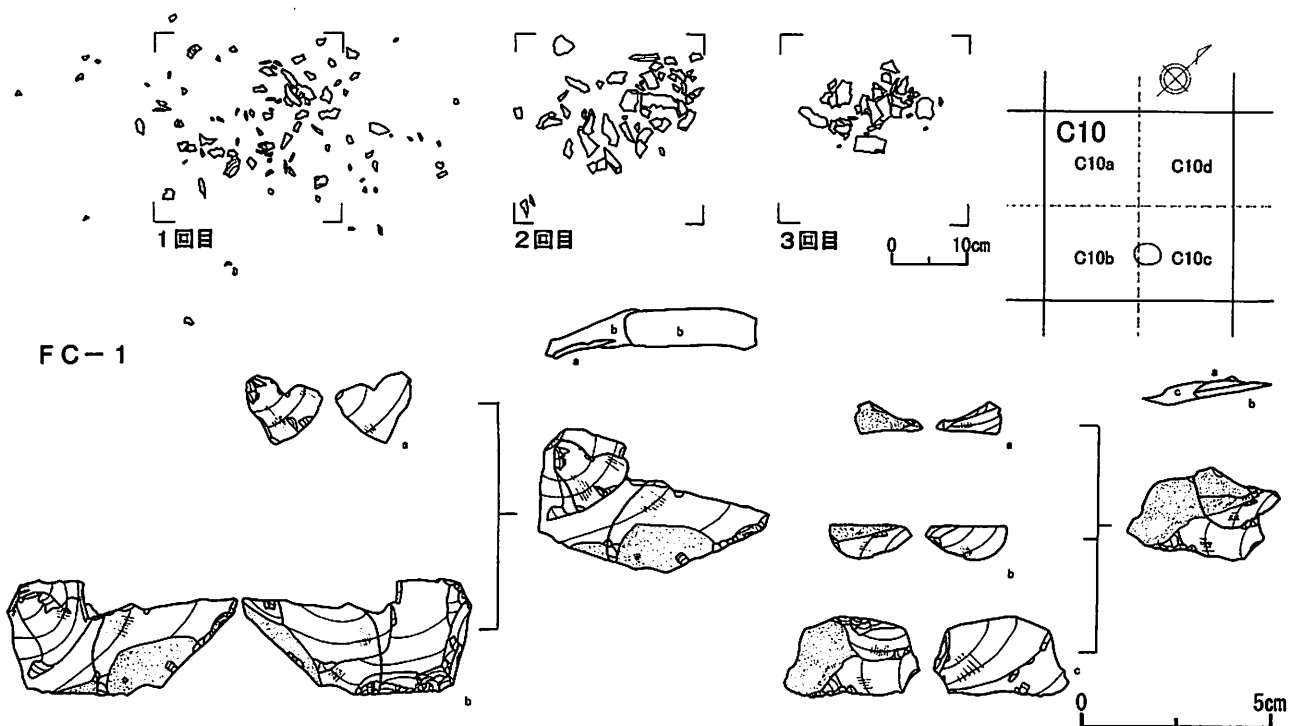
掘り下げ時に人工的な掘り込みは見られず、やや窪んだ自然地形として完掘したため、石器製作時に出た残滓をまとめて窪みに廃棄したものと考えている。

FC-2

調査区D19グリッドのⅡ層調査中に剥片がややまとまって出土した。Ⅱ層上位では直径1.5m程の範囲に点在していたが、掘り下げを続けてもさほど濃密な集中が見られず、取り上げを続けた結果、剥片の出土範囲はどんどん狭くなり、Ⅲ層では直径20cm程となり完掘してしまった。

取り上げをした剥片は231点であり、合計で208.7gあった。その中で接合したものは図に示した2例のみであった。出土の状況が終始散在的であったため、検出状況等の記録もなく、どのような性格のものであるかは不明である。

FC-1 検出状況

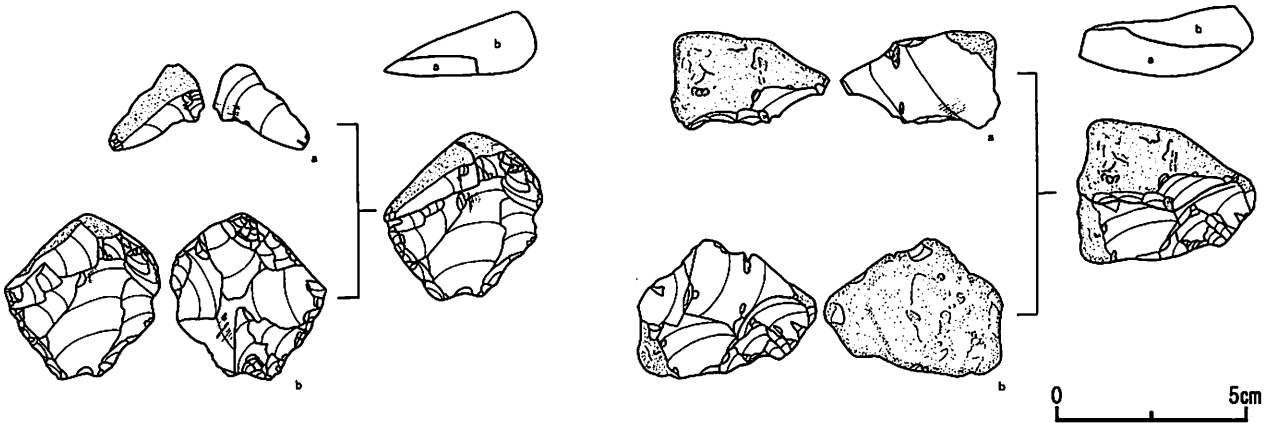


第40図 FC-1 検出状況・接合資料

FC-1



FC-2



第41图 FC-1 · FC-2 接合資料

4. 石鏃の形態及び分類別出土傾向

登町4遺跡における、平成24・25年度の2年間に亘る調査で出土した石鏃を、形態ごとにいくつかのサイズパターン（長さ×最大幅）を設定し、そのいずれに該当するものか分類を行った。対象としたものは完形品でなくても形態が想定できる石鏃160点とした。形態では三角形、柳葉形、菱形、五角形、木葉形、有茎凸基、有茎平基に分け、さらにそれぞれサイズごとの集計を行い、表採以外については、調査区のグリッド配置図上に分布を示した（第42～44図、表Ⅲ-8参照）。なお、下記一覧表に示した掲載No.は、前年度に刊行した『登町4遺跡（2012年度）』と本報告書に掲載した際に付したNo.で、A1～N9グリッドまでは前年度出土のものである。

本遺跡で出土している形態が想定できる石鏃の中では、三角形が最も多く全体の約45%、次いで柳葉形が約20%で、合わせて約65%を占める。サイズで見ると、三角形の中では表中の分類17が最も多く、分類16、11が次いで多い。これらはいずれも長さ2.0～2.5cm、最大幅1.5～2.0cmであり、本遺跡で出土する標準的なサイズであると言える。

柳葉形では長さとの最大幅の比率が約4：1の分類1、2、4の合計と、2.0～2.5：1の分類3、5、9の合計が同数でほとんどを占め、極細タイプは少ない。本遺跡における標準的な分類は2パターンに分かれると言える。菱形及び五角形のもの出土数も少なく分類に偏りがなく、多く見られるパターンものはない。木葉形は全体の約8%を占め、分類1、4、5が多いが、1は大形で幅広、長さも4.5cm程と石槍に近いものである。4、5は中形でサイズも近く、これらが本遺跡における標準的なものと言える。有茎凸基は全体の約16%を占め、分類7が最も多いが、全体的に分類に偏りがなく多く見られるパターンものはない。有茎平基はわずかに1点のみの出土である。

次に分布についてであるが、全体的に集中箇所は見られず散在的である。平成24年度調査では有茎石鏃が調査区内に広く分布し出土数も多いが、25年度調査では出土数が非常に少ない。また両年度とも三角形及び柳葉形石鏃が極端に多く出土することから、いずれも縄文時代早期から中期の遺跡でありながら、25年度は早期が主体であり、24年度は中期が主体であったという土器の出土状況とも合致するものと考えている。

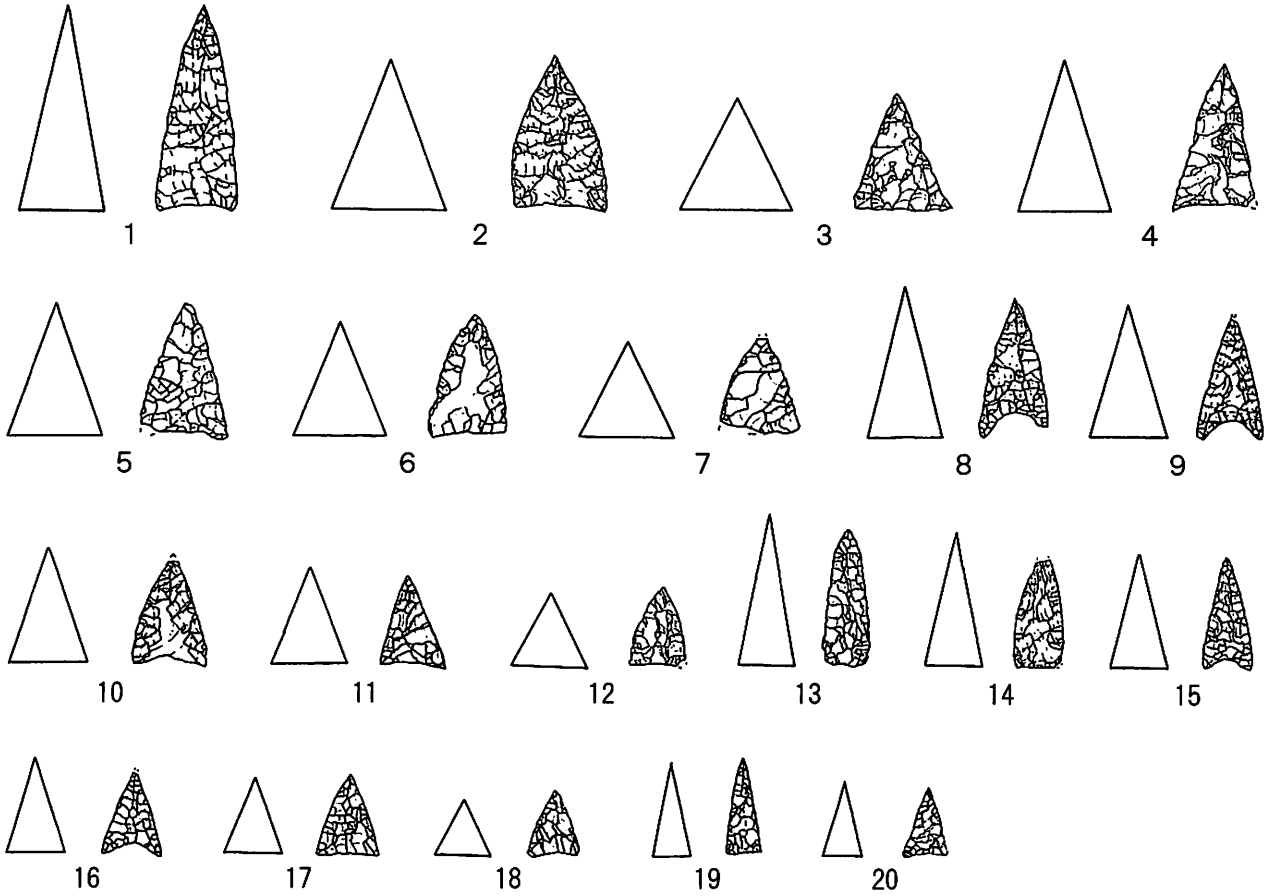
表Ⅲ-8 石鏃の形態及び分類一覧表

形態	分類	サイズパターン(cm)	点数	グリッド・層位・遺物No. 又は掲載No. (掲載No. は○)
三角形	1	5.0×4.0	2	F7b II ⑫、E9a I ⑬
	2	4.0×3.0	2	E13a III ⑯、F10a I ⑳
	3	3.0×3.0	1	F4c I
	4	4.0×2.5	3	C20b II ⑮、H13b II 25、F15a II ㉓
	5	3.5×2.5	1	I9d II ⑩
	6	3.0×2.5	1	H8a I 7
	7	2.5×2.5	1	C5b II
	8	4.0×2.0	2	D13a II ㉑、C6c I
	9	3.5×2.0	1	H13c II ⑰
	10	3.0×2.0	5	B2b II ⑪、C10c II ⑪、G5a II ⑥、H7c II 41、J17d II ㉒
	11	2.5×2.0	9	表採㉒、表採、B3b III、C6c I ②、C15b II ㉒、E7a I 10、E8b I 5、F7d II、F12b I ㉔
	12	2.0×2.0	2	B8c II、D19d II ⑧
	13	4.0×1.5	2	I14a I ⑭、J14b I ㉓
	14	3.5×1.5	3	D9a I ⑨、D10a II ⑬、D20d II 2
	15	3.0×1.5	3	C16b II ㉓、E20d III ⑱、I16a II ⑬

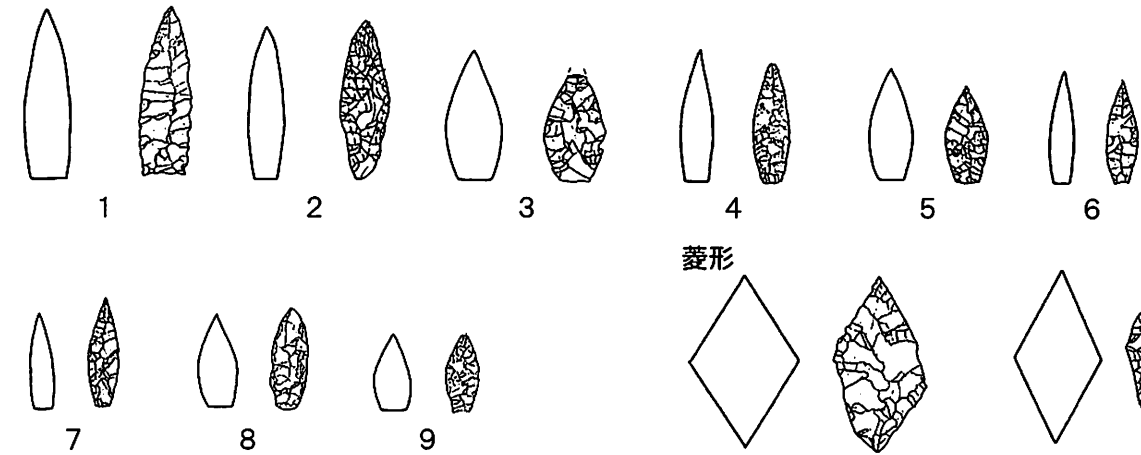
表Ⅲ-8 石鏃の形態及び分類一覧表

形態	分類	サイズパターン(cm)	点数	グリッド・層位・遺物No. 又は掲載No. (掲載No. は○)
三角形	16	2.5×1.5	12	B1dⅡ、B11bⅡ59、E5dⅡ③、E8aⅡ、E9bⅡ16 F17dⅡ⑤、H10bⅡ⑰、H20bⅡ②、J19cⅡ⑩ J20aⅡ⑥、K16aⅡ⑳、L18bⅡ㉔
	17	2.0×1.5	16	表採④、表採㉔、D16dⅡ②、E4aⅡ⑥、E6dⅠ E7dⅡ⑤、E7dⅡ⑤、E10cⅡ⑨、F9aⅢ④、H5dⅡ⑦ H10bⅡ①、 I9dⅡ⑭、I14bⅠ⑦、J14bⅡ26、J15aⅠ61 M13aⅡ③
	18	1.5×1.5	5	B4cⅢ、D6cⅡ①、F9aⅢ、H5bⅡ11、I4cⅠ
	19	2.5×1.0	1	L10bⅡ⑳
	20	2.0×1.0	1	I8bⅡ8
柳葉形	1	4.5×1.2	5	C17aⅠ、E4bⅡ、F10dⅡ47、I7dⅡ、I14cⅡ④
	2	4.0×1.0	4	B2aⅡ6、D8cⅡ8、D9bⅡ㉓、E6dⅡ
	3	3.5×1.5	5	C18bⅡ8、D6dⅠ、E5aⅡ103、E7bⅢ、H16bⅢ
	4	3.5×0.8	4	E5bⅠ12、F13bⅡ④⑨、G14aⅡ⑬、L15dⅡ1
	5	3.0×1.2	3	G5dⅠ26、I12cⅡ⑳、J15aⅠ2
	6	3.0×0.7	1	I13cⅡ㉑
	7	2.5×1.0	4	D4bⅡ、H7bⅡ、I5cⅠ2、I14aⅡ④
	8	2.5×0.6	1	J9dⅠ3
	9	2.0×1.0	5	表採④、B11bⅡ⑳、H13dⅡ⑰、L10aⅡ、L13bⅡ⑳
菱形	1	4.0×2.5	1	H6bⅡ
	2	4.0×2.0	1	G6bⅡ54
	3	4.0×2.0	2	表採、D4cⅡ㉕
	4	3.0×2.0	1	F4aⅡ
	5	3.0×1.5	2	C6cⅡ28、L20bⅡ④⑤
	6	3.0×1.0	1	C3dⅠ㉔
	7	2.5×1.5	1	F10cⅡ④⑥
五角形	1	4.5×1.5	2	E4aⅠ㉗、J5dⅡ
	2	3.5×2.0	1	D6dⅡ
	3	3.0×2.0	1	C18dⅡ④⑨
	4	3.0×1.3	1	H15bⅡ④⑩
	5	2.0×1.0	1	F9dⅢ
	6	2.5×1.0	1	D8dⅢ㉖
木葉形	1	4.5×2.5	3	C20bⅡ1、I4cⅡ27、I4cⅡ
	2	4.5×2.0	1	C5aⅠ
	3	4.0×2.0	1	B10dⅡ④④
	4	3.5×2.0	4	E4bⅡ、F6aⅠ33、H5aⅢ21、I6bⅡ28
	5	3.0×1.5	3	C7bⅡ、C9cⅠ、H6bⅢ
	6	2.5×1.5	1	F7aⅡ
有茎凸基	1	6.0×2.5	3	表採、B5aⅡ⑳、C7aⅡ
	2	5.5×2.5	2	B2aⅡ51、B5aⅡ
	3	5.5×1.3	1	D9aⅡ
	4	4.0×1.3	2	I7aⅡ25、K13cⅡ④④
	5	3.5×1.5	2	B2cⅡ、B11dⅡ④⑤
	6	3.5×1.3	3	C3aⅡ②、E5aⅡ、F5aⅡ
	7	3.0×1.3	5	B11bⅡ④③、C18cⅡ④⑤、D7cⅢ、I6dⅢ、J6cⅠ
	8	2.5×1.5	3	C5bⅠ④⑨、D5aⅢ、G7bⅢ④⑦
	9	2.5×1.0	2	B2aⅡ④⑩、B9cⅡ④①
	10	1.5×1.2	2	C13dⅡ④①、D9Ⅰ
有茎平基	1	2.5×1.3	1	A10bⅡ④⑥

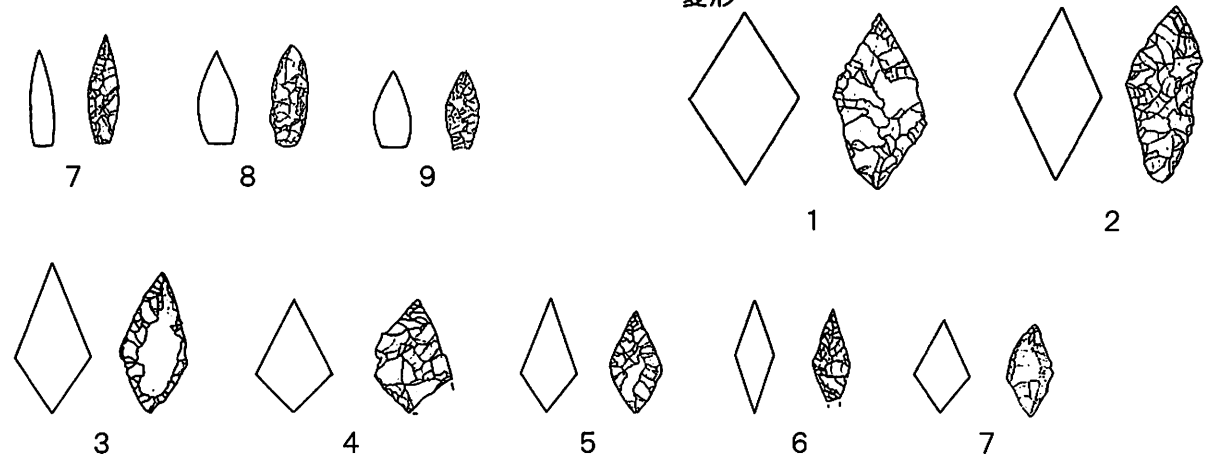
三角形



柳葉形

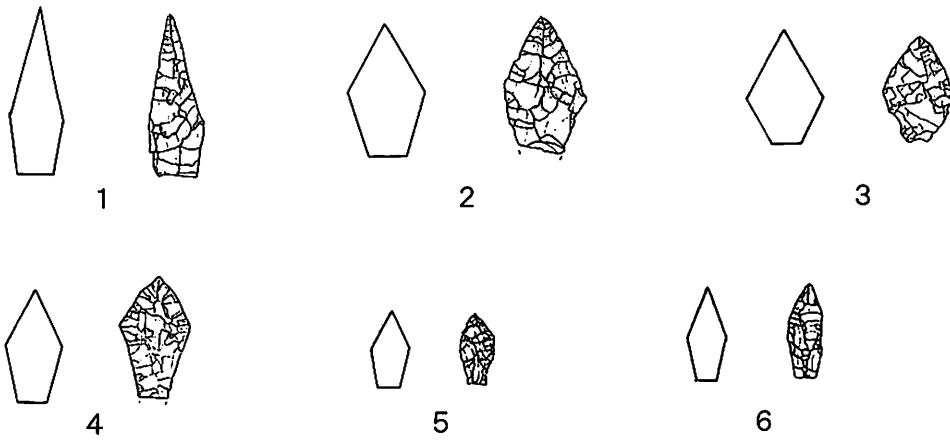


菱形

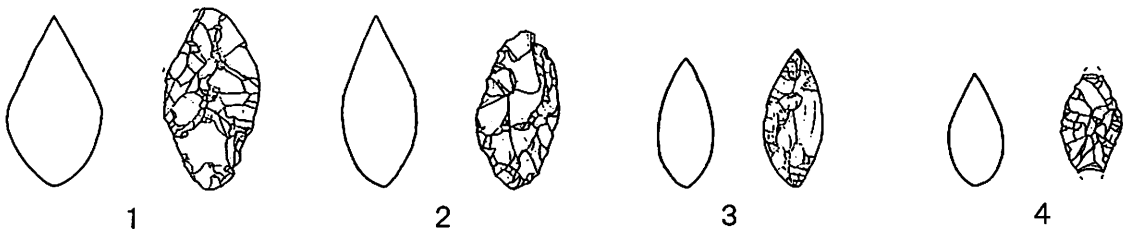


第42図 石鏃の形態及び分類 (1)

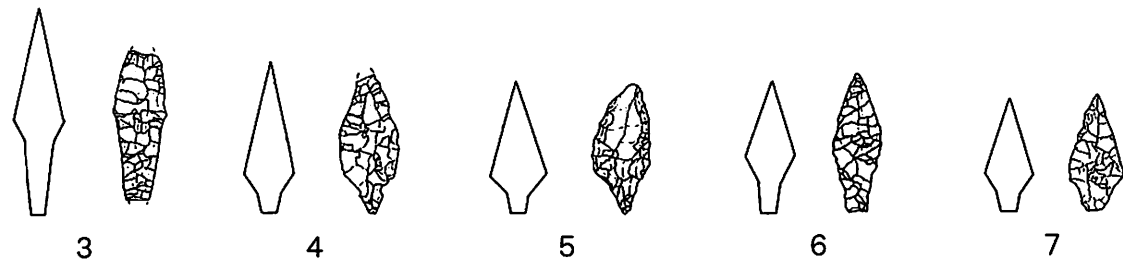
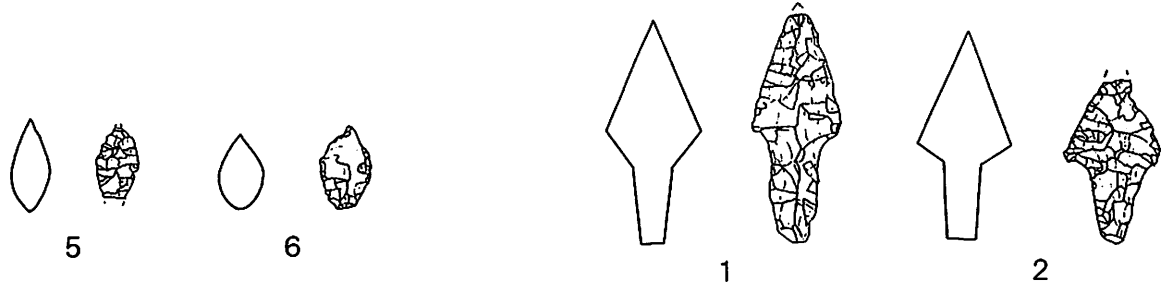
五角形



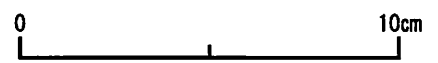
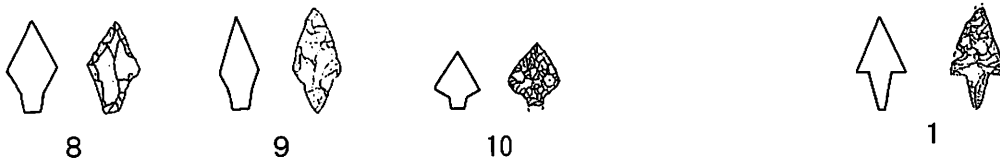
木葉形



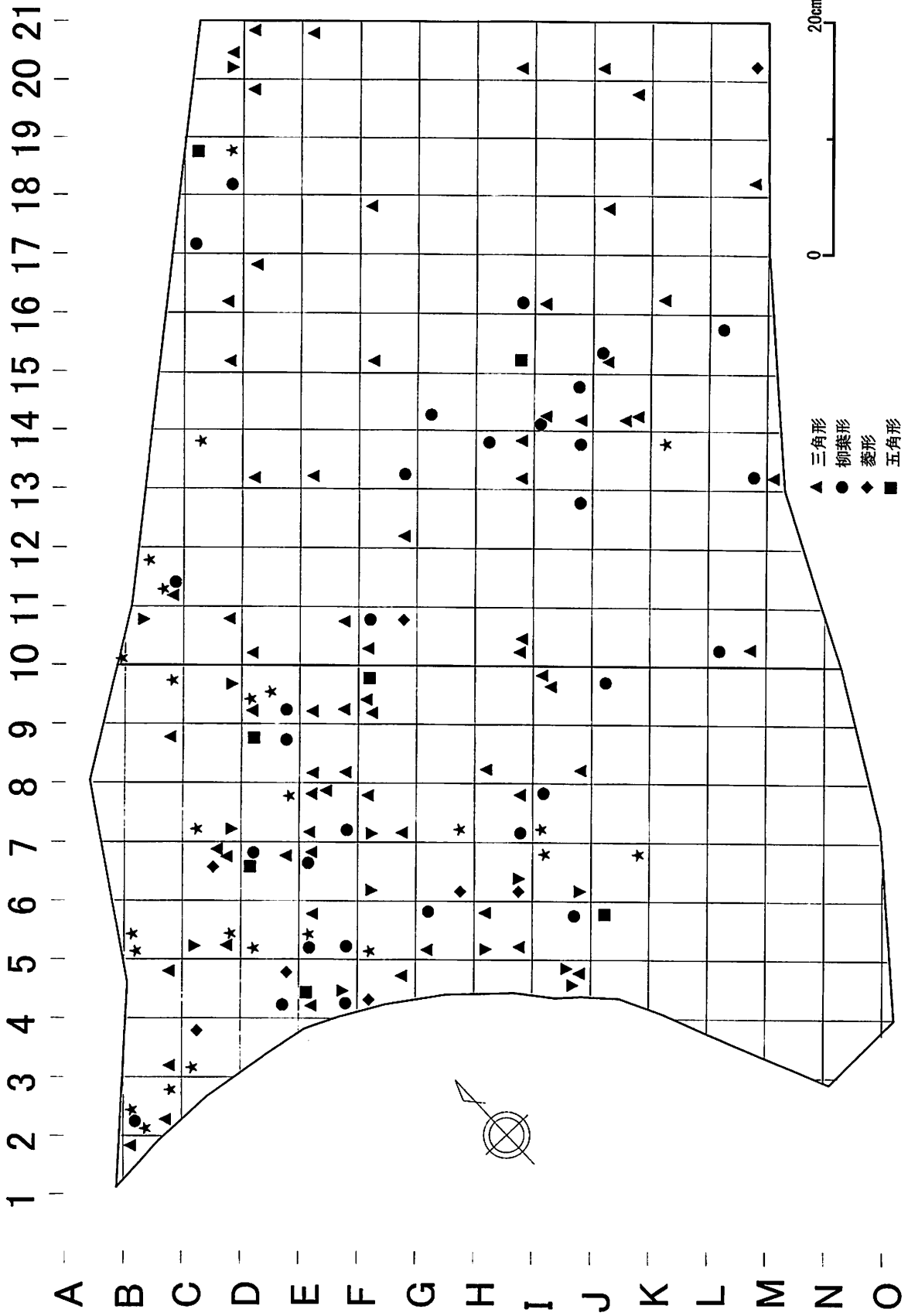
有茎凸基



有茎平基



第43図 石鏃の形態及び分類 (2)



第44図 石鏃の形態別分布図

表Ⅲ－9 出土遺物一覧表

	土 器					石 器																	合 計							
	I 群	II 群	III 群	その他	不明	石 鏃	石 槍	石 錐	つまみ付ナイフ	スクレイパー	両面調整石器	Rフレイク	Uフレイク	ピエス・エスキュー核	石 核	異 形 石 器	原 石	剥 片	石 斧	石 槌	た た き 石	す り 石		砥 石	台 石	石 皿	石 製 品	礫 片		
I 層	14	34				15	1	5	2	4	34	1	2	12				1,198	11	3				1			24	12	1,373	
II 層	1,367	27	255	8	10	78	8	2	15	34	14	143	4	4	42	2	6	4,812	73	1	8	4	1	1	1	1	3	240	57	7,221
III 層	98	2	50			6		2	2	1		10			3		2	631	7	1							32	3	850	
表採	7	2	66	1		11	2		3	3		24				1		1,999	8	2							28	16	2,173	
トレンチ	18		3															22									1		44	
FC																		1,391											1,391	
合計	1,504	31	408	9	10	110	10	5	25	40	18	211	5	6	57	3	8	10,053	99	1	14	4	1	1	2	1	3	325	88	13,052

表Ⅲ－10 出土土器比率

I 群	II 群	III 群	IV 群	VI 群	VII 群	合 計
1,504点	31点	408点	3点	3点	3点	1,952点
77.05%	1.60%	20.90%	0.15%	0.15%	0.15%	100.00%

※分類不明の10点を除く

表Ⅲ－11 出土石器比率

石 鏃	石槍又はナイフ	石 錐	つまみ付ナイフ	スクレイパー	両面調整石器	Rフレイク	Uフレイク
110点	10点	5点	25点	40点	18点	211点	5点
0.99%	0.09%	0.05%	0.22%	0.36%	0.16%	1.90%	0.05%

ピエス・エスキュー石核	異形石器	原 石	剥 片	石 斧 石のみ	たたき石	すり石	石 錘
63点	3点	8点	10,053点	100点	14点	4点	1点
0.57%	0.03%	0.07%	90.65%	0.90%	0.12%	0.04%	0.01%

砥 石	台 石	石 皿	石製品	礫 礫 片	合 計
1点	2点	1点	3点	413点	11,090点
0.01%	0.02%	0.01%	0.03%	3.72%	100.00%

第IV章 ま と め

平成25年度の登町4遺跡の発掘調査の結果は以下のようにまとめられる。

1. 遺跡の時期としては、縄文時代早期、前期、中期にかけての遺物が出土したほか、僅かながら縄文時代後期、続縄文時代、擦文時代の遺物が出土したが、出土土器の主体となるのは縄文時代早期後半の中茶路式に相当するものである。
2. 出土遺物の総数は13,052点を数え、土器・剥片石器・礫石器等が見られる。
3. 遺跡を特徴づける遺物として、余市町内では最も古い時期に相当する縄文時代早期前半の貝殻文が施された土器のほか、縄文時代早期後半に属すると思われるひょうたん形をした異形石器が出土した。
4. 剥片集中範囲が2ヶ所において検出されたが、その他に遺構は確認されず、石器の器種毎の出土数にやや偏りが見られることと、土器の器形が判別できる程度に復原されたものが殆ど見られないこと等から、直近に集落等が存在した可能性は低いと思われる。また、2年に亘る調査のなかでの出土分布を見ると、土器・石器いずれの遺物も、概ね西側により濃密に集中している。

1については、63頁の表Ⅲ-10を参照頂きたい。I群とした早期が全体の77.05%、次いでⅢ群とした中期が20.90%、II群とした前期が僅かに1.60%、その他はそれぞれ0.15%とごく少量であった。平成24年度調査での出土土器の主体を占めるのは中期後半の北筒式であり、Ⅲ群は全体の93.07%を占めたのに対して、I群とした早期は僅かに3.81%と、隣接する調査区とはいえ、出土傾向に変化が見られた。今年度調査の主体となる縄文時代早期後半の中茶路式は、本遺跡と近接する登町11遺跡において出土が見られるが、平成24年度調査においては確認されていない。これについては68～71頁の出土土器の分布図を参照頂きたい。今年度調査の主体を成すI群b類の出土状況は前年度との境界から不自然なほど明瞭に違いが表れているが、これは表面が摩耗・劣化しており分類が困難な土器が多くあったため、恐らく前年度出土の土器の中にもI群b類と分類すべきものが存在するが、出土傾向に顕著な変化が現れるほどではない。

また、このI群b類は今年度の調査においてH13グリッドを中心に15m前後の範囲の中にまとまって出土している。これについては、この辺りは黒色土が周辺に比べ厚く堆積しており当初は遺構の可能性があると考え、慎重に掘り進めたが遺構は確認されず、その状況から丘陵緩斜面の谷になっている部分に黒色土がより厚く堆積したものである。

前年度調査の主体であるⅢ群の分布は、より標高の高い前年度調査区西側に集中し、東側に位置する今年度調査区には散在する程度となる。これは、特に縄文時代中期頃の遺跡の主体がより北西側の丘陵頂部側、あるいは現在は失われてしまった西側の崖より先にあった丘陵の突端部側にあったことを示しているものと思われる。

これらの出土土器については、器形が判別できる程度に形を成すものが殆ど見られず、調査区の地形を併せて考えると、地すべり等の影響を受け、遺物が本来の場所から移動しているものと思われる。

2については、土層断面の観察からも明らかなように全体に遺物包含層が僅かに残る程度であり、調査区東側に至っては上面が大幅に削平を受け、主たる遺物包含層であるII層が失われ調査当初よりⅢ層がほぼ露出している状況であった。その影響もあり前年度より調査面積が約1.36倍に増えているにも関わらず、出土遺物の総数は前年度の約半分程度にとどまった。

石器については、石鏃を始め小型の定型的な剥片石器は欠損し、器種判別が困難なものも勿論あるなか、完形に近いものも多く見られる。それに比して、石斧はその大半が刃部や基部を欠損したものや、大きく割れて接合されたものや破片であり、かなり酷使された状況が看取される。第46図には両年度の調査において接合された主な石器の出土位置を示したが、そのなかには両年度調査区に跨り約50mを隔てて接合された資料も見られる。また、第45図には、平成24年度調査で出土した礫石器の中で新たに接合されたものを、石斧を中心に掲載したが、そのなかの北海道式石冠については、接合が確認されたことにより、側面を利用した石皿としての転用が明らかとなった資料である。

3の貝殻文が施された縄文時代早期前半の土器については、前年度調査に続いての出土となった。これまでの余市町内にて出土した土器のなかでは最も古い時期のもので、1958（昭和33）年と1962（同37）年に発掘調査された町内梅川町の小高い丘陵に所在する木村台地遺跡において出土している。両側縁に抉りを入れひょうたん形を呈する異形石器については、縄文時代早期後半が主体の美沢3遺跡などの出土例から、今年度登町4遺跡の主体を成す同早期後半の中茶路式に伴うものと思われる。なお、石器としての分類についてはノッチドスクレイパーの要素も認められるが、その大きさからスクレイパーとしての実用性はあまりないと思われ、異形石器とした。

また、前年度調査において旧石器時代に属する可能性がある細石刃様剥片が出土し、今年度調査での出土が期待されたが、注意深く調査を進めたものの、同様の剥片やその製作に関わる石核等の出土は見られず、確証を得るには至らなかった。

4については、剥片集中範囲が2ヶ所において検出されており、C10グリッドに位置するFC-1は人為的な掘り込みは無いが、剥片1,160点（黒曜石1,157点、頁岩3点）と微細なフレイクチップを合わせて182.4gの出土が確認された。D19グリッドに位置するFC-2は、3～5cmほどの剥片がある程度まとまって出土したFC-1ほどの集中は見られなかったため、検出状況等の記録はなく、黒曜石の剥片231点で280.7gが出土している。いずれも僅かではあるが、接合に至った資料も見られた（第40・41図）。また、両範囲から出土した黒曜石剥片を蛍光X線分析による産地同定を行ったところ、試料14点全てが赤井川産であるとの結果が得られた（80～81頁、第V章附編）。

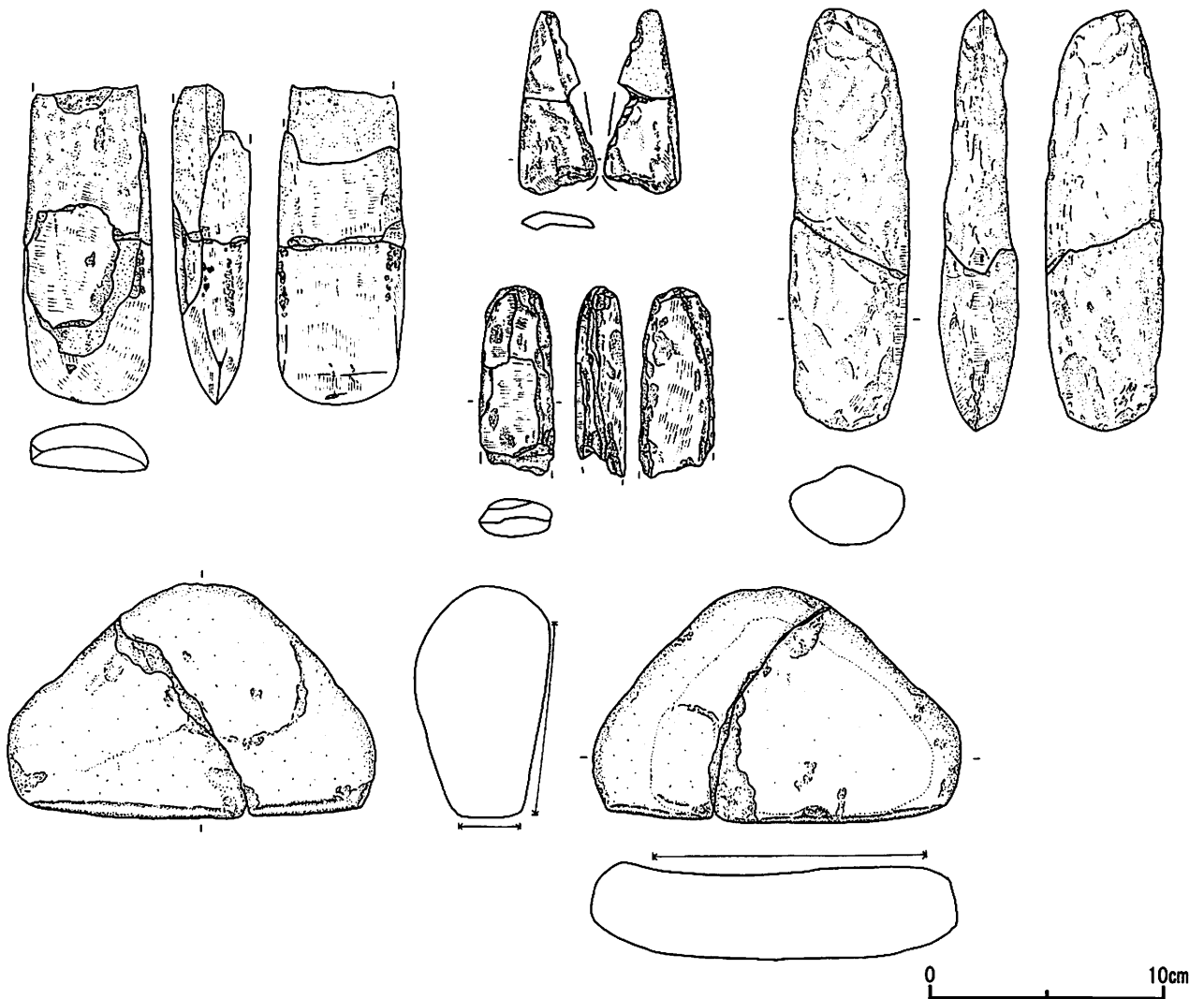
剥片石器の器種毎に見ると、Rフレイク、スクレイパー、石鏃等はある程度まとまった点数が出土している一方、直近の登町2遺跡では珪質頁岩製石鏃の集中が確認されているが、当遺跡においては2年の調査を通じて25点と極端に少なく、珪質頁岩製の一部である。礫石器については、石斧が破片を含め圧倒的に多く、たたき石がまとまった数の出土があった他は各器種とも極端に少ない。

また、前年度調査に続いて留意すべき重要事項である環状列石の出土については、それに繋がるような発見は一切確認されなかった。恐らく環状列石は平成24・25年度調査区のような緩斜面上ではなく、今年度の調査区よりさらに丘陵頂部に近いある程度平坦な場所に存在すると思われる。現在はうっそうとした雑木林の中となり、次年度以降の調査時には是非、環状列石の位置と現状の把握に努めたいと考える。

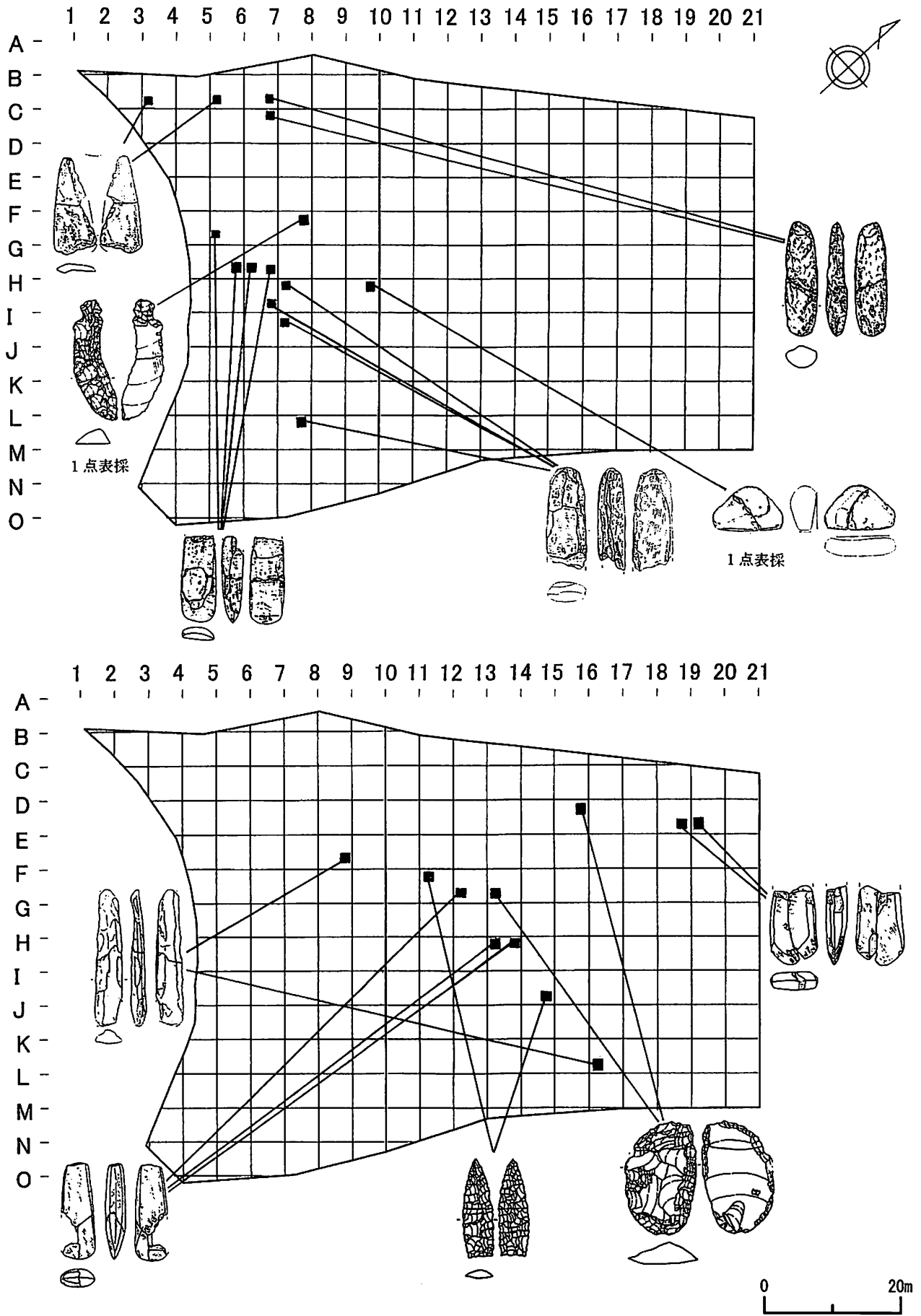
（参考文献）

- 益富壽之助 1955『原色岩石図鑑』
- 余市町教育委員会・余市町郷土研究会 1962『遺跡 木村台地（予報）』郷土研究No.5
- 峰山 巖 1963「木村台地」『北海道の文化』特集号
- 久保武夫 1966「余市海岸の砂丘」『余市高校研究紀要』
- 余市町郷土史編集委員会 1968『余市農業発達史』
- 大場利夫・重松和男 1977「北海道後志支庁余市町西崎山遺跡4区調査報告」『北海道考古学』第13号
- 江別市教育委員会 1982『萩ヶ丘遺跡』江別市文化財調査報告書XV
- 財団法人北海道埋蔵文化財センター 1982『白老町虎杖浜3遺跡』北埋調報11
- 登郷土誌作成委員会 1986『登郷土誌』

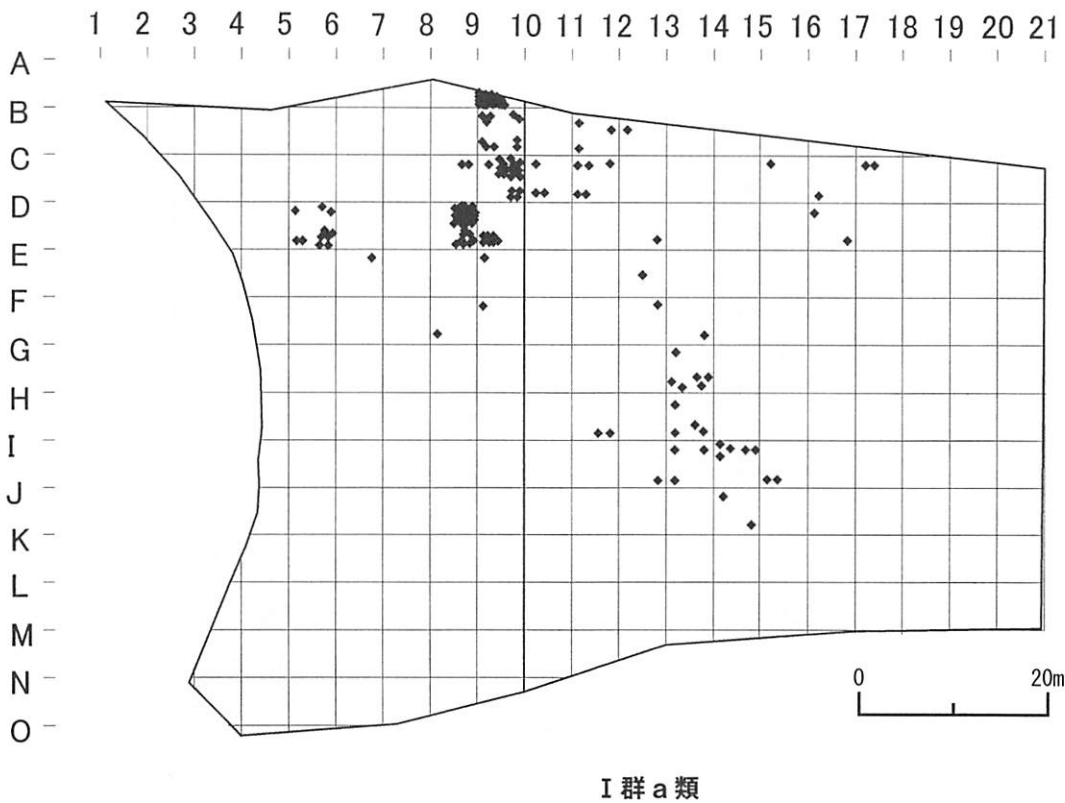
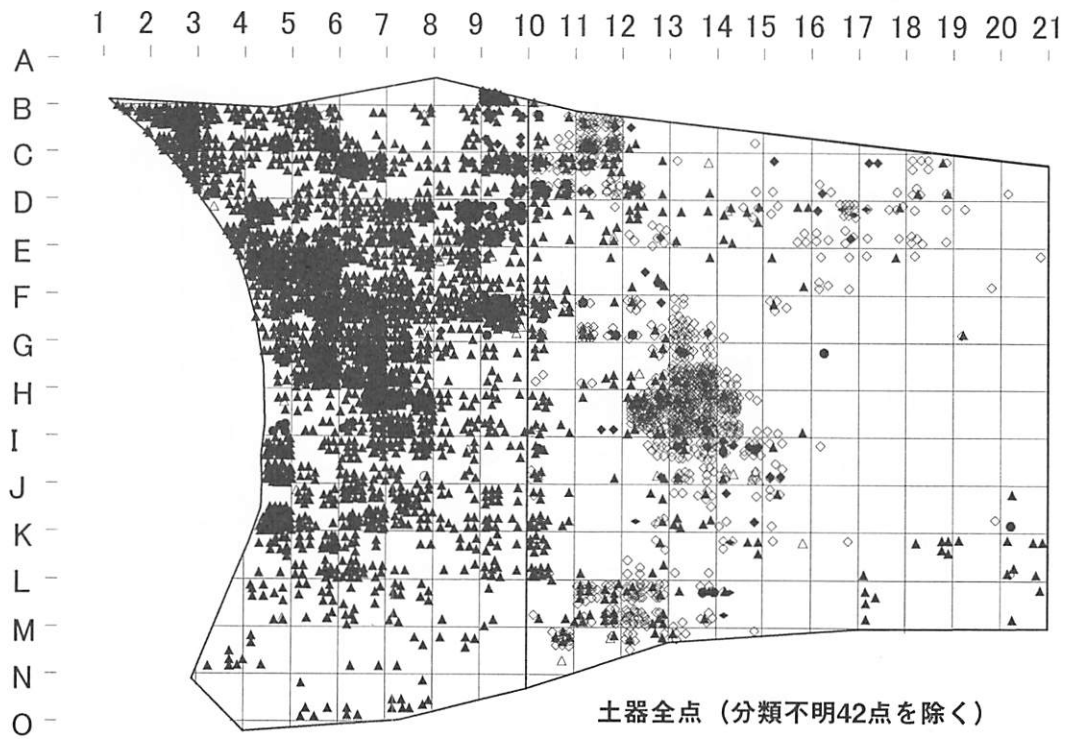
- 大沼忠春 1989「北筒式土器」『縄文土器大観1』小学館
 三宅徹也 1989「円筒下層式土器様式」『縄文土器大観』第1巻
 三宅徹也 1989「円筒上層式土器様式」『縄文土器大観』第1巻
 財北海道埋蔵文化財センター 1990『余市町フゴッベ貝塚』北埋調報72
 財北海道埋蔵文化財センター 1990『栄町5遺跡』北埋調報66
 財北海道埋蔵文化財センター 1990『登町2遺跡・登町3遺跡』北埋調報67
 財北海道埋蔵文化財センター 1994『高岡1遺跡』北埋調報88
 財北海道埋蔵文化財センター 1994『美沢川流域の遺跡群XVII』北埋調報89
 財北海道埋蔵文化財センター 1995『滝里遺跡群V』北埋調報94
 木下亀城・小川留太郎 1995『岩石鉱物』保育社
 豊 遙秋・青木正博 1996『鉱物・岩石』保育社
 財北海道埋蔵文化財センター 1996『石倉貝塚』北埋調報109
 財北海道埋蔵文化財センター 1997『美々・美沢』
 青野友哉他 1998「登町11遺跡工事立会調査報告」『余市水産博物館研究報告』第1号
 余市町教育委員会 1998『余市町登川右岸遺跡』
 財北海道埋蔵文化財センター 1999『キウス4遺跡』北埋調報134
 田才雅彦他 1999「西崎山ストーンサークルの調査について」『余市水産博物館研究報告』第2号
 戸莉賢二・土屋篁 2000『北海道の石』
 熊谷仁志 2001「北海道の縄文土器」『新北海道の古代1旧石器・縄文文化』北海道新聞社
 財北海道埋蔵文化財センター 2001「白老町虎杖浜2遺跡」北埋調報158
 財北海道埋蔵文化財センター 2001『西崎山ストーンサークル』重要遺跡確認調査報告書 第1集
 財北海道埋蔵文化財センター 2002「白老町虎杖浜2遺跡」北埋調報172
 財北海道埋蔵文化財センター 2004『遺跡が語る北海道の歴史ー(財)北海道埋蔵文化財センター25周年記念誌ー』
 フゴッベ洞窟保存調査委員会編 2004『国指定史跡フゴッベ洞窟保存調査事業報告書』



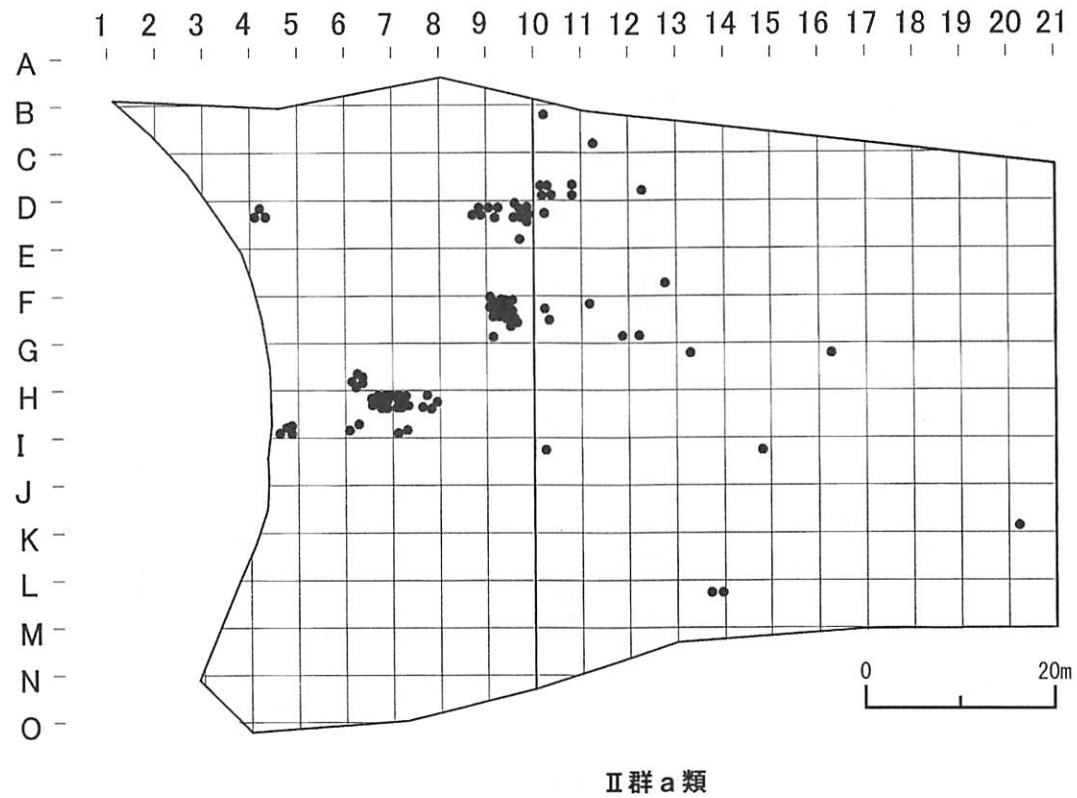
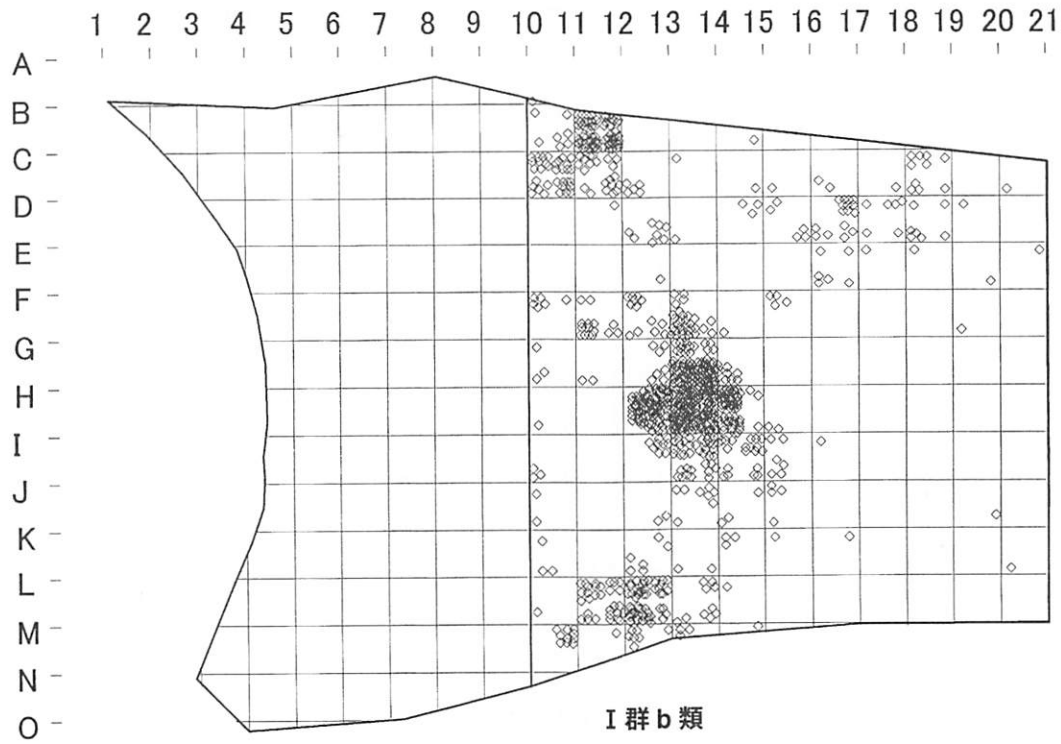
第45図 平成24年度出土 接合資料



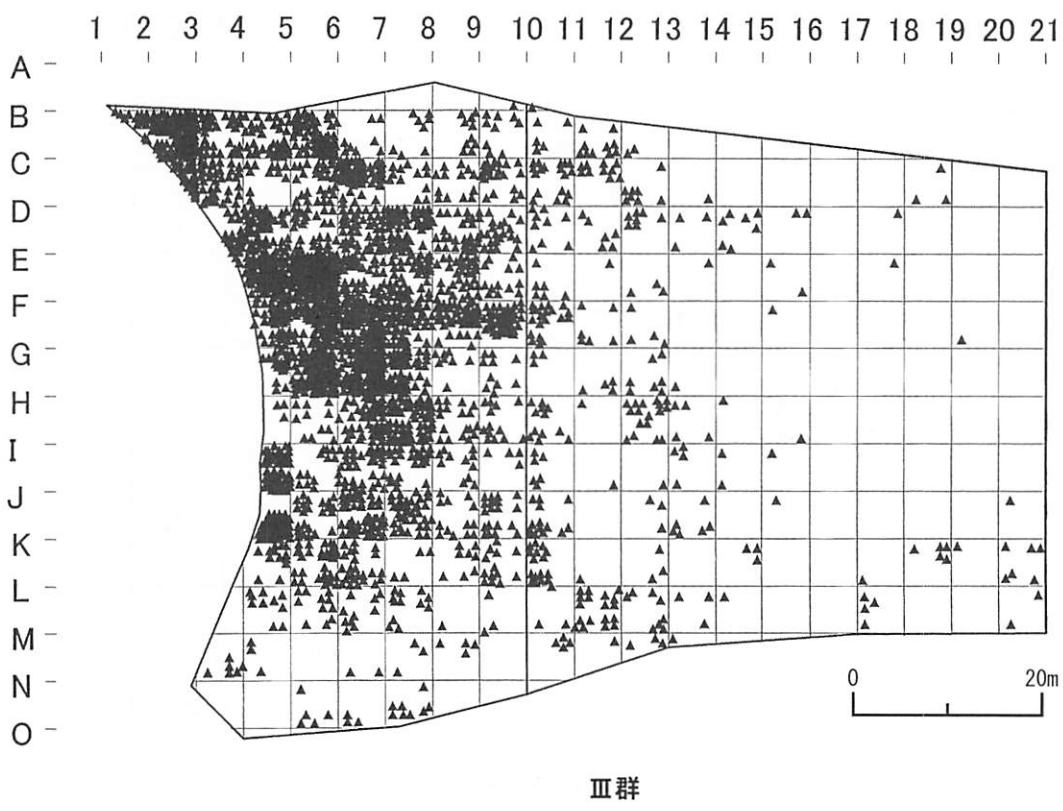
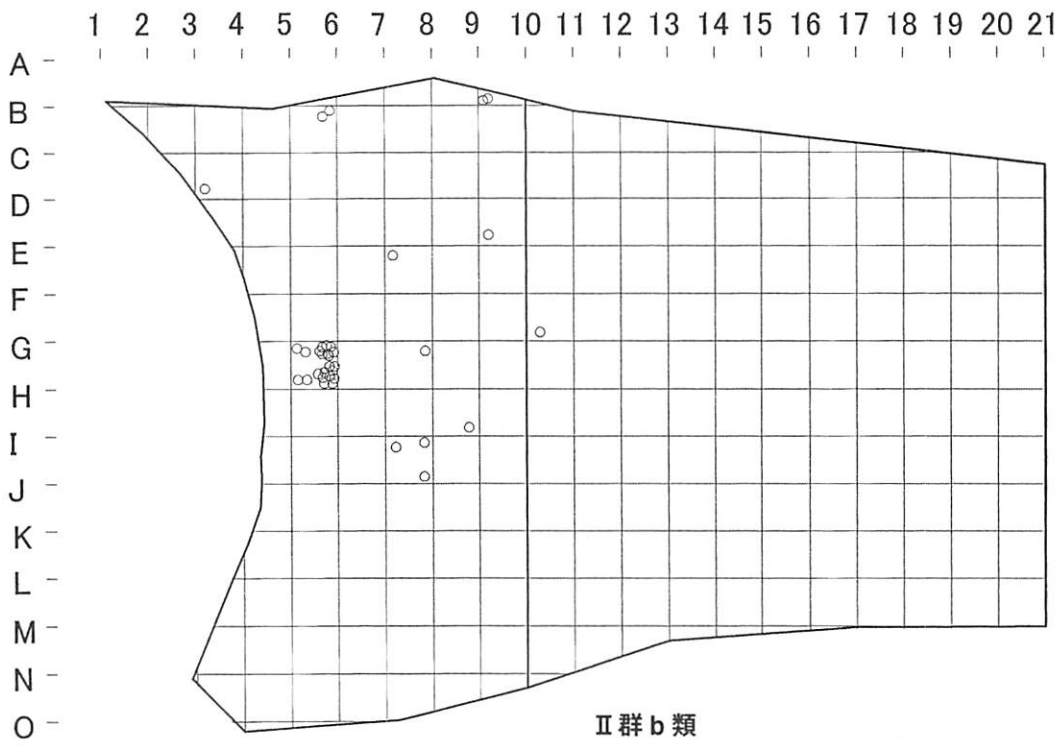
第46図 平成24・25年度 遺物接合相關圖



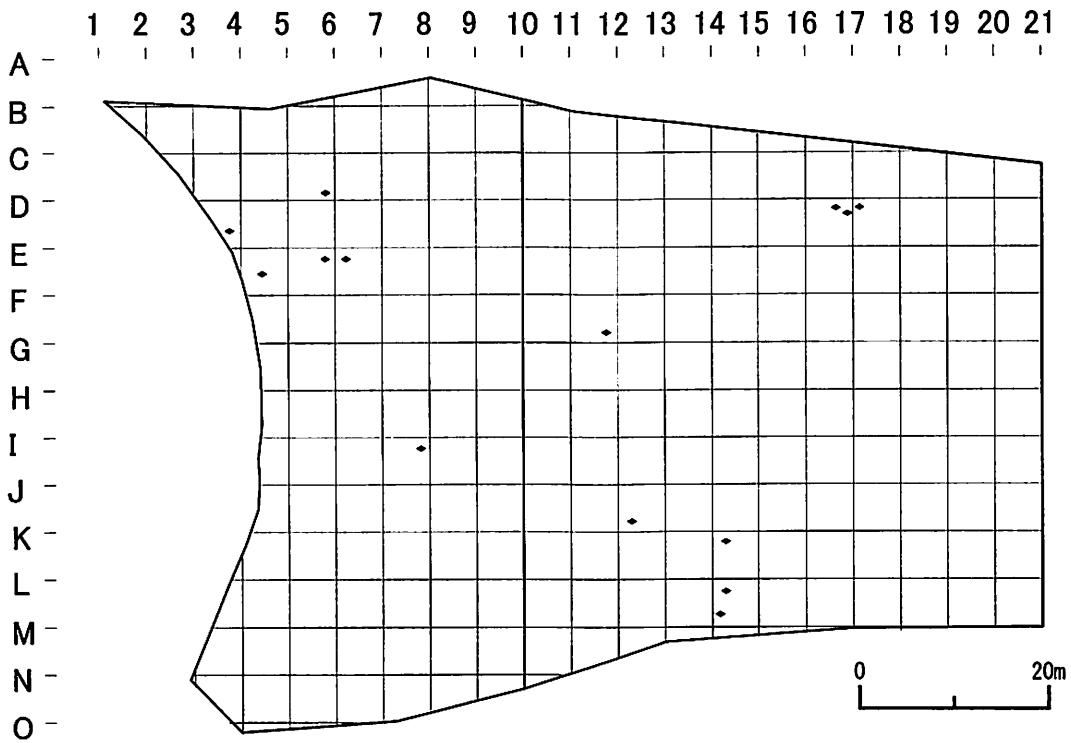
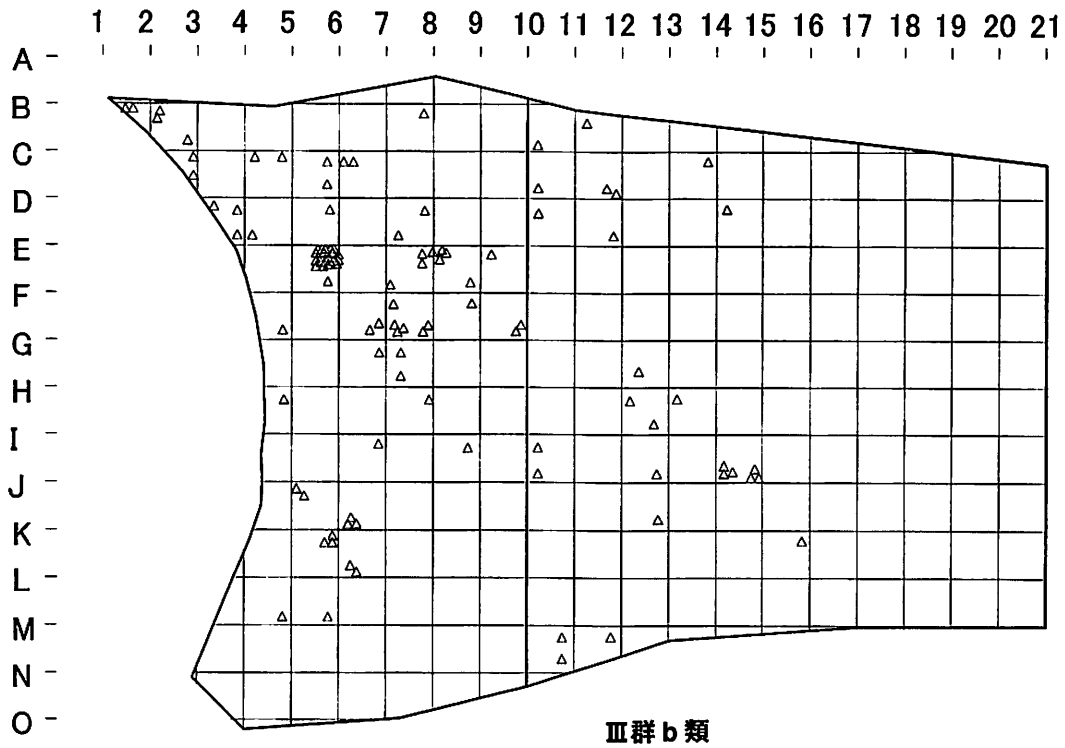
第47図 平成24・25年度 土器分布図 (1)



第48図 平成24・25年度 土器分布図 (2)

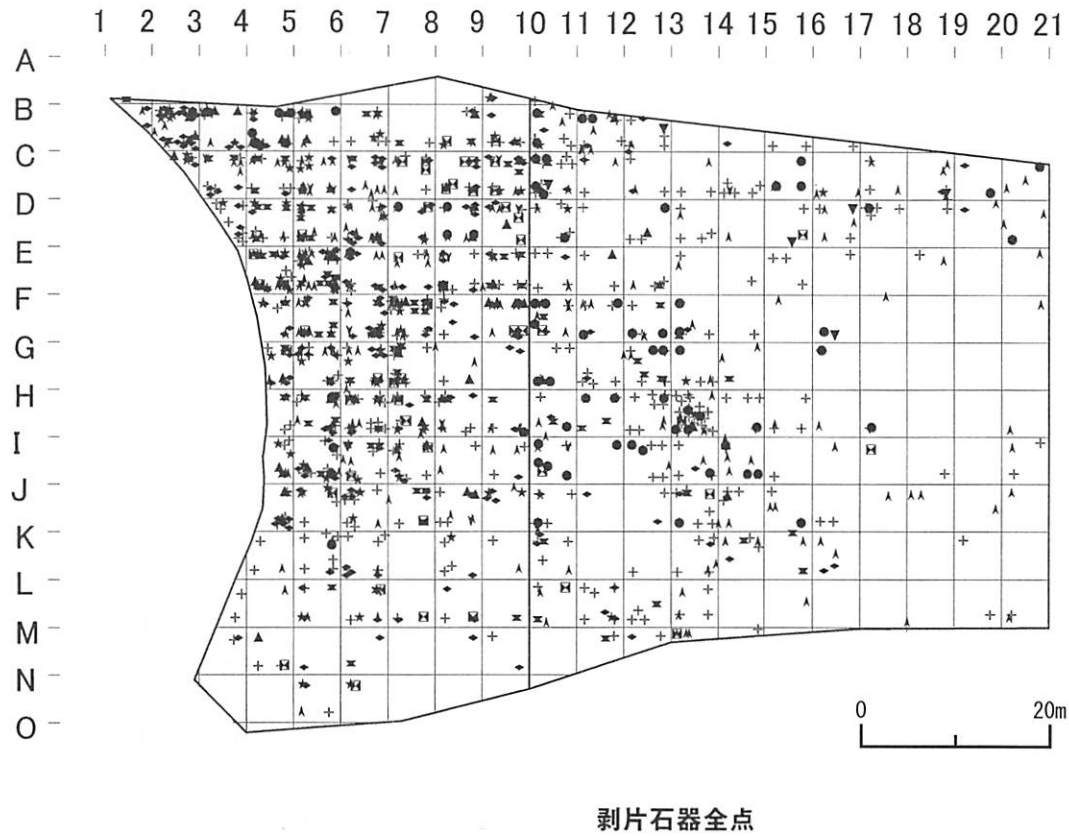
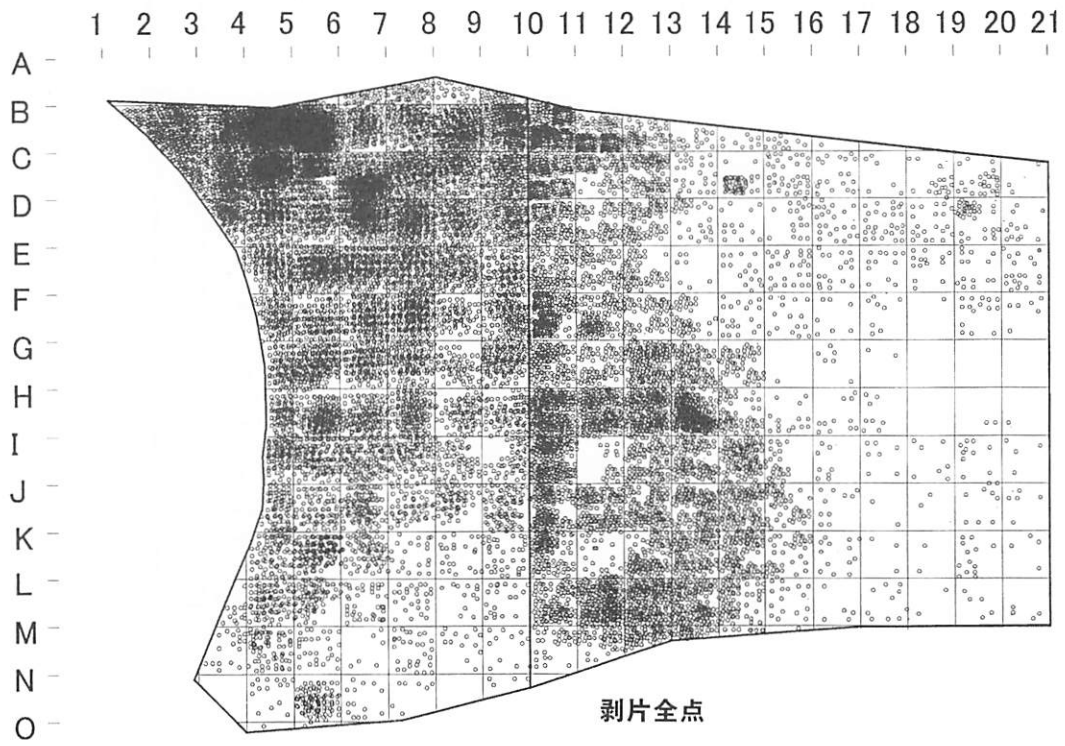


第49図 平成24・25年度 土器分布図 (3)

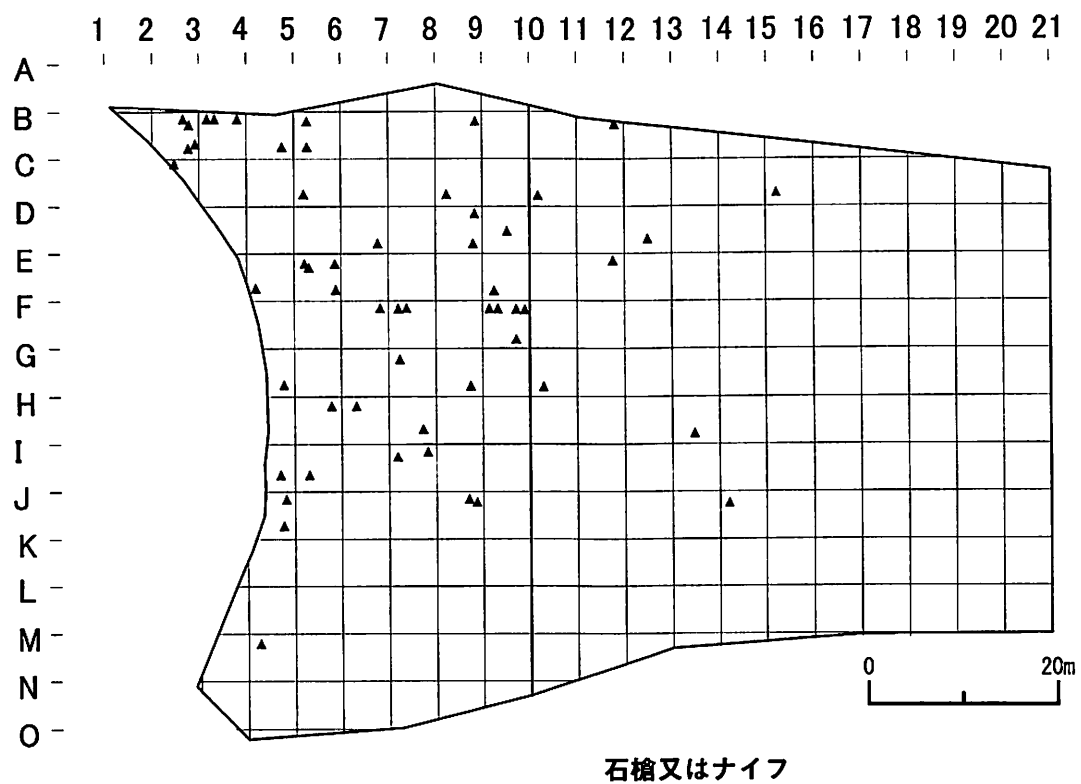
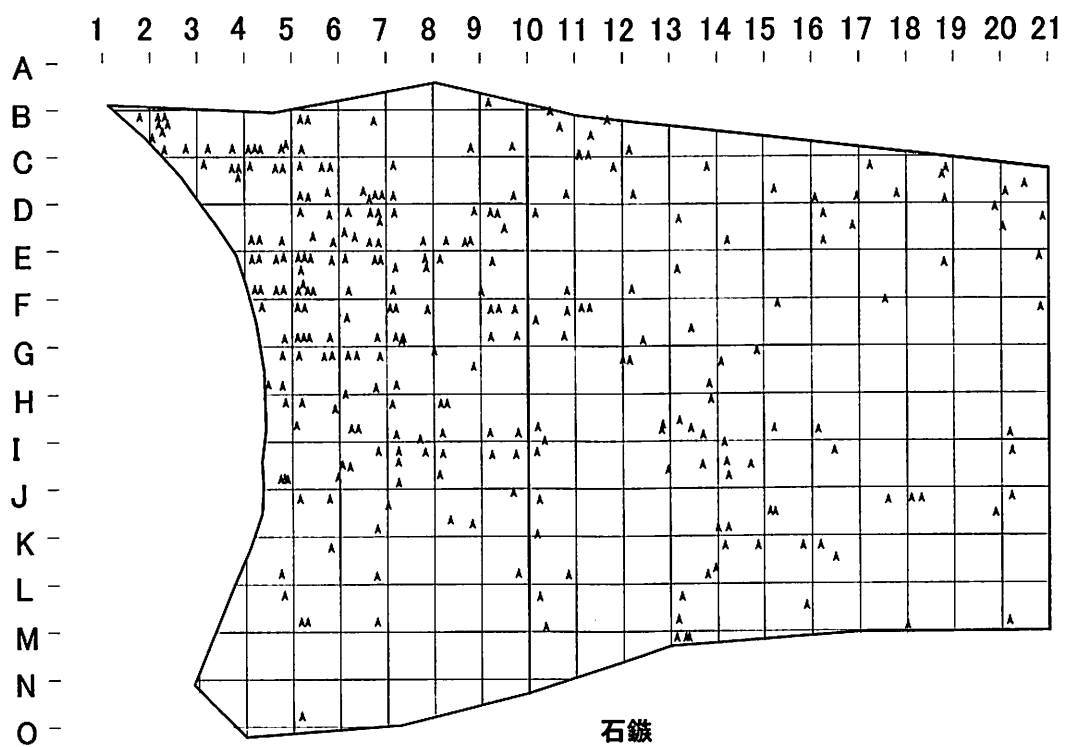
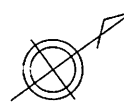


その他 (IV・V・VI・VII群)

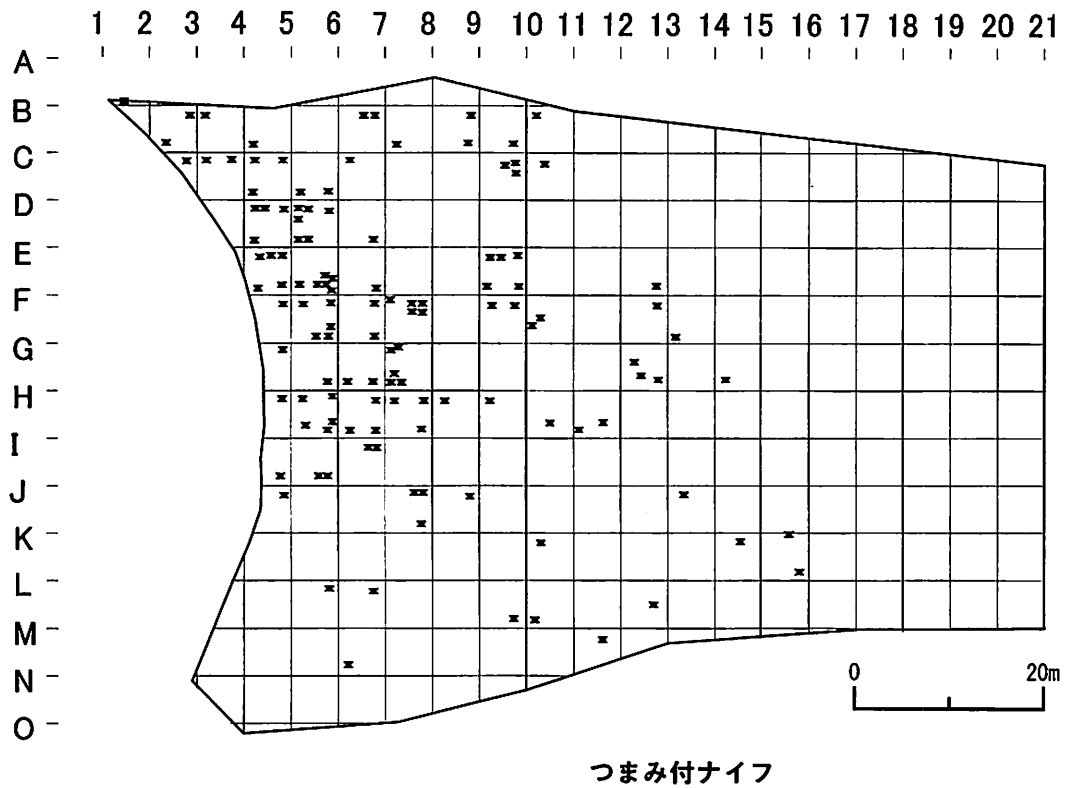
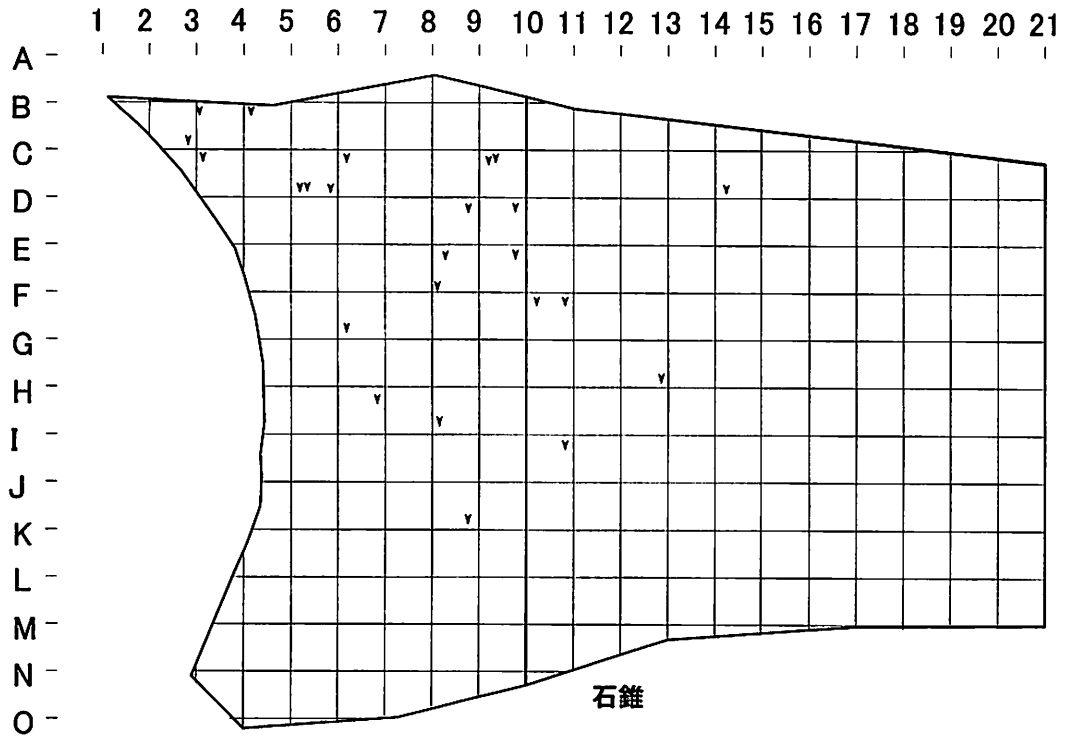
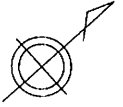
第50図 平成24・25年度 土器分布図 (4)



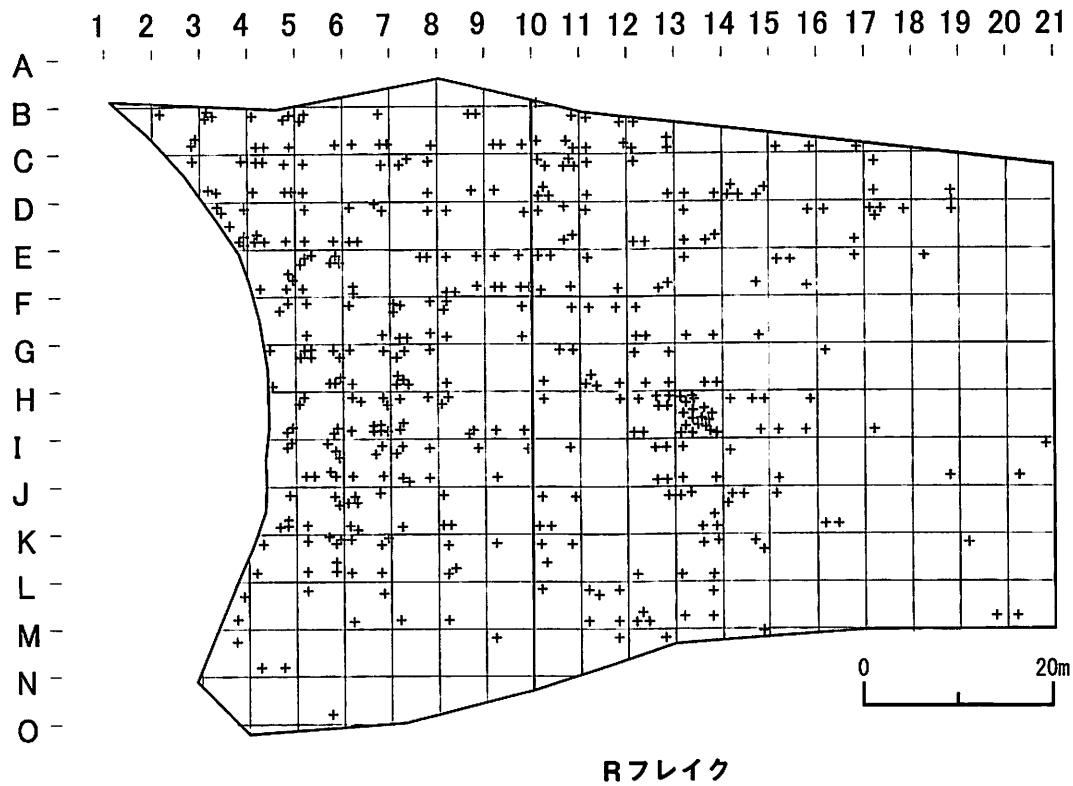
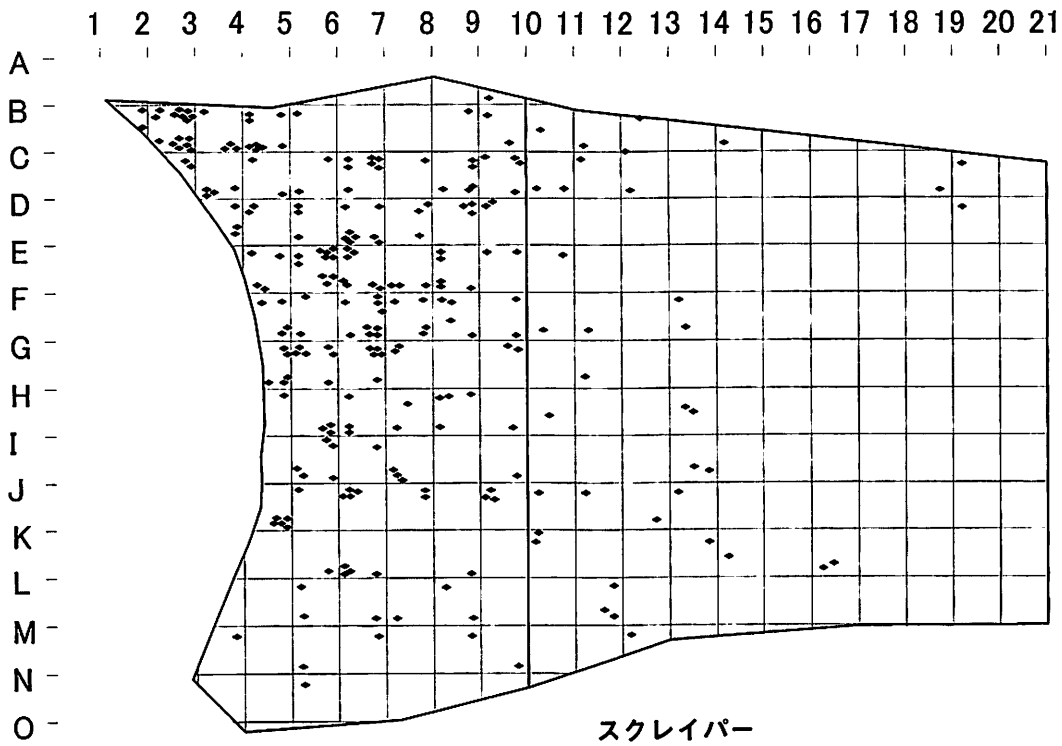
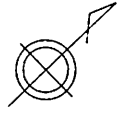
第51図 平成24・25年度 剥片石器・剥片分布図(1)



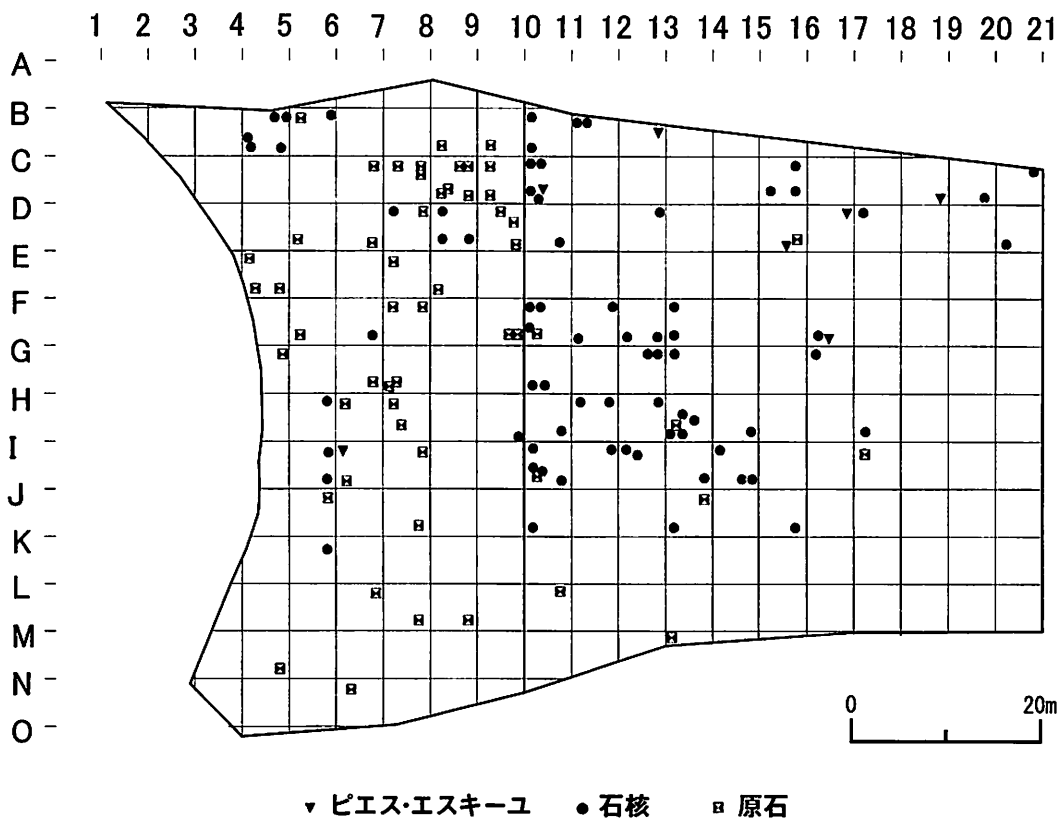
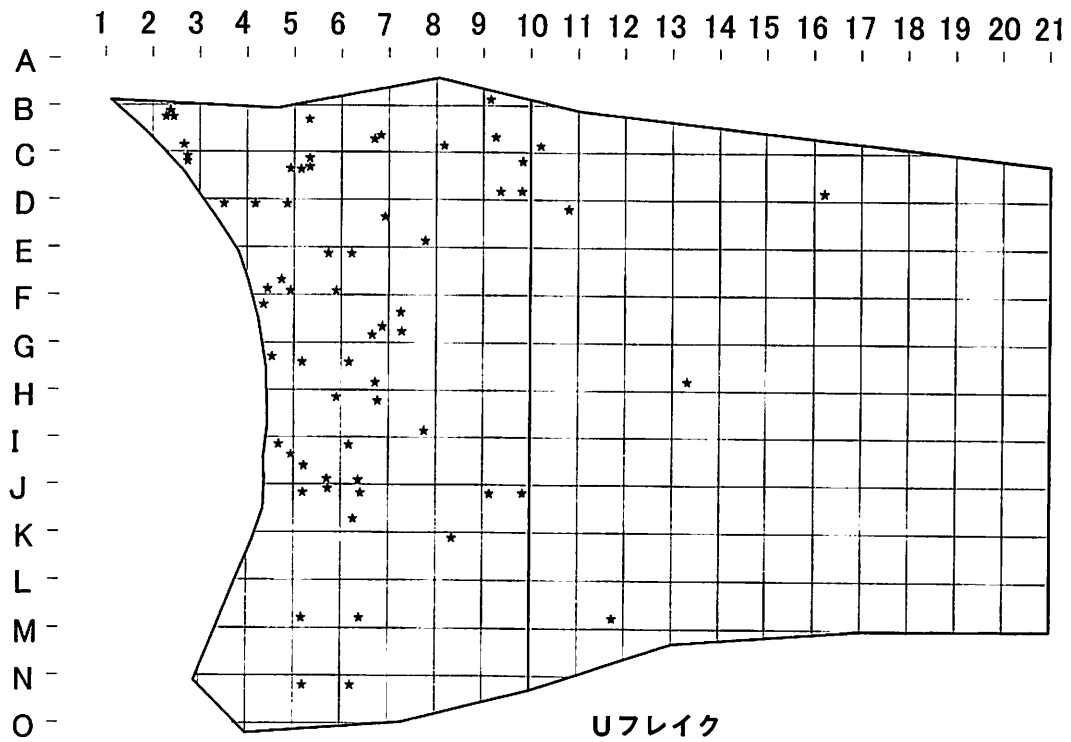
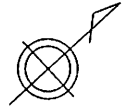
第52図 平成24・25年度 剥片石器・剥片分布図 (2)



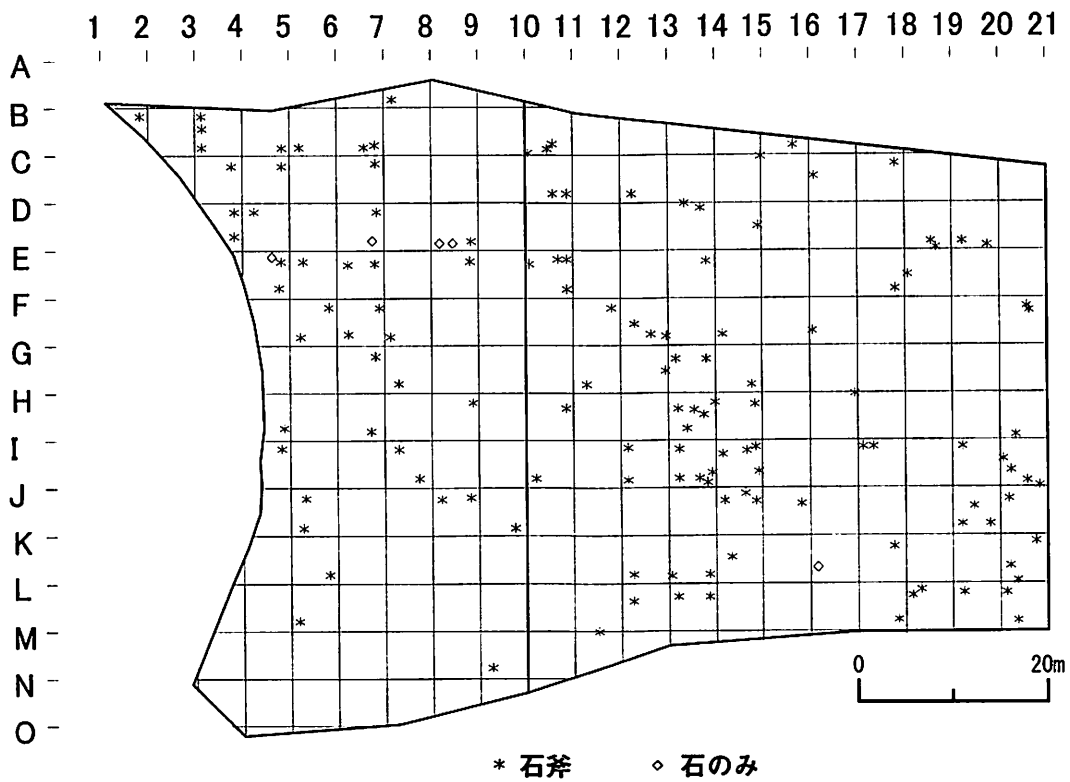
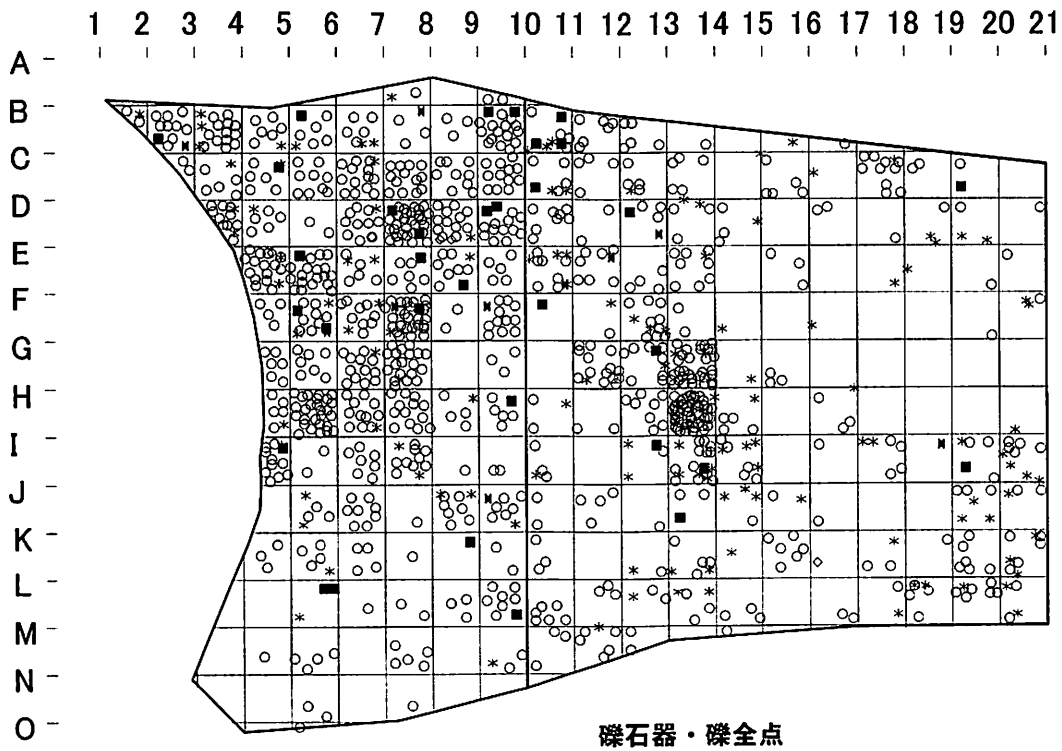
第53図 平成24・25年度 剥片石器・剥片分布図 (3)



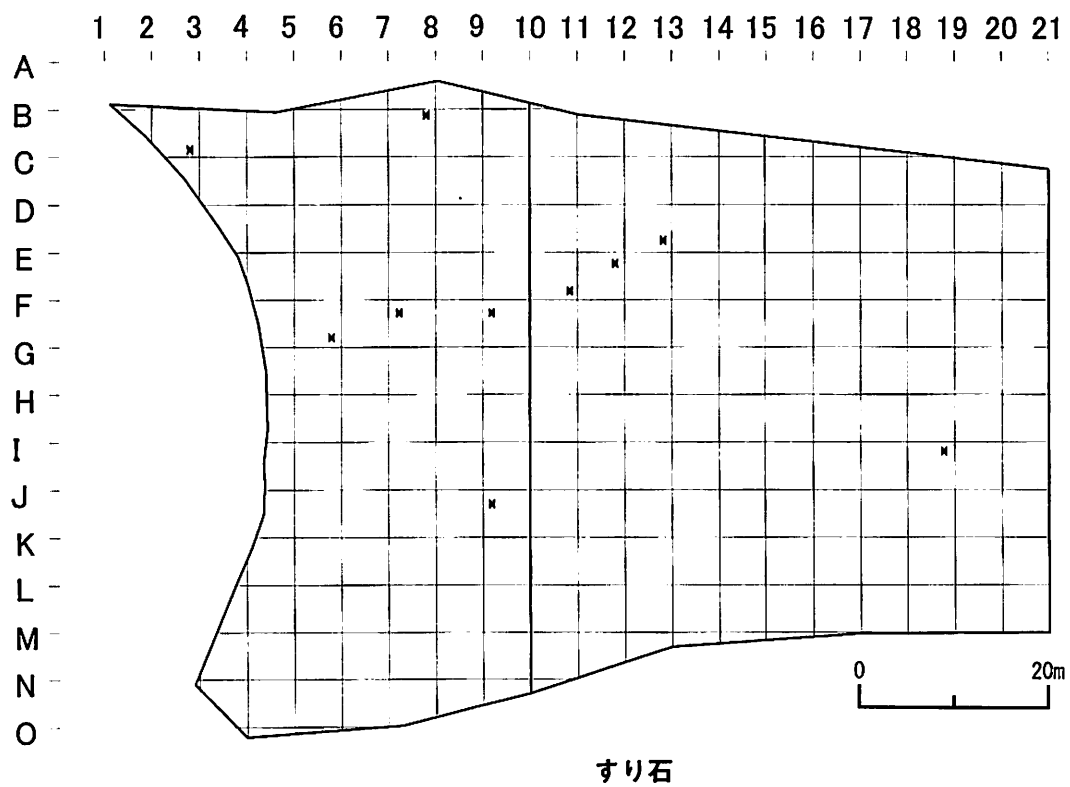
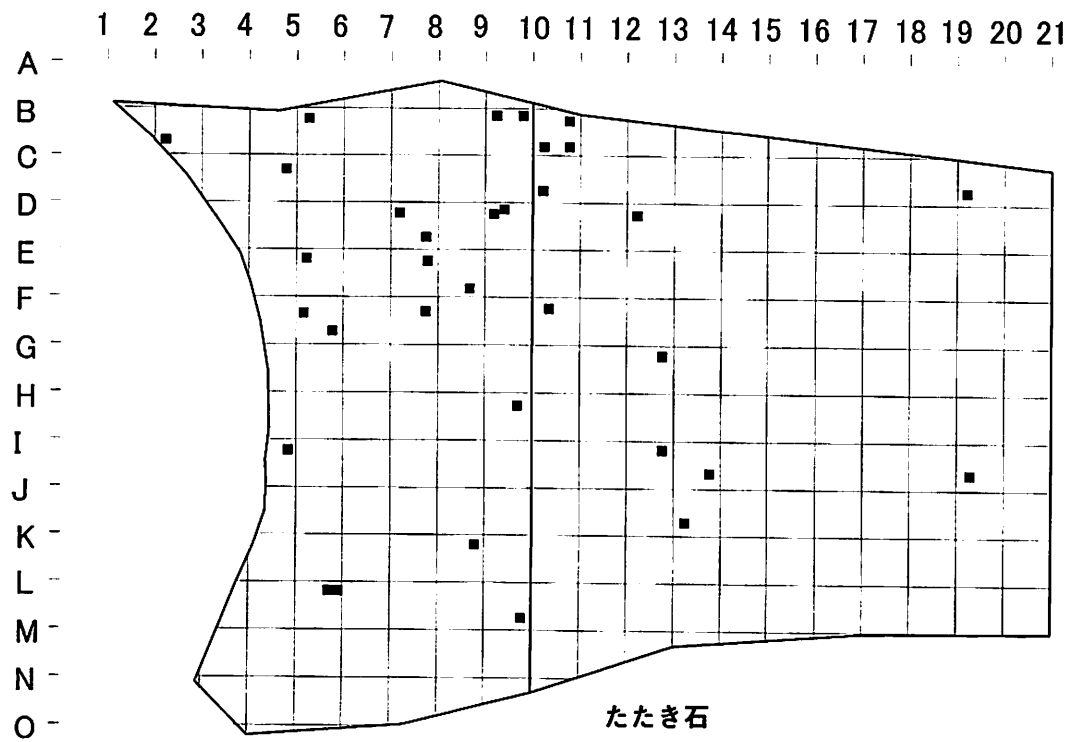
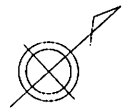
第54図 平成24・25年度 剥片石器・剥片分布図 (4)



第55図 平成24・25年度 剥片石器・剥片分布図 (5)



第56図 平成24・25年度 礫石器・礫分布図 (1)



第57図 平成24・25年度 礫石器・礫分布図 (2)

表Ⅳ－1 平成24・25年度出土遺物一覽表

	土 器					石 器																	合 計										
	I 群	II 群	III 群	その他	不明	石 鏃	石 槍又はナイフ	石 錐	つまみ付ナイフ	スクレイパー	両面調整石器	Rフレイク	Uフレイク	ピエス・エスキュー核	石 斧	異形石器	原石	その他(細石刃様剥片)	剥 片	石 斧	石 錘	たたき石		すり石	北海道式石冠	石 錘	石 鋸	砥 石	台 石	石 皿	石 製品	石 製 礫 片	
I 層	19	9	566	2	5	72	13	8	36	71	4	114	24	2	18	19	8	7,500	27		9	2		2							143	68	8,742
II 層	1,413	83	1,961	11	27	176	29	11	65	127	14	241	25	5	49	2	22	7	13,430	93	5	19	6		1	1	1	1	4	3	388	119	18,339
III 層	174	35	873	1	10	37	13	5	24	57		57	15		6	13	3	5,143	15		5	2	1	1	1	1				148	41	6,681	
表採	7	2	107	1		16	4	1	7	15		34						1	3,162	11		4	1	1						62	22	3,459	
トレンチ	18		3																22											1		44	
FC																			1,391													1,391	
合計	1,631	129	3,510	15	42	301	59	25	132	270	18	446	64	7	73	3	54	19	30,648	146	5	37	11	2	4	2	2	2	4	3	742	250	38,656

表Ⅳ－2 平成24・25年度出土土器比率

I 群	II 群	III 群	IV 群	V 群	VI 群	VII 群	合 計
1,631点	129点	3,510点	3点	2点	7点	3点	5,285点
30.86%	2.44%	66.41%	0.06%	0.04%	0.13%	0.06%	100.000%

※分類不明の42点を除く

表Ⅳ－3 平成24・25年度出土石器比率

石 鏃	石槍又はナイフ	石 錐	つまみ付ナイフ	スクレイパー	両面調整石器	Rフレイク	Uフレイク	ピエス・エスキュー核
301点	59点	25点	132点	270点	18点	446点	64点	80点
0.903%	0.177%	0.075%	0.396%	0.810%	0.054%	1.338%	0.192%	0.240%

異形石器	原 石	その他(細石刃様剥片)	剥 片	石 斧 石のみ	たたき石	すり石 北海道式石冠	石 錘	石 鋸
3点	54点	19点	30,648点	151点	37点	13点	4点	2点
0.009%	0.162%	0.057%	91.956%	0.453%	0.111%	0.039%	0.012%	0.006%

砥 石	台 石	石 皿	石製品	礫 片	合 計
2点	2点	4点	3点	992点	33,329点
0.006%	0.006%	0.012%	0.009%	2.977%	100.000%

第V章 附 編

<附編1> 余市町登町4遺跡出土黒曜石の産地同定

株式会社古環境研究所

1. はじめに

余市町登町に所在する登町4遺跡より出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、原産地の推定を試みた。

2. 試料と方法

対象試料は、登町4遺跡で出土した黒曜石製の石器14点である(表1)。

試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月, 1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム

(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

1) $Rb \text{ 分率} = \frac{Rb \text{ 強度} \times 100}{Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度}}$

2) $Sr \text{ 分率} = \frac{Sr \text{ 強度} \times 100}{Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度}}$

3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$

4) $\log(Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、

表1 分析対象

分析No.	備考
1	FC-1
2	
3	
4	
5	
6	
7	FC-2
8	
9	
10	
11	
12	
13	
14	

表2 北海道・東北地方黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43)、八号沢露頭(15)
		白滝2	7の沢川支流(2)、1K露頭(10)、十勝石沢露頭直下河床(11)、アジサイの滝露頭(10)
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)
	上士幌	上士幌	十勝三股(4)タウシュベツ川右岸(42)、タウシュベツ川左岸(10)、十三ノ沢(32)
	置戸	置戸山	置戸山(5)
		所山	所山(5)
	豊浦	豊浦	豊泉(10)
	旭川	旭川	近文台(8)、雨粉台(2)
	名寄	名寄	忠烈布川(19)
	秩父別	秩父別1	中山(66)
		秩父別2	
		秩父別3	
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)
	留辺蘂	留辺蘂1	ケショマップ川河床(9)
留辺蘂2			
釧路	釧路	釧路市営スキー場(9)、阿寒川右岸(2)、阿寒川左岸(6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸(15)、鶴ヶ坂(10)
	深浦	八森山	岡崎浜(7)、八森山公園(8)
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)
		脇本	脇本海岸(4)
岩手	北上川	北上折居1	北上川(9)、貞城(33)
		北上折居2	
		北上折居3	
山形	羽黒	月山	月山荘前(24)、大越沢(10)
		藤引	たらのき代(19)
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)
	色麻	根岸	根岸(40)
	仙台	秋保1	土蔵(18)
		秋保2	
塩竈	塩竈	塩竈(10)	

産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせることで指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。なお、厚みについては、かなり薄くても測定可能であるが、それでも0.5mm以下では影響を免れないといわれる(望月, 1999)。極端に薄い試料の場合、K強度が相対的に強くなるため、 $\log(\text{Fe強度}/\text{K強度})$ の値が減少する。また、風化試料の場合でも、 $\log(\text{Fe強度}/\text{K強度})$ の値が減少する(望月, 1999)。そのため、試料の測定面にはなるべく綺麗で平坦な面を選んだ。

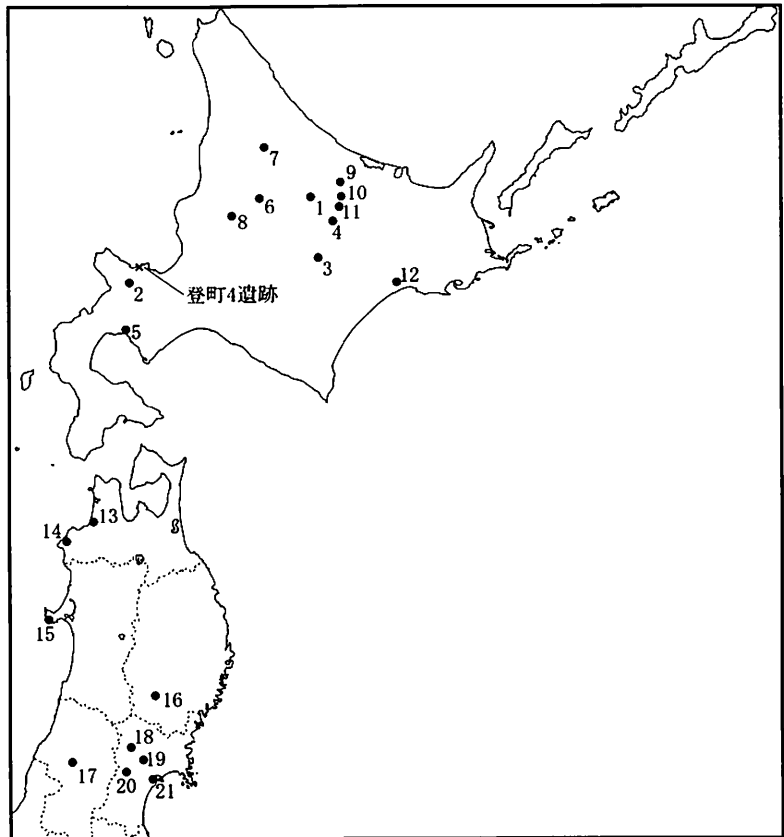


図1 北海道・東北地方の黒曜石原石採取地の分布図

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 結果

表3に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。なお、図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、石器は全て赤井川群の範囲にプロットされ、赤井川エリア産と推定された。表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

表3 測定値および産地推定結果

分析No.	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	$\frac{\text{Mn} \times 100}{\text{Fe}}$	Sr分率	$\log \frac{\text{Fe}}{\text{K}}$	判別群	エリア
1	229.4	79.7	1415.6	546.2	254.0	270.5	562.1	33.45	5.63	15.56	0.79	赤井川	赤井川
2	273.0	97.6	1764.0	675.3	318.0	332.5	684.4	33.59	5.53	15.82	0.81	赤井川	赤井川
3	268.4	93.8	1707.4	675.8	312.6	336.2	697.5	33.42	5.49	15.46	0.80	赤井川	赤井川
4	222.6	77.3	1413.3	561.3	264.8	280.5	585.2	33.18	5.47	15.65	0.80	赤井川	赤井川
5	306.0	109.4	1972.9	749.3	350.6	370.6	759.6	33.60	5.55	15.72	0.81	赤井川	赤井川
6	211.7	73.8	1402.4	527.3	240.9	250.6	509.7	34.50	5.26	15.76	0.82	赤井川	赤井川
7	232.5	83.0	1529.6	586.1	270.8	290.4	607.7	33.40	5.42	15.43	0.82	赤井川	赤井川
8	262.0	92.1	1677.0	634.3	294.2	313.1	644.3	33.63	5.49	15.60	0.81	赤井川	赤井川
9	262.2	91.3	1677.6	663.8	312.0	337.9	697.7	33.00	5.44	15.51	0.81	赤井川	赤井川
10	203.0	70.4	1299.3	522.9	247.0	262.6	553.7	32.97	5.42	15.57	0.81	赤井川	赤井川
11	159.0	55.2	1064.0	362.5	163.1	165.0	338.0	35.24	5.19	15.86	0.83	赤井川	赤井川
12	272.3	96.4	1743.3	682.9	318.9	339.1	705.3	33.38	5.53	15.59	0.81	赤井川	赤井川
13	236.4	85.1	1534.6	567.7	264.4	277.4	572.6	33.75	5.55	15.72	0.81	赤井川	赤井川
14	280.9	97.4	1814.0	680.9	315.6	332.5	690.0	33.72	5.37	15.63	0.81	赤井川	赤井川



調査前風景（北東から）



調査完了風景（北東から）



写真2 発掘作業風景

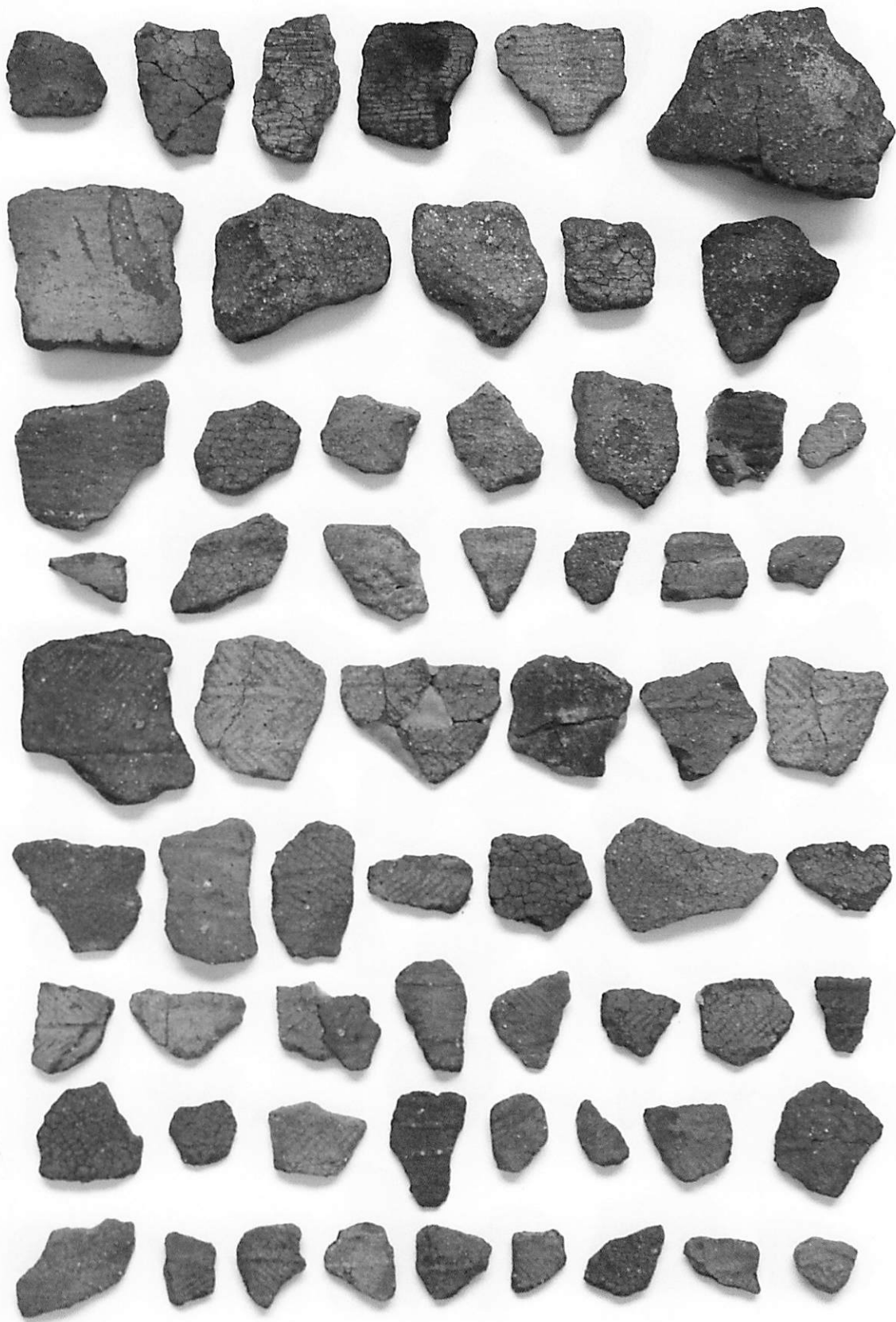


写真3 出土土器 (1)

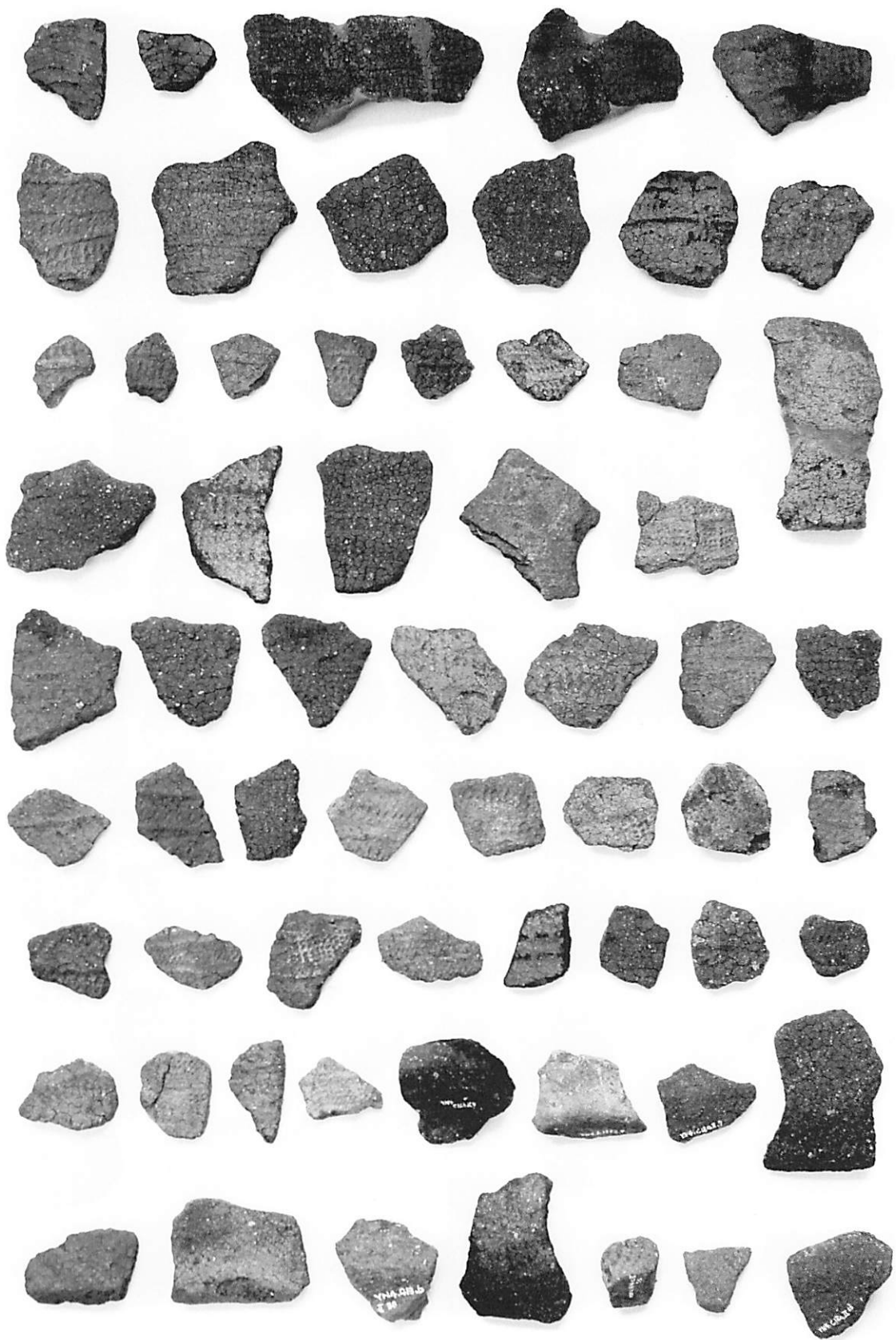


写真4 出土土器(2)

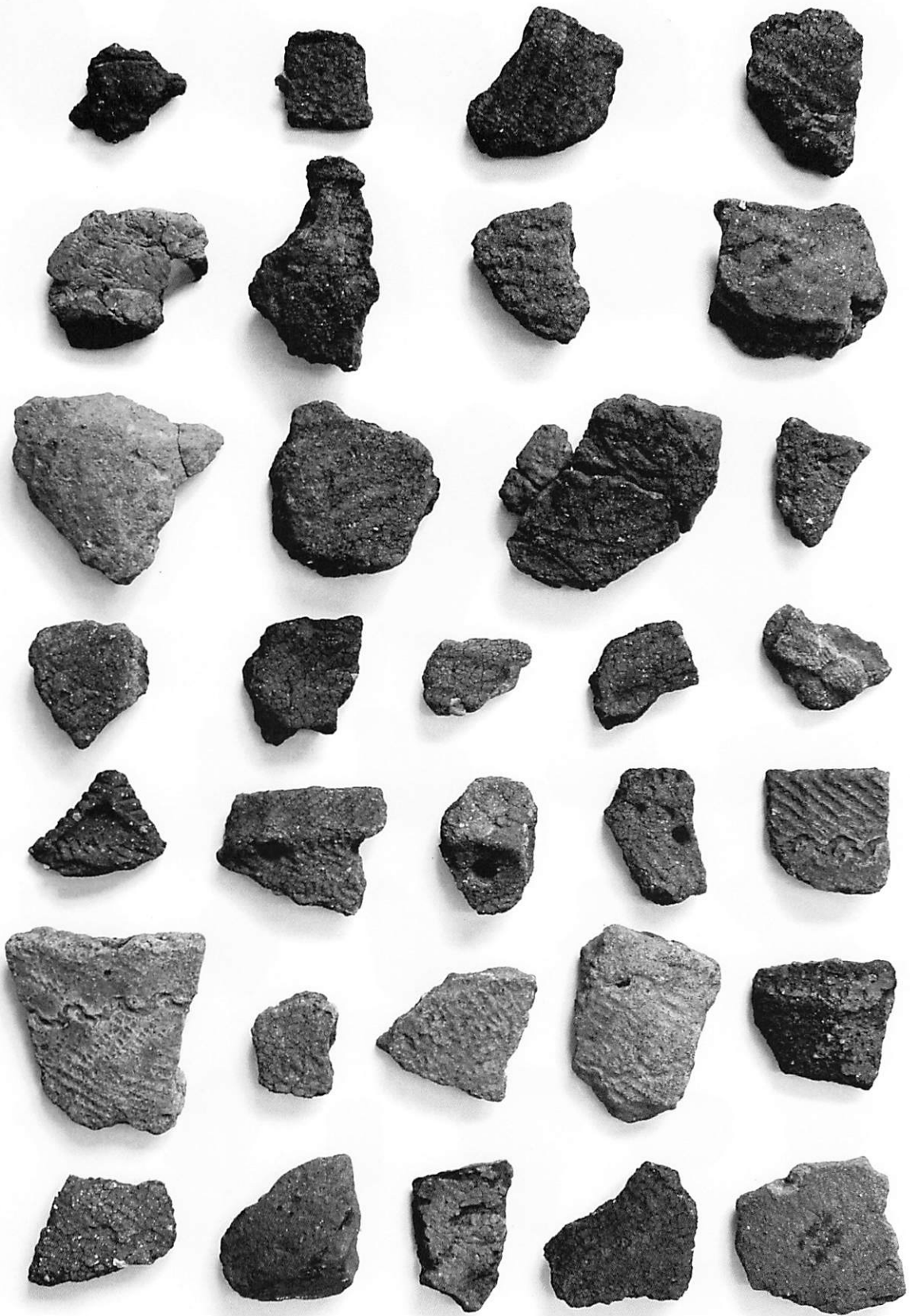


写真5 出土土器 (3)

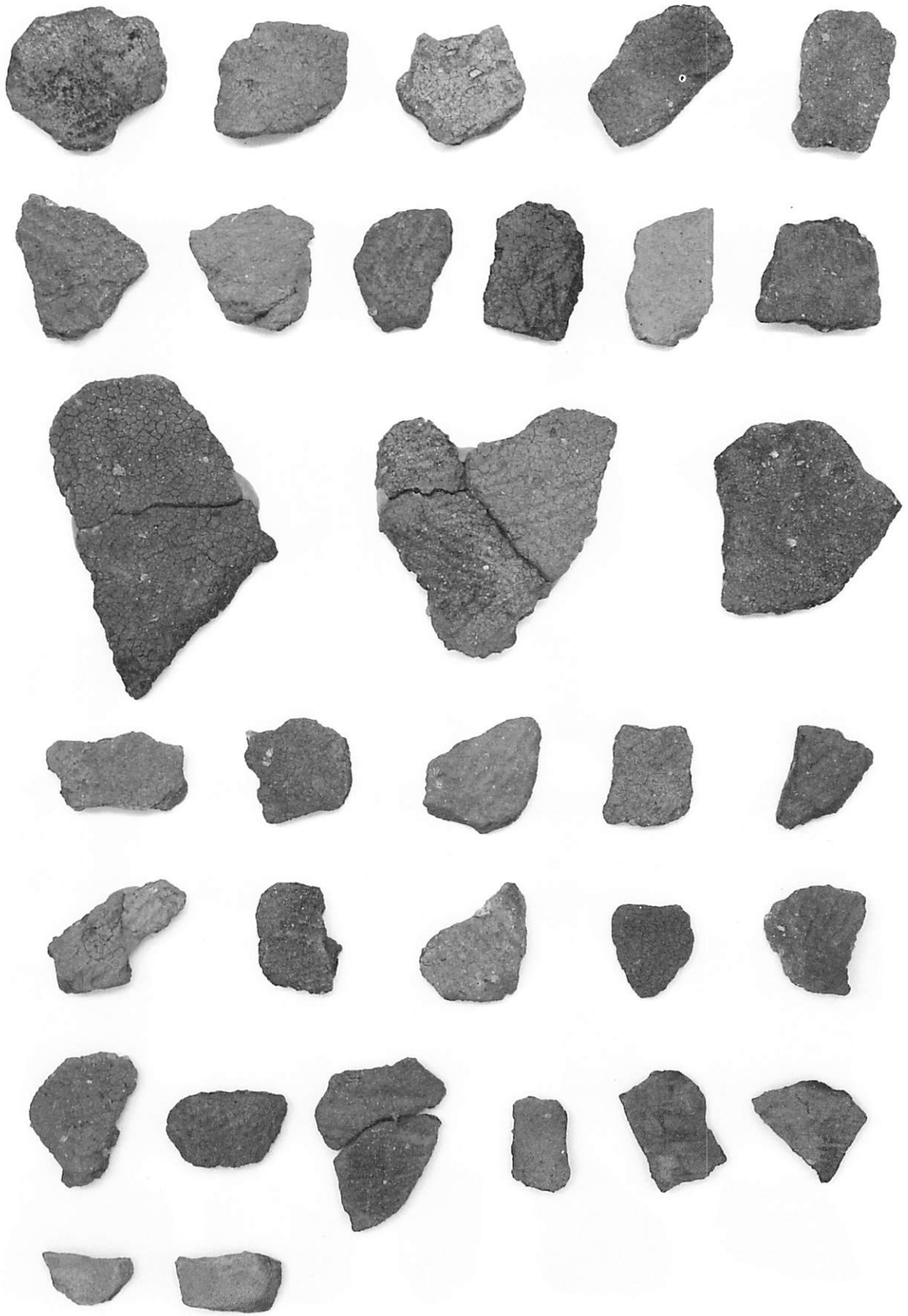


写真6 出土土器 (4)

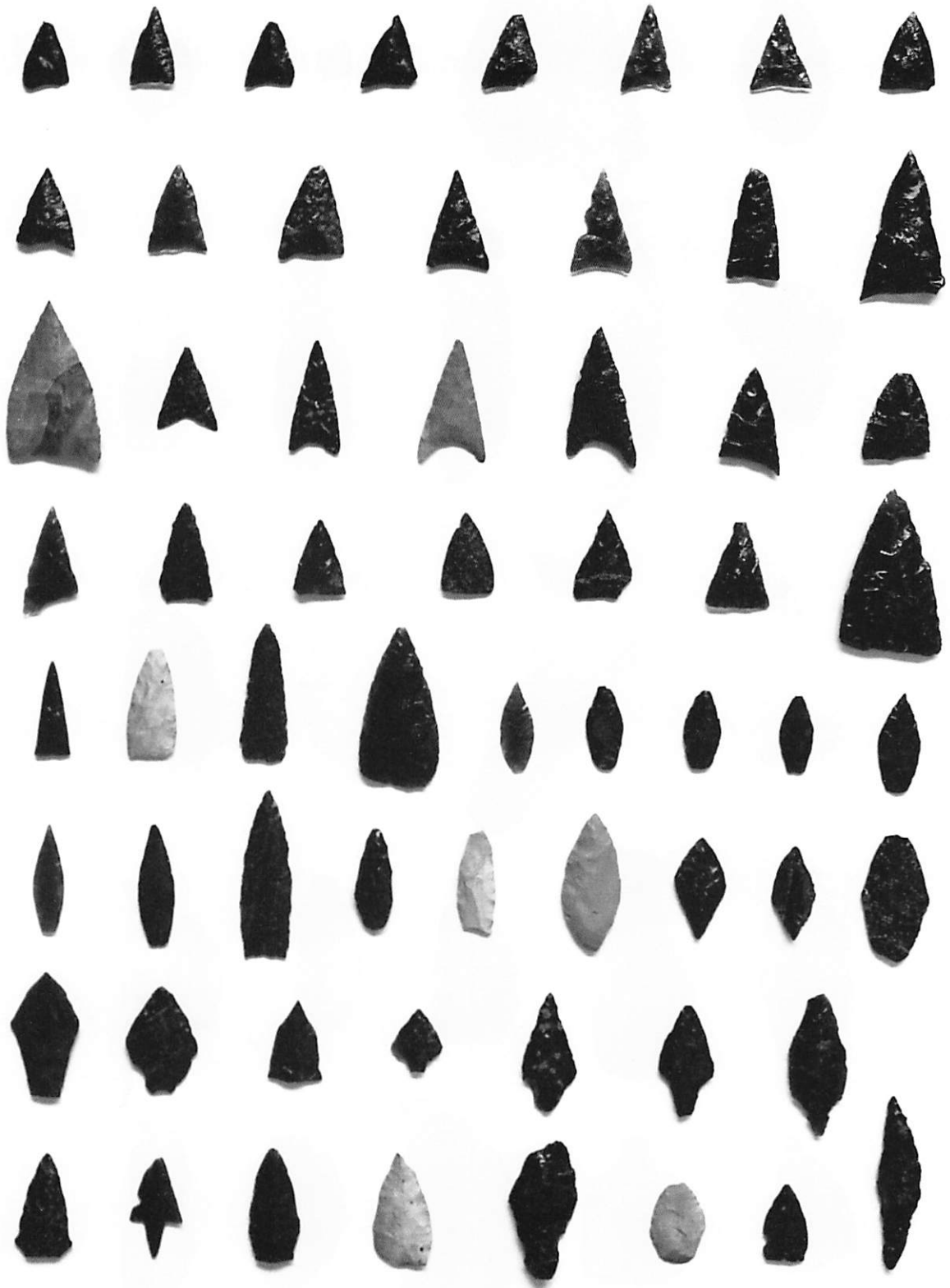


写真7 出土石器 (1)



写真8 出土石器(2)

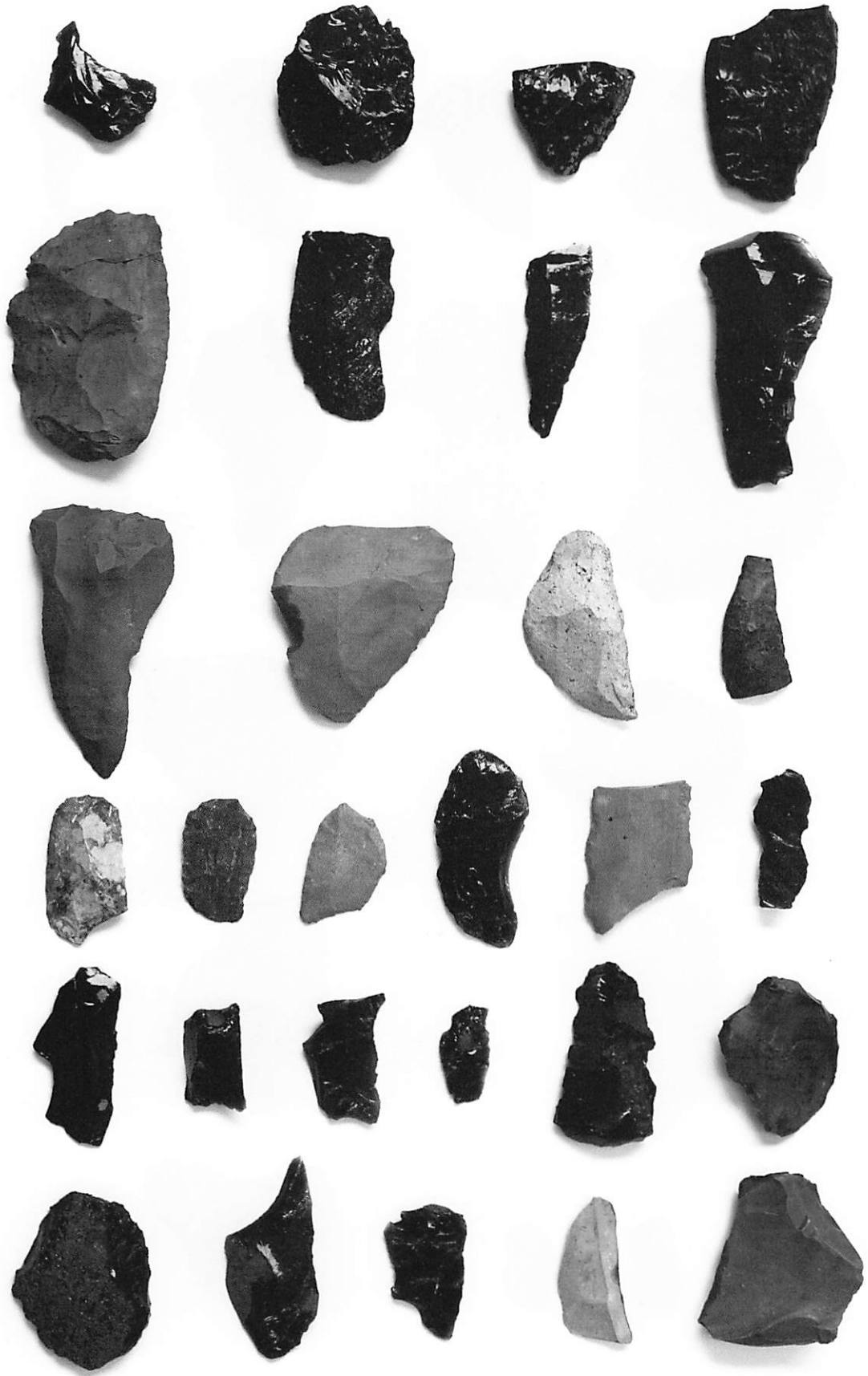


写真9 出土石器 (3)



写真10 出土石器（4）

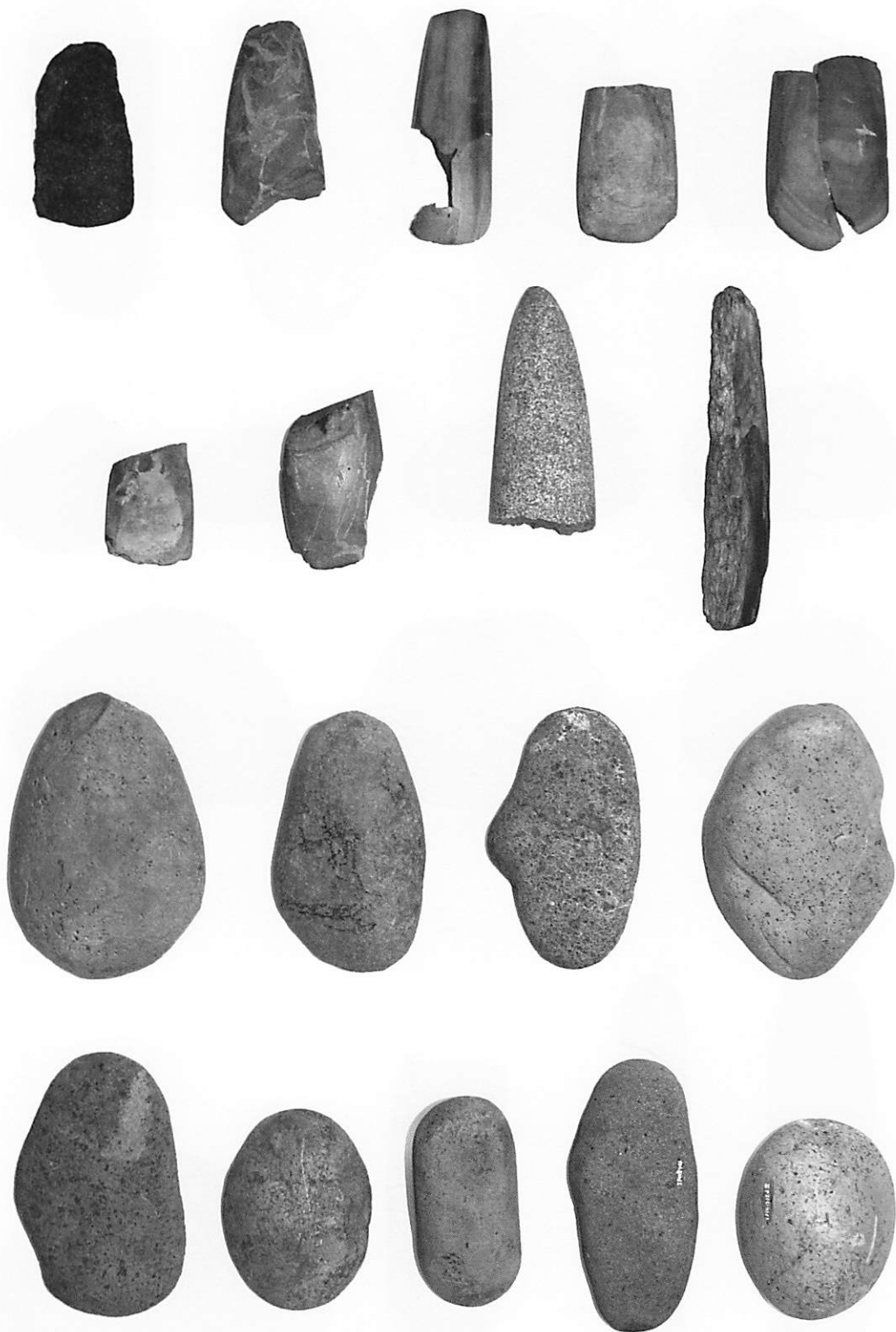


写真11 出土石器 (5)



※下段5点は平成24年度出土接合資料

写真12 出土石器（6）

報告書抄録

ふりがな	のぼりちょう4いせき (2013ねんど)							
書名	登町4遺跡 (2013年度)							
副書名	北海道横断自動車道黒松内釧路線(余市～小樽間) 建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	花田直彦・小川康和							
編集機関	余市町教育委員会							
所在地	〒046-0015 北海道余市郡余市町朝日町26番地 TEL 0135-21-2111							
発行年月日	2014年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査 面積 ㎡	調査 原因
		市町村	遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″			
のぼりちょう 登町4遺跡	ほっかいどう 北海道 よいちぐん 余市郡 よいちちょう 余市町 のぼりちょう 登町	01408	D-19-27	43° 10′ 57″	140° 49′ 34″	2013. 6. 1 ～ 2013. 10. 31	3,000㎡	道路 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
登町4遺跡	その他	縄文時代早期	剥片集中 2ヶ所	土器片 1,962点 剥片石器・剥片 10,551点 礫石器・礫 539点		縄文時代早期 後半の土器に伴 う異形石器のほ か、軽石製石製 品が出土。		

登 町 4 遺 跡

(2013年度)

北海道横断自動車道黒松内釧路線(余市～小樽間) 建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 日 平成26年2月28日
編集・発行 余市町教育委員会
〒046-0015
北海道余市郡余市町朝日町26番地
印刷・製本 株式会社 毛利印刷
北海道余市郡余市町黒川町4丁目93番地
